
第六感の彼女

朱月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第六感の彼女

【Nコード】

N7432C

【作者名】

朱月

【あらすじ】

一年目の高校生活を終え、姉貴との二人暮らしにも慣れてきた二年目の夏。突如現れた幽霊少女と共にオカルト研究会を取り巻く騒動に巻き込まれる。日常と非日常の中で、彼は新しい夢を見つけていく。

プロローグ

十三時五十六分、自宅の一室。

少し、自分が今置かれている状況を整理してみようと思った。

意外だ。こんな状況になっても冷静で居ることができているなんて。こんな俺でも覚悟の一つや二つもてるくらい、皆々様の忠告やら警告やら経験談やらが身にしみていたという事だろうか。

とりあえず現在地をもう少し詳しくお伝えしよう。この家に住んでいる俺でさえあまり立ち入る事が少ない部屋、プライベートが云々は今の世の中常識だ。プライベート抜きにしてもあまり入りたくは無ない場所でもある。

つまるところここは俺の姉貴の部屋で、隙間から中がちらりと見える事はたまにあつたが実際立ち入った記憶は時間の流れで風化してしまうくらい昔の事だ。

部屋の中は薄暗い。電気は落とされていて俺のまわりに数本置かれたロウソクだけが唯一の光源だ。

そして妙に鼻をつく臭い。古今東西のお香を混ぜたような頭が朦朧としてきそうな、そんな臭い。

部屋の主である姉貴は、あまり普段は見ない服を着ている。神社やなにやらの巫女服に近いようでどこか違う気がする。そもそも巫女服なんてものマジで見たことなんて無いので判断はつかない。

足元には奇妙な模様。ファンタジックな紋章みたいだ。会長なら何なのかわかるかもなー。ははは。

そしてその模様の中心で縛られて身動きがとれないでいる、俺。

「って、姉貴いいいい！！な、何しようとしてんだー！！！」

邪神の召喚の生贄にされ果ててしまうのだろうか。江藤悟、17の夏。

ああ、走馬灯が鮮やかに通り抜けていく。

時は七月。夏休みというパラダイスを間近に、試験という超危険な期間を明日に控えたこの時期。クラスメイトのほとんどは自習と題された本日の授業時間を利用して、教科書やら参考書やらを広げている。

私立巫山^{みやま}高等学校。県内でも指折りの進学校である我が母校は近隣住民の知名度で言えばトップに君臨していると言ってもおかしくはなく、この学校で良い成績を残して卒業した者は大学、企業からかなりの優遇を受けるといつても過言ではない。しかしながら働き蜂の原理というやつか、通ってるやつ全員頭が良いかと言われるとそうでもない。わかりやすい例が俺。つまり俺はそんなに成績がいいというわけではないのでこの時間を無駄にはいけないはずなのだが……。

「クソさみい……」

異変が起こったのは今日の朝方。

今日は夏らしい熱い一日になるでしょうとかなんとかの天気予報とまさにそのとおりになるべくして訪れたような蒸し蒸しとした朝の陽気。

両親が他界して姉貴との二人暮らしが始まってからそれなりの時間がたち、朝起きた時居間に朝食が用意されていないのにも慣れてしまった。誰もいないテーブルには箸立てとテレビのリモコン。新聞、とってこないとな。

「姉貴は、帰ってるな」

玄関には姉貴の靴が揃えられる事無く散らかっている。市内の病院に勤務している姉貴は昨夜夜勤だったようで朝帰りアンド現在就寝中のような。病院内で何か問題が起きたらしくて最近夜勤でなく

ても帰りが遅かったし起こさないようにしないと。

「さて、ちゃっちゃと飯作って学校行くか」

本日の朝御飯のメニューは昨日の晩御飯の残り、以上。これじゃ作ったなんて言えないな。

晩飯時には幾分味気なくなりはするものの、あらかじめ次の朝食を兼ねたモノを作る事が多いので、朝の貴重な時間を無駄にせずにごす事が出来る。

およそ昼食までには十分持つであろうと思われる量を胃袋にいれ、登校前の残り僅かの在宅時間をとってきた新聞のテレビ欄を見て過ごす。高校生の身分ではそれ以上新聞で仕入れる必要がある情報はそれくらいだ。

さて、そろそろ出発するかと腰を上げて玄関から一歩外に出た瞬間、

世界は一変した。

午前中はテスト範囲をおさらいするだけの授業、午後は授業とは名ばかりの教師すらいらない自習時間。大多数の生徒が自らの机の上でシャーペンでノートに文字を書き、参考書に蛍光ペンでマークするなど手を動かしている中、すでに極寒サバイバルを数時間耐え抜いていた俺はそろそろ限界カナーとか思ったり、ちよつと人間として大事なネジがどうにかしてしまっただけだったりしていた。

「悟、あんたマジ冷たいわよ。まるで死体みたい」

「この人間氷枕め。ところで、俺んちの冷房として雇われる気はないか」

昔から風邪すらほとんどかからない俺の苦しみっぷりを見て物珍しげに悪友が群がってくる。二人して俺をペタペタさわってくるな。

あー、でも人の手ってこんな暖かかったんだなあ……。人の暖かさ

に改めて感謝、じゃなくて少し触りすぎだアンタら！

綾はもう少し女として自覚を持って！変な誤解されるだろう？

雄ももう少し男として自覚を持って。変な誤解されるだろう？

どちらかというと、雄のほうの誤解のがやつかいだ。

「おー。こりゃ気持ちいいわー。今日はほんっと熱いからね。ありがたやありがたや」

女にしては高めの身長と、短めに切られたどこから見ても日本人を思わせる黒髪が俺の視界の端でゆらゆらと揺れている。

かりやあや狩谷綾。俺の幼馴染その1で一応女だ。俺や雄とばつか遊んでたから、ちよつと変な育ち方したのかなあ。気兼ねなくコミュニケーションがとれる友人というのは貴重だが、女らしさとかそういうものをもっと大切にしてほしい。

「おい、綾。お前ばつかりずるいぞ。俺にも夏のご神仏の恩恵に与らせろ」

そして逆の視界の端では男の中でもでかいほうに入る身長に、綾と同じ黒い長髪が同じようにゆらゆらと揺れている。

この野郎は狩谷雄。かりやゆう幼馴染その2で生意気にもイケメンの部類に入るルックスを持ちながら、学年で1、2を争うほどの成績優秀者という人として中々高スペックに入る部類の人間だ。

二人は名字からもわかるが双子の兄妹で、俺んちのお隣さんというごくごくごくありがちな腐れ縁だ。

「へっぷし！……こりゃ、もしかしたら原因は姉貴系なのかな。いつか巻き添え食うとは思ってたけど……」

この非現実的な寒気……というより、俺の体温自体がすでに人のモノじゃない。綾の言う、死体みたいというのはもしかしたらものすごく的を射た表現かもしれない。

「ハナさんの？……むむ、ありえなくもない所がさすがハナさん……」

俺の姉貴、江藤被奈はえいじはな一応看護師という真つ当な職業に就いてるとされているんだけど実は……。

ぶるつと一際寒気が走る。考えれば考えるほど姉貴系な気がしてきた。段々机が暖かく感じてきましたヨ？

「原因がハナさん系なら、ハナさんになんとかしてもらおうのが早い

んじゃねえの？」

ハツと伏せていた机から跳ね起きる。なるほど、そりや至極当然な考えだ。

「雄、お前頭良いな」

「馬鹿にしてんのかよ」

いやいや、まったくもって盲点だった。今朝は姉貴、夜勤明けで寝てたもんですっかり失念してた。

「なら今日はもう早退しちやいなさいよ。どうせ一日自習だし、このままじゃその自習もままならないでしょ」

自習する気が最初っから無いヤツが何を言うか。

しかし早退か……。美しい響きだな。

「付き添い2名許可してもらうにはお前の病人っぷりにかかっている。がんばれよ！」

自分が帰りたい口実かよつ。

とはいえ、付き添いがいるのは正直助かる。無事1人で帰れるかわかったものじゃなさそうだ。この悪質の風邪……。かどうかも微妙な病に侵されたこの体では。

それにしても早退するにはどうすりゃいいんだっけ？確か、保健室行って早退許可証もらうんだっけか。確か生徒手帳に……。

「じゃあ帰ろつか。悟も早く帰り支度しなさいよ」

兄妹そろって鞆を担いで既にドアの前に待機していた。

準備はやいっすね、あんたら。

全く……。明日からテストだっていうのになあ。

この学校の本館は五階構造で、一番上は生徒会室や学園祭などの作業なんかに使ったりする空き教室がある。そこから四階に1年、三階に二年、二階に三年とクラスがあがることに教室に行くのが楽になるようになっており、1階には職員室、図書室などがある。三年ともなると図書室や職員室にお世話になることが多くなるからだろうか？

保健室も1階にある一室で、どこの学校でも大抵呼ばれているよう

だが、お約束の様にサボリの聖地とも呼ばれている。うちの学校はそもそも先生がサボリ魔なので仮病から重病まで保健室の受け入れ態勢は広い。

二年のクラスからは階段を二往復する必要があったが体調、というより体温は最悪だが体はそんなに重くは無く雄や綾の肩をかりることもなく（かりる必要があってもコイツらはかしてはくれないが）保健室へとたどり着き、保険医が在室していることを証明する札を確認してドアを開く。

「陵先生、失礼します」

保健室や病院独特のむっとした薬品臭が鼻をつく。

その薬品臭まみれの部屋に白衣を着た女性が一人、退屈そうに椅子によりかかって扉から入ってきた俺たちを見ていた。

彼女は陵玲華^{みんせきれいか}さん。この学校の保険医で、俺の姉貴の同級生かつこの学校のOGらしい。姉貴と一緒に色々無茶したようで、俺たち以上に学校についてのアレコレに詳しい。そのアレコレを聞くと呪われるというのはこの学校の新約七不思議に数えられている。

「あら？誰かと思ったら、悟君ご一行じゃない。どしたん？さぼり？でも今日さぼりつてのも変ね。教室で堂々とさぼれるし」

相変わらずやる気のない先生だ。怪我の手当てとかもかなり適当臭が漂うというのがもっぱらの評判で、彼女が赴任して以来生徒が怪我をする頻度が少なくなったという。擦り傷の手当てのはずなのに胃にメスを置き忘れたなんていう怪談じみた噂もあるくらいだ。ちなみにこれも七不思議の一つに数えられている。まあそんな先生の噂を知ってれば怪我なんか絶対にしなくなる。問題にならないあたり、実際のところはマトモな保険医なんだろうけど……。俺も何度かお世話になった事あるし。

「夏風邪というか、姉貴病というか……。まだどつちなのかわからないんですけど、とにかく体が死後硬直始めそう……。というわけで早退したいんで許可証もらえませんか？ついでに二人分の付き添いもオマケに」

と今現在わかっている病状を余すところ無く伝えてもこれっぽっちしかセリフがない俺に陵先生は一言、

「被奈病ね。間違いない」

非情にもあっさり診断とつか判決とつか断頭台の紐をお切りになられた。

「やっぱりそうなんですか……」

「最近何かやった？やけに手料理勧められたりとか、買い物に違う道通らされたり、家の玄関に変なマークがあったり、もしかしたら制服の裏にあつたりしない？」

それからー、あれからー、と次々に姉貴の行動に怪しいところはなかったと嫌に具体的に質問してくる。恐らくだけど、経験から来るんだろうなあ姉貴について詳しいのは。ついでに言えば校内で作られた手料理を食べると呪われる、制服の裏に変な模様が浮かび上がると呪われる。これも七不思議。この学校に料理部はおるか、調理実習さえ無いあたり七不思議も馬鹿にできない。

そして制服を裏返している俺。ついでに後ろ二名も。

「全く。何されたかは知らないけど、原因は絶対被奈よ被奈。アイツ以外こんなあからさまな症状出す原因作れるアホはいないって」
経験者は語るといったところか？妙に説得力あふれる先生の言葉は俺の不安を煽るには十分すぎて困る。

「そうなるかと許可しないわけにはいかないな、これは。付き添い二人も三人もオツケーオツケー。むしろ足りないくらいよ。さっさと帰って被奈にオトシマエつけてやりなさい」

机の上のメモ帳を一枚切り取って「帰ってオツケー。付き添い歓迎」と書いて俺に渡す。

適當すぎる。

「確かあんた達の担任、光坂クンでしょ？被奈ねーさんならみでつて言えば一発オツケーよ。あたしんところに来る必要もなかったかも」

なんと……こんな身近に更なる姉貴の犠牲者がいたとは……。

「被奈にとつちや可愛い後輩だったからね。そりや可愛がられてたよ。……目を背けたくなるくらい」
あと2年ほど遅く生まれてたらまた違った人生送れただろうに……と俺は新たな姉貴の被害者に同情するしかなかった。
「あ。あんまり意味ないとおもっけど、一応体温はかつとかなきゃ。これでも一応保険医してるからさ。記録はとらないといけないの」
そういつて陵先生は一本の白い体温計を俺に渡してきた。

「ちなみに、人の体温は普通32度以下にはならない。生きてる限りな」

保健室から退室して職員室に行くまでの間に、雄の知識自慢が披露されていた。別にそんな知識欲しくもないぞ。知りたくも無いぞ。

「体温つっーのはなあ、1下がっただけでそりやもうアホみたいに体弱くなるんだぜ」

いらんいらんっ！そんな知識いらん！

「やったわね悟！人間の限界突破！これは誇れる事よ！」

あー、人間の生命の神秘がこんな普通の高校生にやぶられてしまうなんてな……。

俺の体温、現在31度。どの程度かわからない人は風呂のお湯の温度を31度に設定して入ってみよう。

「にしても光坂先生が姉貴の後輩だったとはなあ……。弟の俺でも知らなかったなあ」

光坂映先生は、去年この学校にきた先生で俺たちのクラスの担任だ。数学担当の教師で生徒達の人気も悪くない。少なくとも俺はあの先生が担任で良かったと思ってる。

それが姉貴の後輩だったとは……。俺が姉貴の弟って知ってるんだろつか……。もしかしたら知ってても触れたくないのかも、姉貴の事には。

「おい。俺、被奈さんの高校時代がすげえ気になってきたぞ。悟、

当時8歳だろ？何か覚えてないのか？」

うーん……。姉貴の友達が家に遊びに来るとか無かったし、その頃は地元のサッカークラブに入りたてでそっちで頭一杯だったしなあ……。

「なら兄貴一人で陵先生にアレコレを聞いてくれば？」

「すまん、軽率だったな。好奇心は猫をも殺す、お前らも良く覚えとけ！」

ハハハ。そんな事アレを姉にもった俺が心得てないとも言つのかね。猫どころか人を殺しかねない。

「とりあえず先生に許可証……といっても紙切れだけど渡してくる先生の机の位置は……あそこか。よし、いるみたいだな。」

「失礼します。光坂先生いますか？」

いる事を確認していていますかもないのだけれど。

「お？江藤、どうした。自習中だろ？」

テスト期間中は原則生徒は職員室内に立ち入り禁止なので先生のほうからこちらに歩いて近づいてくる。

「えっと……体調が優れないので早退したくて」

「お前が？珍しいな。それにその狩谷兄妹もオマケか」

やっぱりこの時期、自習がだるくて早退する生徒が多いのかチェックが厳しい。普段風邪一つしないからその分更にチェックが厳しい模様。

まあ一応保険医の許可証があるから最低俺一人は帰れるとして付き添い二人は厳しいか、普通なら。

えっと、確か陵先生言ってたよな……。

「あ、はい。ちよつと姉貴がらみで……」

「休学届けもついでにどうだ？江藤」

し、暫く学校に寄せ付けない気だ。この先生。

「い、いえいえ。結構です」

「そうか。なら早く帰って養生する事だ。おい！狩谷二人、ちゃん

と付き添えよ！お前らにうつるのは大いに結構だが、くれぐれも俺にはうつすなよ！」

どうしよう、俺の中で先生に対する株が大暴落中です。くるっ、ざっ、がたん！

僅か三動作で光坂先生は職員室の自分の席まで帰還を済ませていた。ついでに職員室のドアを施錠していくという徹底ぶり。

「あー、うん。まあ……姉貴の被害者だもんな……」

今日一日だけで『姉貴の被害者』という言葉の重みが俺の中で随分とレベルがあがった気がした。上昇するパラメータは主に攻撃力……かな？

何にせよ、これにて保険医と担任に許可を戴き、めでたく早退する準備が整いました。

「じゃ、さっさと帰るわよ。まったく、テスト前ってだけで何で部活がないのかなあ。暇でしようがないわ」

「今の発言は学生として色々問題があるが、その前にちょっと同好会の部室よってもらっていいか？会長にも一言言っておかないと」

「部室？一年も自習中のはずだろ？」

「自習程度ならあの会長は必ず部室にいるよ。あそこはなぜかピンポイントに携帯圏外だし、何も言わずに帰ると……ちょっと後が怖い。いや、そもそも行ったら行ったで怖いな……」

俺の本業はサッカー部なわけだが（ちなみに綾は陸上、雄は帰宅）、もう一つ正会員ではないんだが、昼休みに入り浸らせてもらっている同好会がある。

「俺、あの子苦手なんだよな……。いや、綾にあれくらい可愛げがあればなあとは常々思うくらいだが、うーん相性とかそういうのがあるんだろっか……」

「……可愛げがなくて悪かったわね。バカ兄」

会長と可愛げを比べたら大抵の女の子は完全敗北するくらいなんだから、それを綾に求めても無駄だろ。

とは口に出さないで目線だけで雄に訴えかける。言わぬが花だ。

今から向かおうとしている同好会の部室は本館と1階の渡り廊下のみで繋がっている別館にある。

なんで1階にしか渡り廊下無いんだろうか。別館には部室の他にも理科室とかもあるので四階の一年生が別館の四階に用ができた時なんかひどいものである。

同好会の部室は1階の一番端っこにあるのでそこまで面倒な道のりではないが。

そもそも会員数一名の同好会が部室もってるって時点でおかしいんだけどな……。

「鍵開いてるな。やっぱり会長は自習サボリか」

予想通り普段は南京錠で閉められているドアが開いている。

ちなみに特別教室の鍵というのは職員室で管理されているのが原則だが、この同好会に関してはその限りではない。

明らかに裏がある。この同好会。

俺が興味を持ちつつも正会員にならない要因の一つがコレだ。もう一つ理由を言うのならばテロリストには屈しない、みたいな。

「会長、いるんですか？」

教室のドアを開けて中をぐるりと見回す。長机が一つに、ドア側以外の方を埋め尽くすでかい本棚が置かれた見るからに怪しい部屋。

そしてこちらに気づいて何かがやってくる、気がした。

「いないか」

「いるよ！」

む！声はすれども姿は見えず。これが噂の空蝉の術……っ！

「サトー君、会長に対して態度がなってないよ！不敬罪で訴えるよ！三千万だよ！」

三千万か、それは困った。というか昨今不敬罪なんてものが通用するのだろうか。生憎と都合よく弁護士目指してる知り合いはいないので確認しようがないのが非常に残念だ。

しかしこの会長だったら肉体的に三千万しぼられそうなので仕方なく視線を下げる。そこまでしてようやく彼女が視界に入った。

「会長、そんな近くに居たら見えませんよ」

運動部の綾は邪魔だからと髪は短く切つてあるが、こちらは肩まで伸ばして見た目から文科系のイメージを感じる。動物に例えるなら

……リスとかハムスターとか。

そもそも、髪型とか以前の問題で彼女は少なくとも運動部には見られないだろうけど。

「へっぷしっ！……会長、縮みました？」

「縮んでないよ！もうちよつとで140越え……っ」

そうかそうか、会長もようやく大台に……届いてないのか。

「こ、越えてるよ！まったく、女の子の体について詮索するなんて

……んん？サトー君、風邪？」

「ああそうだ。それについてなんですけ、へくし！」

ここに来て更に冷えた……かな。共鳴とか共振とか摩訶不思議超常現象もろもろが犇めき合つてるのかもしれない……。

「やつぽー。槻御ちゃん。相変わらず可愛いわね。悟に変なことされてない？」

「綾先輩、こんにちは！今のところはなんとか大丈夫です。サトー君、ソツチ系の趣味ありそうだから油断はできませんけど」

ちよつと待て。

「俺もいるって事忘れないでおくれよ。槻御ちゃん」

「雄先輩もこんにちはです」

ペコリと可愛らしくお辞儀をする。ただでさえ視界に入りにくいのお辞儀なんてされたらさらに見ええない。せつかくの愛らしい仕草を目に収められないとは罪な人だ。

紹介が遅れたが、彼女は鳥居槻御とらいつきみ。見た目は高校生どころか小学生もいところだが飛び級の天才少女とかではなく、この学校にごく普通に進級してきた一年生。つまり後輩だ。

一年生にして会長。後輩にして会長。

彼女に対して敬語を含ませるのはちょっとした嫌味でもある。

別に彼女に対して恨みとかあるわけではないんだが、彼女ほどからかって可愛い子を俺は知らないのてつい。

ついでに彼女が俺のことをサトーと呼ぶのは『サト』ルだからではなくて江藤のトウと悟のサをくつつけてるらしい。変な拘りを感じざるを得ない。

「それでサトー君。風邪なの？平気？」

「ああ、そうだった。……見ての通り、というより触ったら一瞬でわかると思うけど風邪でさ、早退するから今日は来れないってのを伝えたくて……」

自分の律儀さには呆れそうだが、前に一度昼休みに顔をださなかつただけで次の日には失踪扱いになってたからなあ。各方面への誤解を解くのにどれだけ苦労したことか……。今思えばあれは逃亡対策のつもりだったのだろうか。だったのなら今ほいほいと部屋に現れた俺を見れば効果のほどはかなり靦面のようだ。

「じとー……」

それで、えーと……。会長？俺のことめっちゃ見てませんか？いやだなあ、ははは。惚れました？

「……サトー君、それ本当にただの風邪？」

「タ、タダの風邪ですよ。うん、きっと……」

希望的観測は時として取り返しのつかない事態を引き起こすが、それにすがりたい気持ちをわかってもらいたい。

「ふふん。隠したって無駄だよ！槻御の目はごまかせないんだから！何てつたつて由緒正しきオカルト研究会の会長さんだからね！」

「！」
そうなのである。

彼女が会長を務め、俺が毎日昼休みに入り浸るこの同好会の名称は、「オカルト研究会」。

オカルト研究会同好会ではなくて研究会らしい。研究会という響きに拘りがあるようで、同好会と呼ぶと怒られる。そして殴られる。

あまり痛くはない。むしろ和む。

ところで何年もの間、この学校に存在しなかった同好会、もとい研究会に由緒なんてものがあるのだろうか。

「サトー君のお姉さんが初代オカルト研会長で、槻御が二代目！由緒は素人のサトー君にはわかりにくそうだけど、曰くだけはなんとなく理解できないかな？」

確かに、姉貴がトップの組織がマトモなはずが無い。

会長は俺の姉貴に憧れてこの学校に来たみたいで姉貴が卒業後、誰一人として後を継ぐ人がいなくて長らく名前だけというか伝説のような存在だったオカルト研究会を再興させたいらしい。

俺は俺で姉貴がオカルト研究会で会長してたことは知っていたが、別に同じ学校はいつたからといってオカルト研究会をどうこうするつもりはなかったが、今学期が始まってオカルト研究会が復活したという話を聞き、ちよつとした興味で部屋をのぞいたら……捕まっちゃまったわけだ。

「サトー君、いい加減正会員になってくれないかな？部活と研究会は掛け持ち可だよ」

いや、なんかマジにここに籍を置いたら後戻りが出来なさそうで怖いんだよな……。部屋を見渡せば怪しい書物が所狭しと眼球を支配する。悪魔召喚・入門編とか薦められたが一体会長は俺にどんな門をくぐらせる気なのだろうか。

「まあ考えときますよ。それでは、早退するんでまた明日……からはテストだからしばらく来れないか」

というわけでさよならさよなら。ほら、綾に雄も帰るぞー。さっさと帰りますよー。ていうか走れ！

ガタンッ！

「ぐえ……」

「うわっ、兄貴がドアに挟まった！！」

ちっ、逃げ遅れたか！これだから新兵はっ！そもそもこれだから会長に報告するのは何か危険な香りがしたんだよ！……とはいえ隠れ

て帰れる気もしなかったわけなんだけど。

「ところでサトー君、その普通じゃない風邪。家に帰ってどおするのかなあ？」

「どうもしません。帰って寝ます」

素っ気無く答えながらドアが開かないか確かめてみる。

あー、雄がこれ以上ないくらいフィットしてるなあ。そして開かぬー。

「初代会長は今日のご在宅？是非是非挨拶しに行きたいなあ」

「姉貴は寝てます。それはもうぐっすり」

綾に雄を蹴っ飛ばして外に出せないかと打診してみるが、雄によってその作戦は却下されてしまう。

これだから新兵はっ！新兵はっ！覚悟が足りてねえ！

（ねえ、悟。槻御ちゃんをハナさんに会わせたくないの？）

（会わせたくないってわけじゃないけど……、言い方によっちゃ会長は姉貴2号だぞ。会わせるとロクな事がなさそうで……）

今まで何度もお宅訪問していいかと言われ続けて来たが、その都度今の様にドアが開かなくなったりドアが勝手にものすごい速さで開閉するようになったり、ドアが持ち上げないと開かなくなったり、ドアが……。

とりあえずドアがものすごくアレなので色々ピンチに陥ったが、今のところ姉貴に会わせるなんてことにはならなかったのだが……。そもそも助かったのは昼休みだったからであって、さすがに授業開始まで拘束するわけにもいかないのか耐えれば勝てる勝負だった。ああいやでも結構精神的にくるものがあつたけど。

しかし今の状況ではその限りではない！なんていうかもうドアにはさまってるのが俺じゃなくてよかったー！

「ああー、雄先輩。お顔真っ青ですよー」

ついでに雄も地味にピンチ。

「さ、悟……。お、折れてくれ」

雄……。それがお前の遺言か。右から左に素通りする程度に聞いてや

る。

「ねえ悟……。いいじゃない、会わせるくらい。二人にとってくれるわけじゃないんだし。そもそもボヤボヤしてたら悟のほうが先にくたばっちゃうわよ」

「う、く……。それもそうか……」

しかしだな、とって食われるとか意外にありえなくもないとは思わないか。なんていうか、生贄にされそうじゃないか、怪しい儀式の。「じゃあ決定だね！やったあ！ようやくサトー君のお姉さんに会えるよ！」

仕方ない、か。雄も死に掛けてる事だし、これ以上意地張る必要も……。

「じゃあ、ドアの仕掛け解除するよ」

ペペ、と妙な機械音と共に頑なに閉まるうとしていたドアがようやく動き出す。

ただし、高速で。

ガタンガタンガタンガタンガタン

「ドア恐怖症になりそうだ……」

ポコポコになった雄に肩を貸しながら一人増えた付き添いを連れて家までの帰路につく。病人に肩を借りるとはなんとも情けない。これだから体力のない帰宅部は……。

俺の家は中学の時より学校に近く、徒歩でも15分掛かるか掛からないかの所にある。志望動機の一つにコレが含まれているのは言うまでもない。

校門を出て緩やかな坂を降り、市内を真ん中でぶつたぎる大きな川にかかる橋を歩きながら真下に見える魚釣りをするおじさんや水遊びに戯れる子ども達にすっかり夏だなあと一人で関心する。今日平日のはずなんだけどな。

しかしなんだね、この時期にこの川に人が集まるのは無理もないか。

県内最大の大きさを誇る巫山川に、それに架かる橋もまた県内最大の巫山橋。渡るまでに掛かる時間もまた県内最大で、夏の遊び場としても県内最高だろう。このお時勢、ここまで澄んでる川も珍しくなりつつあるし。嘆かわしい事ではあるが。

ついでなので補足しておく、川にも橋にも学校にもついでる巫山というのは学校裏手にある2、3時間あればゆっくり歩いて登って降りられる程度の小高い山の名前だ。神聖なお山なので立ち入りは禁止されている……のはもう百年近く前の話で、今は近所の子どもから大人までが登ったり降りたりするごく普通の山だ。

ちなみに巫山とつくのはまだ他にもある。例えば姉貴が勤めている病院も巫山総合病院だし、よくお世話になる商店街も巫山商店街と入り口に書いてあった。あ、今日の晩飯どうするか。冷蔵庫は空だし、こんな状態じゃ買い物もできないし……。久々に店屋物でもとるか、姉貴と生活費に相談しながら。

「たまにはあたしが作ってあげよっか？ 買い置きがまだ結構残ってるはずだから今日の晩飯が二人分増えるくらい平気だと思うよ」

「え！？ 綾先輩って、料理とかできるんですか！？」

「ひえー、と大袈裟に声を張り上げて驚く。人は外見で判断してはいけないのだよ。」

「槻御ちゃん、驚きすぎ。こう見えて家事全般は人並み以上にこなせるって自負してるんだから」

「俺がほとんどできねえからな。ほとんど任せてたらすっかり板についちまった」

「俺んとも、雄のとも両親いないからな。嫌でも少しは出来るようになるんだよ。つうか、雄は何もしてねえのかよ」

俺んちは両親共に他界、雄んとは母親が亡くなってて父親が単身赴任で海外だったか。姉貴が俺ら三人の保護者代わりということに落ち着いている。

「甘く見てもらっちゃ困るな。風呂掃除は俺のテリトリーだぜ？」
威張るな威張るな。

関係ないけど風呂掃除といえば洗剤を吹きかけて数分まつて擦らず流してもあんな音ならないよな……。うちの風呂釜がもう寿命なんだろうか。

「じゃあもう、三人まとめて三つ子みたいな感じだね。羨ましいなあ、そついつの」

その言い分から推測するに、会長は一人っ子なのだろうか。会長の身の上話は聞いたこと無いな……。そついえば。

お母さんも小さいのかな……。それともお父さんが……。っ！？それは絵的に……。

「ベランダから飛び移れるほどお隣さんだからな。昔っからほとんど一緒にいたよな」

うーん、思い返せばその頃は……と思ってもさすがに小学校以前の記憶はもうおぼろげになってしまってる。

「身長も皆ほとんど一緒だし……。槻御も綾先輩くらい欲しいなあ。羨ましがる会長をよそに四人の身長をわかりやすく現してみよう。

例えば手のひらをピツと伸ばした時の指の長さ。

薬指が俺、中指が雄、人差し指が綾で……。親指が会長か。

「さすがにそこまで小さくないよ！」

実際問題一番でかい雄とは実に三十センチ以上の差がある。同じ女の綾でさえ三十センチ近く違う。俺とも綾以上雄以下の三十センチの差がある。

「つと、ほら会長。着きましたよ。あれが俺んちです」

「近っ！むむう、こんなに近いなら尾行とかすればよかつたかなあ」とつてもよくありません。ああ神様、俺は今一つの犯罪を未然に防いだのかもしれない。

「それで隣があたしんちね。それじゃ準備してくるよ。兄貴も！たまには少し手伝ってよ」

「へいへい」

「じゃあまた後で。悪いな、晩飯ごちそつになるよ」

二人そろって自宅に入っていくのと同じくして俺と会長も我が家へ

と足を運ぶ。

「ただいま」。姉貴、起きてる？」

玄関の様子は朝出て行ってから何も変わってない。

「おお、結構広いなあ」

会長の感想どおり、俺の家の玄関は家の大きさと比べて少しばかり大きい。その広い玄関に揃えられている靴の数が、会長という珍しいお客の分もいれても三足しかない分更に大きく見える。

「さとするう？」

玄関から向かって左手にあるリビングから気だるそうな声が響いてくる。

これはついさつき起きたばっかだな……。

「会長、ちよっと待っててください。姉貴寝起きなんでさすがに……」

当の本人は全然気にしないのだが、やっぱり弟として姉貴にも一応女性なのだから恥じらいとかそういうものを持って欲しいという俺の願いがこもった配慮から会長を一旦玄関で待つようにお願いしてリビングに足を踏み入れた。

「うわっ。姉貴、また昼間っから酒飲んでるな」

テーブルには缶ビールが数本空になっけ置かれている。最近量が増えてきたのはやっぱり職場の問題のせいだろうか……。

「こちとら休日返上して出勤してたんだから、これぐらい飲まないとやってられないっての」

そしてまた一つテーブルの上の空き缶の数が増える。

「それよりも、あんた帰ってくるのはやいじゃない。さぼりはいかんぞー……。さぼりは」

成績はよかったのに出席日数がたりなくて卒業が危ぶまれてた人に言われたくはない。

「お疲れのところ悪いんだけどさ、ついに姉貴系の何かに侵されたつばいから何とかして欲しいんだよね。ついでに姉貴に客がきてる」「私系って……。最近は忙しかったから特に何もイタズラしてない」

わよおー……つてあんた！」
いきなり声を張り上げる姉貴に驚いた俺が次に感じたのは首筋に感じた鈍痛と遠ざかる意識……。
これが俺の平穏な生活に終止符が打たれる最後の記憶になるとは夢にも思わなかった……とかそういう無知故の幸せな感傷に浸るのは俺には到底無理で、できた事といえば脳裏を横切る非情な現実を『
ついに来てしまったか』と諦めの境地に達する事だけだった。

以上、走馬灯終わり。

グッバイ、俺のソウル。来世は金持ちに飼われる猫になりたいにや
！。

「命まではとらないよ。サトー君」

「つむぐ……ぐ」

強引に口を手ぬぐいのようなもので塞がれる。これが話に聞く猿轡
ですか？。

そして会長おお。あなたもグルなんですか！？

「悟、彼女がよく話してた私の二代目って子は。ちっちゃいのに良
く出来た子ね」

「いえいえ。初代会長にはまだまだ及びません！」

やっぱり会長を連れてきたのは間違った選択だったのか……？もし
かしたら昨日までに一度会長を連れてきていれば、もしかしたらこ
の場で姉貴と会長のタッグは回避できたのではないか？

だがそんな後悔も後の祭。ならばいつその選択が最善であったと
信じ込むしかない。

「悟、あまり心を乱さないでくれる？安心なさい。弟の命なんて取
るわけないじゃない」

そうは言われても怖いものは怖いんです！命はとらないとか結構信
用できないんです！命はとらないけど人格崩壊とかしそうなんです
！基本的人権の尊重を今この場で声高らかに訴えたい！

「サトー君。本当に大した事じゃないよ。いわばこれは……そう、治療！治療なの」

治療！？なんの……って例の超低体温病のことか。姉貴と会長で『治療』するってことはつまりやっぱりタダの風邪じゃなかったのか……。

タダの風邪だったらあんな体温なったら死んでるんだけどさ。

「さあ取り出すわよ。悟、深呼吸深呼吸」

取り出すって何を！？それに猿轡されてると深呼吸もしにくいのですが。

「すうー、はあー。すうーつぶつぶ」

息を出来るだけ大きくすった直後、姉貴の拳が俺のみぞおちを直撃する。

息吸ってる途中にみぞおちに拳骨とか！！俺は一瞬後に腹の底から沸き上がる痛みと吐き気を瞬時に覚悟する。

……あれ？何もこない。

……ん？えっ！？あ、う、腕があー！！姉貴の腕があー！！俺の胸にさ、さささささ刺さってる……っ！？

「ちよつと！暴れないで！すぐ終わるから」

ずもずもずもと、実際には聞こえないが音がなるとしたらそんな音かなるだろうなと思わせる感じに姉貴の手がすでに貫通しててもおかしくないほど深く俺の中に入っていく。

「ん、この……っ。逃げるなっ」

どうやら姉貴は俺の体の中にある何かを探しているようだ。肝臓ですか？大腸ですか？脾臓ですか？できれば一つなくなっても生きていられるものにしてください。

「会長！がんばってください！」

傍らで姉貴を応援する現会長。姉貴より、俺を応援してはくれないだろうか。

「捕らえた！」

「つぶつぶ」

俺の中身をまさぐっていた姉貴の腕が一瞬のうちに引き抜かれる。
ずももももとかさういう音は今度もならなかったが、変わりに強烈なくすぐったさが俺の腹部を駆け巡る。

「んーっ！！」

あまりのくすぐったさに一瞬で腹部の痙攣と酸欠が俺の体を支配して再び意識が遠のいていく。

酸素不足で極端に思考能力が低下した俺の頭が最後に見た目から受信した映像は……青白く光る人のようなモノだった。

プロローグ（後書き）

一時期自分のサイトを持ってそこで小説を公開していたのですが、小説を書くことだけに集中するべく投稿小説として公開することに至りました。作者名は同じなのでもしかしたら知っている人もいるかもしれません。そんな人はお久しぶり。しかし恐らく9割以上の人が初めてだと思うので皆様はじめまして。更新頻度はあまり早いほうではありませんが、どうか生暖かく見守って頂きたい次第であります。

第一話：リアルゴースト

狩谷家一階居間。

大きなテーブルの上は所狭しと様々な料理で彩られている。いささか一般家庭における平凡な一日を締めくくる夕食にしては豪華すぎるものがあるかもしれないが、それにはちょっとした理由がある。それはこの料理を作った狩谷綾のちよつとしたこだわりのようなもので、狩谷家と江藤家が一緒に食卓を囲む際に料理に妙な気合いが注がれるようなのである。

そして今日は更に量が多い。

もしかしたら会長も食べていくかも、という綾の配慮から来ているものだ。

その配慮に甘えたのか食卓を囲む人達の中に会長の姿も見えている。四人で食事をする時でさえ食卓はいつもよりかなり賑わい、楽しいものになるというのにそこに会長までもが加わったらちよつとした会社の忘年会以上に騒がしくなる……はずだった。

(空気が……重い……)

しかしながらさらに一つ、たった一つ。会長に加えたただ一つの要因が加わっただけでこの空気の変わりようは何なのだ。

いや……俺にだってわかる。こんなにも空気が変わるほどの要因なのかということが俺にもわかる。

「ねえ悟」

かちゃん、とご飯茶碗の上に箸を置き静かな声で俺の名を呼ぶ。

「な、なんだ？」

がちゃん、とご飯茶碗の上に箸を置こうとしたら震える手のせいで転がり落ちる。

すうーと長めに息を吸い、視線を下に向けたまま俺を呼ぶ綾からだならぬオーラが立ち上がっているのがなんとなく見えた。

うん、ほら、雄がびびってんだろ？落ち着、

「その女は一体誰なのよー！ー！！」

バン！とテーブルを左手で強く叩き、余った右手の人差し指をビシツとある人物の顔に一直線に向けた。

「わぁ、これ美味しいです。こんなに美味しいの食べた事ないですよお」

当の本人はまったく気づいておりませんが。

「あー、うん。綾が気になるのも仕方ない。なぜなら、俺も超気になってる」

悪魔召喚の生贄にされるかと思われたあの儀式（本人達の言い分は治療）の後、気を失った俺が目覚めたのは綾が夕飯の時間になったと家まで呼びに来た時だ。

俺自身も確か昼過ぎくらいだったはずなのに、いつの間にか外が暗くなっているという唐突な時間経過に驚きつつ、例の非現実的な低体温から解放され正常な状態にもどった自分の体をひどく愛おしく感じ、密かに増えた住人に気づいていなかったのだ。

「姉貴、この人は？」

と、無理に自然を装って姉貴に尋ねてみる。

「悟の中身」

無表情のままそう告げる不良姉。姉貴のポーカーフエイスは見飽きた。どうせその下にはさぞ面白おかしい笑いがあるんだろうな。

「な……中身？」

綾のオーラが一際大きく膨れ上がる。それに比例して雄が小さくなる。

おいおい、中身だつてサ。冗談キツイね。

うん、冗談キツイよ……そろそろ綾がちよつとやばいよ……。

「ね、ねえ君……。自己紹介とかしてくれないかな？」

モグモグパクパクと食卓を囲む六人のうち一番早かった箸の動きが止まり、俺のほうに意識を向ける。

姉貴が素知らぬ顔を貫き通すなら俺がなんとかするしかあるまい。

とりあえず名前とか、どこから来たのかとか、お……俺の中身って

どういうことかとか。

「ええっ！？悟さん……私のこと、覚えていないのですか？あんなに……あんなに愛を語り合った仲でしたのに……」

びしっ、と空気にヒビが入ったのがわかった。

「さ、悟……？」

「ちよっ、待て！待て待て待て！俺は知らないぞ！人違いだ！本当だ！」

本当！マジに！俺の人生17年においてこんな子と愛を語り合った
り愛を確かめ合ったりしたことなんかしてない！

「と言えと、お姉さんに言われました」

「姉貴！！」

「ハナさん！！」

ぐりん、と俺と綾の首の向きが一斉に姉貴の方向へと変わる。

「あ！もう、駄目じゃない。そんなに簡単にばらしたら」

姉貴のポーカーフェイスが崩れ、その仮面の下にあった表情があら
われる。

「あはははっ。サトー君、面白い！」

ついでに終始口を閉ざしていた会長からもせき止められていた笑
いがこぼれ出す。またあんたらはグルか！

緊迫していた空気が一気にはじける中、

「寿命が80年くらい縮むかとおもった……」

小さくなつてた雄がぼそつと安堵の言葉も漏らす。80年という
下手したら死んでいたと言う事か。でも胃とかそのあたりは確実に
縮まったばい。

「もうちよつと引っ張っても良かったと思っただけど……まあいい
わ。詳しい話は食べ終わってからね。せっかく綾ちゃんが作って
くれたのもつたない。悟はいつも味気ないものばっか作るから……」

「……」
じゃあ自分で作れと声に出して言えない自分が悲しい。いつだって
弱者は強者の下働きをしなければいけない悲しい運命なのだ。

「あ、これもう一個食べていいですか？」
そして四人＋分しかなかった料理は、たった一人に二人分は食べられるというちょっとひもじい結果に終わることになった。

「彼女、悟にとりついてた幽霊なのよ」

食後に一息いれて姉貴を問い詰めようとした矢先、いきなり真実は明らかになった。

いきなりすぎて俺も綾も半分聞き逃しかけていた。

「姉貴、ワンモアプリーズ」

「彼女、悟にとりついてた幽霊なのよ」

一字一句違わずにどうもありがとう会長。すっかり姉貴に懐いちゃって……。

「はい、私幽霊みたいなんです」

そしてにつこりと他人事みたいに幽霊である事実を認める少女。

見たところ年齢は俺と同じか、少しばかり上のような雰囲気がある。

「最近の幽霊はこんなリアルなものなんですか」

さすが綾。幽霊と聞いても一歩も引き下がらない。

「足もあるし、普通にさわられるし」

「い、いたひでぶ……」

無表情のまま幽霊少女の頬を掴んで伸ばしている。あー、こええ。

「今は実体のある幽霊がトレンドなの」

流行ってたまるか、そんなもの。

それなりに当事者であるはずの俺は、三人＋一人のやりとりを遠くから眺めとばっちりの被害が及ばなさそうな距離と、とばっちりを

受けた際の防御の近くに身を置きながら心の中で突っ込みをいれていた。

「で、雄は何してんだ。防御の要なんだからあまり離れてくれるなよ？」

夕食が終わってすぐ、それはもう姉貴が先手を決めるよりも早くに戦渦から距離を起き、普段つけない眼鏡の奥で眼を光らせていた。

「待て、今解析中だ」
何をだ。

「例のあの子だ。悟、お前にはわからないのか？」
だから何が。

「信じられん……。この世のものとは思えないな……」
姉貴いわく、あの世のものらしいですけど。

「ていうか何の話だ」
「馬鹿野郎！！良く見る！！」

テンション高いな。
とりあえず、見ると言われたので見てみる。

「可愛いだろ？」
「そうだなあ。まあ、可愛いな」

特殊な嗜好をお持ちの方でなければ鼻屑目なしでも文句無しで可愛い部類に入ると思う。

「しかしだ。可愛いというより、あれは最早カテゴリが違う。単純に可愛いというだけなら槻御ちゃんのレベルは上だ」

確かに。会長の可愛さは規格外だ。

「あれは例えるならば可愛いから美しいへと変化する途上……可愛いと美しいの両方を併せ持つが故にそのどちらでもない別種の輝きを持つ極めて短い期間のみ見られるものだ」

ふむ……。一理ある。つぼみが大輪の花を咲かす……その瞬間にだけ見られる趣というものはわからないでもない。

「あの黒く艶やかな長い髪も少女らしさだけでなく、シックな大人の雰囲気を持ち合わせ、まさに彼女のためにあるようなと言っても

過言ではない」

ふむ……ふむ……。なるほど、見れば見るほど惹かれていくような
気さえしてくるな。

「これは最早反則だ。綾がカリカリするのもわかる。同じ女として
焦っているのだろう……」

いやしかし、綾も綾で人気あるんだぞ。毎年バレンタインにチョコ
かなりもらってるし。……アレ？

「悟。お前の目線は今彼女の顔に向かっているか？」

ああ……。お前の話を聞いていたらなんだか男として視線を動かさ
なくなってきたような気がしなくもない。

「悪いことは言わない。目線を下げろ」

目線を……？少し、下げ……、

「な……。なんだあれはっ!？」

「気づいたか。しかし遅すぎだ。そんな体たらくでは戦場を生き延
びる事はできないぞ!」

まさか……。これは!？」

「今彼女が着ているのはハナさんの服だ。ハナさんとて、俺の知る
限り女性としてそれなりのレベルに入っているはずだ」

どどん、どどんと心臓が早鐘を鳴らす。

「肩口や袖などは幾分余っているというのに胸元だけあのキツさと
はどういうことか!?!」

「ありえない……」

「あれは80台などという一般的なレベルとは違う……。ましてや
綾などという一般レベル以下と一緒にしたら神が許しても俺が許さ
ねえ!」

ごく……。

じゃ、じゃああれは……。あれは!!

「すまない……。俺のスカウターに蓄積されたデータが足りなくて
正確な値は出せん。しかし逆に言えばそれが答えということだ」

なんてことだ……。目の前にあるのがお宝だとわかっているのにそ

の価値を十二分に賞味することができないなんて……。

「いずれわかる時がくる。それを待っていてくれ、友よ！」

「ああ！俺の命、お前に預ける！」

以上、雄の一人芝居でした。どこからなのかはご想像にお任せする。つうか俺の名前を語るな。一人芝居なら一人芝居らしく一人で完結しろ。

こいつもこいつでたまに壊れるからなあ。俺がしっかりしないといけないわけだ。

「悟！何やってるのよ！当事者なんだから話くらい聞け！」

ふむ、雄の一人芝居なぞに付き合ってる間に大分ご立腹のようだ。

行きたくはないが行かないと命の危険がありそうなので、俺はまだ生きたいので行くしかないか。

だが重い腰が微妙に行けば死ぬぞ、と告げている気がする。

そしてその警告通りに俺は、床にその身を預ける事になる。

「……ちよつと待てや。これは少し理不尽過ぎやしないか」

流石にすれ違い様にラリアットをもらうほどの罪状は身に覚えが。

「綾さんっ！いいんです。その……私の勘違いかもしれませんし」

聞けば彼女、生前の記憶がまるでないようだ。しかしそんな中でも俺のことだけは知っているような気がする、というのが唯一頭の片隅に残っているらしい。

他に何も憶えていない中、俺だけを覚えているというのに俺はまっ

たく覚えていないということが綾的に許せないらしい。

「それ以前に悟に取り憑いたって時点でなんらかの接点がある可能性が高いのだけど」

専門家は語る。彼女は普通の幽霊とは何か根本的に違うらしい。実体を持たすためにこの世に定着させるのも驚くほど簡単に出来たようだ。

つうかさ、そんなにホイホイ実体化させられても困ります。

「普通はね、実体化させるのってとっても大変なの。しかもできても数分しか駄目だったりとかあるし」

専門家のタマゴは語る。普通の幽霊は意思がはっきりしてないせいで実体化しにくいってのもあるんだとか。

「ふうん。それでその特別な幽霊さん？えっと、名前もわからなかったりするの？」

名前が分からないとどう呼べばいいのやら。幽霊だからユウちゃんとかでも……それは何か色々と彼女に失礼か。

「あ、名前なら。本当の名前は分からないんですけど、ハナ姉さんにつけてもらいました！」

待ってましたと言わんばかりに何処からともなく流れだすジャララララ〜みたいなBGMとこれまた何処からともなく巻物を取り出したオカルター二人。

「発表します！期待の新人美代さんのお名前は！？」

今言いましたよね。物凄く。

最早名前より何を期待されてるんだろっつことに興味がつつりそうです。

「ばば〜ん！平坂美代さんです！はい、拍手！」

パチパチと拍手をする美代と名付けられた彼女。しかしその拍手は自画自賛になりはしないか。そして拍手しろと刺さるような目線に体が勝手に反応して拍手をしている俺。こら脊椎。脳までちゃんと信号送れ。そんなだから俺の理性が乾いていくんだ。

「美代って呼んで下さいね」

柔らかい微笑みに俺動揺。綾みたいなタイプに慣れすぎてこういう男としての本能にクリティカルな仕草に耐性があまり無いのだ。いやっほう、ヘタレバンザイ。

「……で、平坂さんは」

「美代です」

うぐ、チエツク厳しい。

「……み、美代さん、これからどうするの？」

「さんもいららないんですけど……妥協します」

正直、さん付けでもかなりの抵抗が……。

「ああ。悟、その事だけど暫くうちで預かることにしたから」

ああ、そうなんだー……あ？

「姉貴、それ本気？」

「あら。意外と驚かない」

いやもうなんとなくそうなる予感がまくってましたし。姉貴がそういうなら俺の反論なんて聞いちゃくれないんだろうし。

「うんうん。素直な男の子は好きよ」

姉貴限定だけだな。素直になるよう調教されてますから。

「不束か者ですが、よろしくお願いします」

こらそこ。三つ指を立てない！まったく……なんだか今日一日でがらりと俺の日常が変わり果てたような気がするなあ。

明日から騒がしくなりそうだ。

「ところで、明日からテストだけど悟に綾は平気か？俺のノートみる？」

訂正、今夜からちょっと騒がしくなります。

第一話：リアルゴースト（後書き）

第一話更新完了したので、自らのブログ内で登場人物紹介などをぽつぽつとアップしていくのでよろしければそちらもどうぞー。ブログURLは作者紹介ページに載せてあります。

第二話：サブタイトル

ここで質問です。貴方の苦手な科目を教えてください。
すみません、全部なんですけどどうしたらいいですか。諦めたら駄目
ですか。

ところで文系と理系を比べたら文系のほうが簡単とかそういう安易
な考えを抱いている人はいないだろうか。

ちなみに俺もその一人である。いや、もう少し言わせてもらうなら
どちらかといえば数学が得意なんだ。他の教科と比べたらだからな。
他の人と比べたりとかそういう事はするな、泣くから。だから数学
が優しい文系を選ぶ事によって一つでも補習を減らそうという策な
のだ。でもな……………、

「普通に全滅しそうな勢いかも……………」

一日目のテストが終わり残り三日となったテスト期間。俺は一日目
の英語、古典のあまりの酷さに昨日の寒さがフラッシュバックしか
けていた。

昨日あれから雄監督のもと綾と二人で徹夜の勉強会が開かれていた。
しかし件の幽霊騒動で疲れ果てていたせいかほとんど身につかずこ
の有り様だ。

まあ、良くて補習だわな。覚悟は出来てるさ。補習室のお得意様だ
し。

「ほら悟、気を落とすな。同じ状況の綾は全く気にしてないぞ」
それもどうかと。

しかし、綾は綾で陸上選手として学校に貢献しているからおとがめ
がなくて正直羨ましい。俺はそういうのとは無縁な男だし余計に羨
望とか嫉妬とか腹減ったとかそんな類の視線を綾にぶつけるのだ。

「また帰ったらノート見せてやるから。元気だそうぜ」

ああ、やっぱり持つべきものは親友だよな。有り難さのせいか涙で見えませんが。

昨日も自分の勉強そっちのけで俺の面倒を見てくれていたし、それでも余裕なアンタが憎いよ！

聞いた話では、雄のノートのコピーは裏でそこそこの値でさばかれていますか……。それを当たり前の様に一人占めできるというのは俺にとって補習を免れる必須アイテムに他ならない。

ノートを抱きしめ、俺がテスト期間という限定的な時期にだけ味わえる友情に浸ってる横に怪しげな光が忍び寄る。

「いやあ、友情のニコマ！いいね、実にいい！」

「帰るか」

それをさらりとかわす。時間は有限であるから大切にしないとけない。

俺が今やる事は勉強であって、そのために早く帰らねばならぬのだ。明日が今日の二の舞になったら目もあてられない。

「うおーい！待て、待ってくれって。酷いだろ！？持つべきものは親友なんだから！？なら俺も大切にしてくれよ！」

親友は大切にしますが、それと君に何の関係があるのかと。

いきなり現れたそいつは、参ったねと全然参ってなさそうに軽くため息をしながら俺達のほうに改めて向き直った。

「んで、狩谷兄。今日の英語はどうだった？」

そして心機一転、今最もホットな話題を持ちかけてきた。

「まあ、90以上はガチだな。埋まらないところは無かったが凡ミスで一問ハマしたかどうかってとこか」

しかしまあ、俺にして見ればホットでもクールでもなく最早別次元の話題なわけなんだが助けて綾さん。

でも綾さん。すでに教室にいませんのです。昨日のアレで食料尽きたんで今日は商店街寄るってさ！ああ、一緒に行く約束とりつけときゃ良かった！どうせうちの冷蔵庫も空なわけだし。

「くあ〜っ！ったく、お前に勝つには満点とるしかないのかっ！」

そしてこの野郎も俺なんか砂粒に見えるくらい頭いい野郎なんだ。
世の中不公平だぜ。

「現文では負けねえからな！撮影おあずけで勉強してんだ。一つくらい勝つとかないとわりにあわん」

そういつて見るからに高そうなビデオカメラのレンズ越しに俺達をのぞいている。

こいつは筒井連路^{つついれんじ}。一年の頃からのクラスメイトで映像研究部所属のいわゆるカメラ小僧。カメラ小僧というのは半分名ばかりで使うのはビデオカメラのみ。普通のカメラは使わない主義なんだとか。

「お前は知らんのか！写真に撮られると魂抜かれるんだぞ！」

お前はいつの時代の人間なんだか。伴天連かなんかに先祖が騙されてそれが代々伝わってきたのか？そんなもん伝えるより他によつぽど伝えたほうがいいものがあつたのではないのか？品性とか特に。

まあ面白いので携帯で一枚激写してみる。

「うおおおつ！」

おお、素晴らしい後退り。体力測定にバック走がないのが悔やまれる。全員で囲んでとりまくれば世界記録の一つや二つ出しかねない。しかし後退りじゃカメラから逃げられないと思うんだが。

「ま、俺は帰る」

途中で商店街よらなきゃならないし。今ならまだ綾もいるだろうから献立の相談でもしよう。

「おう、またな。俺はまだ連路に話があるから」

「……そうか、二人ともほどほどにな」
呆れ声で返事をして教室を出る。本当にアレがなけりや普通に頭が良くていいヤツなのになあ。

アレというのはほら、昨夜あつた雄の一人芝居を覚えているだろうか。つまるところ彼らはそういう類の仲間でもあるのだ。

つて、待った。今雄が話題にあげそうな人って！教室を出て5秒、ある一つのちよつと嫌な結末を予期して振り返る。

「おい江藤！平坂さんって人に会わせる！」

……遅かったか。

そこには目を輝かせながら教室から飛び出してくるエロザルが一匹。たったの5秒でお前らはどんな会話をしたというのだ。あまり大事にはしたくないのに雄め、口が軽い。

「はあ……つたく。買い物手伝え。それが条件だ」

口止めし忘れていたのも俺の落ち度か。せめて大荷物になるだろう。買い物の荷物持ちでもさせて自分を慰めるとしよう。

エロザル二匹をひきつれて巫山商店街へと繰り出す。この危険な動物が皆様への迷惑にならないかどうか心配だ。

「とりあえず一周するぞ。それまでに綾を見つけるか普通に自分で晩飯何にするか考えるから」

了解しました！と元気がいい返事を聞き、

「あ、江藤妹いたぞ」

間伐いれずに女性に対してのみ抜け目のない都合のいい目に綾が捕捉される。まだ入口近くをうるついていたのか。というよりこのあたり食料品系の店は少なかった気が。

「おーい。何してんだー……ってあれ？」

ついでに我が姉と噂の人物美代さんも発見する。

「兄貴に悟に……筒井君。悟は買い物だろうけど二人はどうしているの？商店街に縁があるとは思えないけど」

それ以上に縁がなさそうな姉貴に美代さんがいるわけだがここは突っ込みをいれるべきか。

「おお〜っ！もしや君が例の平坂さんか！」

やべ、エロザルが反応した。さすが都合のいい目！紙ほどの面識もないのに一目で彼女がお目当ての人物だと見抜きやがった。

「えっ、え？あ、はい。そうですね……貴方は？」

「通りすがりの芸術家です。よろしければ俺のカメラに収まっっては……」

カメラを右手に持ちレンズ越しに美代さんを覗こうとしたその瞬間、
「はいはい。撮影はマネージャーを通してからね」

すんでのところで姉貴により妨害される。

「む！？狩谷兄！このお方は！？」

都合のいい目がまたしても厄介な人に目をつけてしまう。

「悟のお姉さんだ」

そしてあっさり教える雄。あまりにも自然なコンビネーションにわざとやってんじゃないのか、と疑いたくなる。

「マジ！？巫山高の生きる伝説というあの江藤被奈さんか！やっべ、まさかこんな所で会えるなんて！色紙もってきてねえよ！どうすんだコレ！」

うわあ、会長以外に姉貴に対してこんな反応しめす人がいるとは。

「ふむ。悟、彼は友達？中々見所があるようだけど」

いえ、通りすがりの芸術家です。友達でもなんでもないのでどうぞ無視してやってくれ。

「で、姉貴に美代さんは何でこんなところに」

一番気になるのはそこだ。こんな真昼間から健康的に商店街でお買い物なんて。ていうか姉貴、仕事はどうした。何か問題が起きて最近忙しかったじゃないか。

「昨日で一段落したから暫くお休みもらったの。だから美代ちゃんとお買い物。新しい生活には色々必要になると思って。綾ちゃんの私のも服が合わないから彼女用に何着か買っておかないと色々不便でしょ？ホントに何食べたらこんなになるんだか。可愛いのは無いし、値段も馬鹿にならないわ」

ぶっ！

な、ななななんの話だ！？いやわかるけど天下の往来でそういう事を普通に言うな！

「そうよ！全く面倒ばっかでいいことない！この無駄な、無駄な肉！」

最近綾はどことなく余裕を感じられない。とりあえず落ち着け、な？つつか天下の往来で今度は大声で何を言ってる。

集まる視線に晒されてかなり恥ずかしいのだが。

「そんな金どつから出したんだよ。今月もうギリだろ？」

「心配無用！病院のごたごた解消したら休暇と一緒に臨時ボーナスもついできたのよ。まだ全然余ってるから暫く生活費も心配なし！」なんと！それは非常に助かる。なんてったってこれから食費が約二人分増えそうだったからちよつと心許なかったんだ。

「それならたまには豪勢に行くか。昨日は綾に大分ご馳走になったし二人もどうだ？」

綾には及ばずとも俺にだってそこその腕は持っている。それにたまには本気ださないとそこその腕が普通の腕になってしまうしな。「じゃあご馳走になるのかな。いきなりハナさん達と会ったからまだ何も買ってないし」

「勉強のほうも忘れるなよ。まあそこは俺の分野ってことで。飯待ってる間に二人分の脱補習ノートでも作っておいてやるか」

よし、完璧だ！そうと決まれば早速買い出しだ。

「えと、俺は」

「早く帰れ、電車族」

「あの……」

時がたつのは早いもので俺達は今、食卓を囲んで楽しい団欒の一時を味わっていた。

そんな中、美代さんが何かを心配するように俺に話しかけてきた。

「ほ、本当に置いてきてしまいましたけど、良かったんですか？」
ヤツなんかの心配をするなんて優しいなあ。でも、そりゃ無駄だからしないほうがいい。

傍らに置いておいたインスタントカメラを一番近い窓にむけシャッターをきる。

眩いフラッシュとともにガサツと何かが落ちる音がする。

「ヤツは元気にやつてるってさ。ていうか不法侵入だから警察につきだすか」

ヤツのカメラに対する変な癖を知らない彼女は頭の上にハテナマークを浮かべつつもそれ以上ヤツのことを口には出さなかった。

「一応回収してくる。ご近所の迷惑にならないうちに」

雄は優しいなあ。俺だったらそのまま捨てるな。しかし産業廃棄物も真つ青な有害さだし、人里に降りてきたサルは何しでかすか分かったものじゃないし。我が家という犠牲のうちにとどめて置いたほうが地球のためか。

せめてもの情け、というより自衛的な意味で余り物でも与えておくか。空腹で狂暴化した獣は手に負えない。

「あんぐっ……、ごっくん。ご馳走様です」
余るはずもなかった。

「あたしもあれだけ食べてれば大きくなったのかな……」
多分縦に大きくなったんじゃないのか？さらに。

今でさえかなり僅差で勝っているだけだからそうなる俺の立場が大分危うくなってしまういそうなので綾はそのままが一番ですよ。

さて……せめてもの情けの続きだ。軽くつまめるものを用意してあげるとするか。これから始まる勉強会のつまみにもなるだろうし。

「平坂さんと姐さんは!？」

片付けが終わるまで家に入るのを防いでおいてくれと、回収に向かう雄に指令を与えておいたので今現在一番やっかいにして相手にしたくない人物が我が家に押し入ってきたときは、居間には人っ子一人おらず、俺の部屋を勉強会用にセッティングし終わった後だった。予想通り、ヤツは家に入った瞬間から姉貴と美代さんを求めてせわしなくうろつろし始めた。

しかし既に策は張ってあるので心配は無用。美代さんと姉貴は姉貴の部屋に戻ってもらった。もし姉貴の部屋に侵入を試みようなどとしてみたものならホルマリン漬けの標本が自宅に増えるかもしれない。別れ際姉貴が「最近活きがいいのが手に入らなくて物不足だったから来ようとしても止めないでいいわよ」と言っていたのでちょっと笑い事じゃない。ここで一人やっかいものを消すつても手かもしれないが……。

「人として死にたいなら大人しくしろ。はしゃぐ暇があったら俺の補習を一つでも減らすためお前も尽力しろ」

「あたしも流石に全部真っ赤じゃちよつとやばいし、あたしの選手生命を守るために筒井君も尽力して」

「現文は下手したらお前に負けるかもしれないから、二人の勉強を見て自分の勉強をおろそかにしろ」

「あんたらめつちや自分本位だな！」

いや、君のために何かする必要も理由もないから自分優先する以外他にないんだよな。いいじゃん自己犠牲。カツコイイよ。

「ほら、お前も座れよ。どうせ泊まっていくんだろ？家には連絡いれとけよ」

「おう、元よりそのつもりだったから既に電話してある」

「なら宿泊代代わりにしっかり働け。手始めに現文のヤマを教える

のだ。はずしたら罰金だけだな」

そうして三人＋一匹の勉強会が幕を上げる。

普段はおろか、部活のないテスト期間中にすらまったくとっていいほど勉強などしない成績不良の俺と綾だったが、雄お手製かゆいとところに手が届く必殺テスト勉強ノートのおかげで今まで乗り越えてきた。今度も、きつと乗り越えられるはずだと俺は信じている。というより乗り越えてくれないと困るので、手が届いてもどうしようもないかゆみを丁寧に搔いてくれる助っ人一人と一匹をフルにこき使ってその日の夜は更けていくのであった……。

「ていうかい加減俺を人間扱いしてくれ!!!」

「前世の話をされてもな」

「悲しいくらいに現世の話だよ!!!」

第二話・サブタイトル（後書き）

「ところで江藤。なんで第二話のサブタイトルはまんまサブタイトルなんだ？」

「お前の紹介話見たいな感じになったから適当でいいやーだったさ」

「はっはっは！そんなわけあるかよっ！……え、マジなの？」

第三話：二人の会長

少年は傷だらけの体を荒野に預けていた。

体を巡る神経は一つとして彼の自由にはならなかった。

ただ……その代償として彼は刹那の間何かを想う猶予が与えられていた。

しかし彼は、その刹那の時を何を想うべきかと自分に問う事にしか使えなかった。

ついに自らの手で討ち取った憎い仇のことを想うべきか。

それともこれまでの長く辛い時間のことを想うべきか。

もしくは奪われた愛する人達のことを想うべきか。

もしかしたらこんなところで果ててしまう自分の惨めさを……………。

「なんだ？俺はテストが終わるたびに死ぬのか」

テスト最終日、最終課目の終了、つまり先日までこの身を削りながら挑んでいたものからの解放を意味する瞬間から少し間を置いて、ビデオ越しに俺を覗き意味不明な事を語りながら俺に近づいてくる男がいた。

「江藤が死んだような顔してるのがいけないのだ。あれだけ俺や雄に手伝わせといて補習漬けとかだったら割りにあわないから手ごたえはいかほどと思ってきたのだが、その顔はもしかしなくてもダメだったりするわけか」

「いや……初日のを抜かしたら補習になりそうなのは無いと思う。

危ういラインだが……。死んだような顔になってる原因は恐らくテ

スト結果よりテスト勉強のほうだ……」

必要最低限の睡眠しか得られなかったこの四日間。一日一日経過することに俺の体を蝕み、危うく俺はシャーペンを動かすだけの存在なのではないかと思っしてしまっそうだった。

「毎回こんな感じだが、今回に限ってはスタート時点で死にかけてたからな。うまく乗り切ったほうだろ」

意識が三途の川あたりをうろついている俺とは違い、いつもと全く変わらない様子の期間限定特別家庭教師Y君は俺の健闘を優しく讃えてくれた。ありがとうブラザー。君がいたから今の俺がある。

何はともあれテストが終わり来週テスト返却のみの午前中授業を越えれば待ちに待ったサマーバケーションがやってくる。

この学校は進学校であるからして、来年は大手を振るって夏の大連休を満喫していくものがある。つまり、高校生活での思い出作りに勤しめる残り少ないチャンス！心が躍らないわけが無い！

「海につ、いくわよーっ！」

そして普段から平均以上に心が躍っている人は、嫌でも沸き立つ夏休みムードにあてられて既に臨戦態勢に入ってしまったようだ。

「相変わらず気が早いな。夏休みは来週が終わったらだし、そもそも綾に悟は七月には補習があるだろ？補習が終わって宿題も終わらして、遊ぶのはそれからだ」

我らが司令塔は七月中に宿題を終わらせるという絵に描いたような優等生っぷりを毎年俺たちに強要してくる。

さらになぜか終わった宿題を写すより、一緒にやったほうが早く終わるという優等生マジック。なので司令塔の方針には逆らえないのだ。

ところで綾がテスト終了と同時にテンション急上昇するのは例年通りなわけだが、俺と苦楽を共にしたテスト勉強の成果はでているのか。

「それも、例年通り！」

綾の七月の予定が例年通り埋まった瞬間であった。ここまで来ると

わざとやってるんじゃないかと思えてくる。

「盛り上がりつてるところ悪いけど、ちょっといい?」

騒がしい室内にキンと通る声。

ため息と苦笑にまみれる俺達の所に、この否応無しにテンションを右肩上がりにする空気に満ちている教室で唯一人平常を保っている女生徒が静かに近づいてくる。

「あ、トモも海いくわよねっ!」

明らかに身に纏う空気が違う彼女に対しても綾は上がりっぱなしのテンションで話しかける。

「今はそんな話どうでもいいでしょう?」

それをまるで只のそよ風のように受け、抑揚の無い声で返答する。

彼女独特の冷たい雰囲気はこの夏の暑さの中ではいつもより冷たく感じられる。

雰囲気もそうだが、県内指折りの進学校の生徒会副会長という肩書きが彼女に近寄りたさを与えている。

とどめは他人を突き放すような言葉遣い。

彼女に目を付けられたら最後、穏やかな学園生活と一切の縁が切れるという……。

「えーっ。トモ行かないの?」

「待って、誰が行かないなんて言いました?今話すべきことじゃないという事だと言っただけです。そもそもまだ早いつて言ったのに一緒に水着を新調しにいった事を忘れたの?買ったからには元は……」

「いえ、倍は取り返します。まったく、綾の補習が無ければ七月中に行けるというのに……。八月に入ったら真っ先に行くから予定あけときなさい。比較的近くにウォーターレジャー施設もあることですし、お盆を過ぎたら海ではなくそちらにしましょう。綾は部活、私は生徒会の仕事があるから予定が決まり次第すぐに連絡するように、いい?部活より生徒会の仕事のほうが融通が利くから私のほうが合わせます」

というわけで前言をまるごと撤回しますよっと。綾以上に人は見か

けで判断しちゃいけない人なんだ、彼女は。綾以上に誤解されやすいタイプで現に俺も今年同じクラスになるまで誤解しっぱなしだった。

彼女は古屋 灯ふるやま とう。現生徒会副会長にして来期の会長は確定だろうといわれるお方だ。彼女にかかれれば天性のとっつきにくさも少し親しくなるだけでチャームポイントに早代わりする超魔術。

俺の知り合いは何かとマジシャンが多い気がしてならない。マジックというより超常現象扱う人もいるけど。

「うん、古屋がものすごく海に行きたいってのは伝わったけど、古屋のほうも何か俺たちに伝えたい事があるようだったけど、そっちはいいのか？」

「貴方達……というより、江藤君にだけですけど。お昼の予定、空いています？」

以上、回想終わり。

古屋の最後の一言から一般的な健康男子が連想する事といたらなんだろう。

実はずっと前から貴方の事が……とか青春真つ盛りな事だろうか？しかし我がクラスが誇る生徒会副会長は一般的な健康男子の期待なぞそっちのけで、男女問わず昼や放課後呼び出してはありがたい教えを説くという、一見かなりお節介に見える行為を多い時は月に二、三回行っている。

でも流石は巫山高生徒会副会長と言ったところか、その教えを受けたものは揃って百年分の泥を落とすような顔をして戻ってくる。ここ最近では、自ら彼女に教えを請おうとする人まで出てくるらしい……。彼女はカウンセラーとか目指しているのだろうか。

まあ、そんな彼女の行動を俺は知っていたため今回ついに俺にもあ

りがたい教えを受ける時が来たか……と恥ずかしい事にドキドキと
いうかワクワクみたいなものを感じていた。

だってさ、最近は何かと心労が絶えなくてそろそろ心が清涼剤を求
めだし始める頃合だったんだもん。

でもさ、でもさ。今この状況を俺が求めていたとは到底思えないん
だよな。

どこに行くか教えてくれなくて、古屋の横に並んで校舎の中を歩い
た道中でも妙な事を聞かれまくったし、着いた先がオカルト研部室
だし、気がついたら縛られて床に転がってるし、ていうか前にも身
動きが取れなくなつて怖い思いをしたような気がするし、その時と
似た危機感覚えてるし、つまるところ俺つてもしかしてまたピンチ
だったりするわけですか。

「今度こそこの部屋から立ち退いてもらいます……鳥居槻御っ!!」
商店街の福引でポケットティッシュ及びその一つ上の景品(サラン
ラップが有力)以外のものが当たるくらい稀な声を荒げている古屋
と、

「何回来たつて無駄だよ! ヤモリさん」

相変わらず愛らしい会長が対峙している。

「……っ! その、ヤモリというのはどうにかならないのですか」

「ヤモリさんが諦めてくれればやめます」

どうやら先手を打ったのは会長のようだ。俺以外にもいたのか、妙
なあだ名を付けられた人は。そして俺よりタチが悪い。

そして会長のセンスはやっぱりどこかおかしい。

「まあいいでしょう。今まで何度も言いましたが、この学校の校則
というものを貴方に叩き込んで差し上げます」

長いので重要部分だけをもってきて要約すると、

『同好会設立には、顧問および三人以上の会員が必要』
とのこと。

生徒手帳に載っている長つたらしい校則を全部言う必要、あったの
か? おまけに暗唱しちゃってるしこの人。

ていつか靴下の色まで指定されてるなんて初めて知りましたよ俺。

「顧問が陵先生というのはこちらで確認しました。しかし会員数は一人、資料にはそう書いてありました」

よかった……。知らぬ間に正会員化されてるかもしれないと思ってたけどどうやら流石の会長もそこまでは手が回らなかったようだ。

「会員なら、今日一人増えたよ。ほら、ちゃんとハンコも押してあるし。江藤って」

回りまわってました。

そうか……。会長のバツクに姉貴もついちゃったから、俺に逃げ場なんて無かったんですね……。

「江藤君、貴方が被害者なのはわかっています。でも安心して下さい。すぐにこの魔窟から救って差し上げます」

ああ、頼もしい……。がんばれ副会長！俺の穏やかな高校生活は古屋の肩にかかっている！

でもそれなら、縛って床に転がしておく必要なんて……、

「鳥居槻御、ようやく得た正会員のは、はは、恥ずかしい痴情をばら撒かれたくなかったら即刻この部屋から出て行くことです。すでに警告という段階は過ぎています。よってこれは命令です」

…。

……。

……………え？

いや、身に覚えがないし。ていつか俺は人質だったのか？救ってくれと見せかけて救えなかったら俺が地獄行き！？

「な……っ！ひ、卑怯だよ！そんなのばらされたらサトー君、もう学校来れないよ！」

そして会長には何か心あたりあるみたい！何やったんだ俺！

痴情って男女間の何とかだろ！俺、今まで特定の異性と付き合った事なんて無い……し？

あー、そういえば中学の頃クラスで彼女、彼氏ができたできないの話題で溢れてた時ごっこ程度に綾とそういう関係の真似事とかしてみた時があっただけど二人とも肌合わなくてすぐ止めたことがあったなあ。

もしかしてその時の事か？古屋と綾は仲いいし、知ってても不思議じゃないけど別にばらされたところでどうって事無いし……。

数分の硬直。会長の事だから俺の恥ずかしい痴情がぶちまけられるのも構わず断固拒否を貫くと思っていたのだが、

「夏休み！夏休みが始まる前まで……来週いっぱい待って！もう一人、正会員の当てがあるの！」

意外にも先に折れたのは会長の方だった。

「来週までにどうにもならなかつたら大人しくこの部室明け渡すから！」

もう一人の正会員……？誰だろうか。

「ふむ……。それは、确实？来週いっぱいといっても、木曜から休みに入るから水曜がタイムリミット。その時までにもう一人の正会員が見つからなければ確実に立ち退きますか？」

とりあえず狩谷兄妹は除外。あの二人は巻き込まないで置いてくれて一応頼んである。自分から入りたいなんていう酔狂でもないし。となると後は一年？会長のクラスメイトか誰かか？

「約束約束！それともやっぱり、今決めないとダメ？サトー君の痴情ぶちまけちゃう？」

心当たりは全く無いが、副会長自らにぶちまけられたら濡れ衣でも俺の学園生活THE END。

でも、このままオカルト研の正会員になってもなんだかんだでTHE ENDフラグとか立ったり？

オカルト研と生徒会、この二つの争いのはずなのに犠牲になるのは俺。

世の中理不尽だよな。なんていうかもう慣れたけど。あはっ。

「……わかりました。来週水曜の放課後、その時点で三人目の正会員が受理されていなければ強制的に立ち退いてもらいます。ついでにせつかくですから江藤君の恥ずかしい痴情もぶちまけます。それでいいですね？」

いや、ぜんぜんよくねえって。

「いいよ！」

超爽やかに快諾してるけど、俺全然よくないから。

誰か……俺の話聞いてくれ……。

オカルト研での一件は会長が出した来週いっぱいまでに同好会の規定を満たすという条件で一応のカタがついた。

会長がそれを果たせなければオカルト研もろとも俺の学園生活も終わりを迎える。

どっちに転んでも俺には利益どころか不利益に満ちているわけだ。まあ古屋には悪いが、オカルト研が存続してくれたほうがどっちかというと俺に被害が少なくて済みそうか。

本当かどうかは知らないが、会長の言う新会員ってのも気になるし。「江藤君？部活出なくていいんですか？」

制服姿で鞆を持って下駄箱で靴を履き替える俺を見つけた古屋が後ろから声をかけてくる。

手に持つてる資料はオカルト研に関するものだろうか。

「ああ。一度始まった部活に後から混じるのは止めてるんだ」

あの騒動の後、食い損ねた昼食を求めて学食に行った時にはほとんど生徒は残っていなかった。

つまり既に部活は始まっており、学校に残っている生徒のほとんどはそっちにいったという事だ。

「そうなの？それは、悪いことをしました」

「古屋に謝れるほどの事じゃないって。そもそも今日はテスト勉強疲れがあったから元から行くつもりあまり無かったし」

「じゃあな、と手を上げて校舎から一步外に出たところで、」

「私も帰ります。生徒会室に資料置いてくるので、少し待っていて下さい」

彼女に引き止められた。

俺の返事も聞かずに落とさないよう両腕に資料を抱え込み、廊下の奥へ駆けて行き暫くして階段を登る音が響き始めた。

廊下を走るのとはよくないぞ、生徒会副会長さん。

とりあえず彼女が五階にある生徒会室から戻ってくる間に近くの自動販売機でミルクティーを二本購入しておこう。

校門を出てから暫く続く緩い下り坂を、同じラベルの缶を持った男女が歩いて降りている。

俺の手の中にある缶はすでに中をほぼ空にしてあと一回口に含めば本当に空になる。

一方彼女が持つ缶は未だ半分以上残っているようだ。

口をつけては放し、またつけてはすぐ放す。味があるのかと思わせるほど少しずつ彼女は飲んでいった。

「ミルクティー、ダメだったか？」

「いえ……。ミルクティーは好きです。やっぱり私、飲むの遅いですか？」

「まあ、遅いか早いかって言えば遅いかな」

というより飲む間隔は速い。ただ間隔が速くても一回一回飲む量があれじゃいつ飲み終わるのかわかったもんじゃない。

「綾にも言われました。トモは初めて酒をのむ未成年みたいって。

私はそんな法律違反はしません」

喋りながらも少しずつ、ほんの少しずつミルクティーの量を減らしていく。

「古屋は家近いのか？それとも電車？」

「電車です。だから、ここでお別れです」

坂を下り終えた先の分かれ道。

五分程度の短い時間。恐らくまだ仕事が残ってたはずなのに、それを切り上げて彼女はこの五分の時間に何を求めたのか。

「江藤君。もう一度、聞いてもいいですか？」

「ん？廊下で話してたこと？」

教室からオカルト研へと向かう道中、古屋が俺に問いかけてきた。

「江藤君は、本当に綾とは付き合っていないんですか？」

真剣な眼差し。

嘘やごまかしを一切許さないと言わんばかりの。

「ああ。本当だ」

それを聞いた古屋の顔が、少しうつむく。

……居心地が悪い。

「ご、ごめんなさい。変な事を聞きました。うん、うん。大丈夫です、世の中には色んな人がいますから」

「なんの事だ？」

微妙に古屋の言い分が繋がっていないような気がするのだが。

「あ、何でもないです。それではまた月曜に」

「ああ。またな」

それだけ言って、俺の帰路とは別の方角へ小走りに去っていく。

「古屋も古屋で変わってるな」

流星は綾の友達、というわけか。

暫く古屋が走っていた方を見ていたが、踵を返して橋へと続く道を

歩き始める。

さて……

帰って少し寝よう。ここ数日間犠牲にしてきた睡眠時間を

取り返さねば。

あー、そーいや俺の痴情って一体何なんだろう。

本当に心当たりは全くないんだよなあ……。

今までの記憶を掘り返しても知られてまずいような事は無い。約十分、つまり俺が自宅にたどり着くまでの間マジメに考えてみたが思い当たる事は一つもなかった。

「誤解の可能性が高いな……。会長の件が決着する前に聞きだしておいたほうが良さそうだな」

来週的最優先事項が決まった所で、玄関の扉を開け自宅への帰還を果たす。

「おかえりなさいっ、悟さんっ」

あー……。

もしかして、この人の事か？俺の恥ずかしい痴情というのは。

第四話：彼女と町へ（前編）

帰宅してから約三十分後にまどろみの中に消えた俺の意識が、十二分の休息を得て気持ちよく覚醒する。

枕元にある携帯で現在時刻を確認、ただいま八時。

あー、しまった。晩飯の用意なんもしてねえ。姉貴にどやされるなこれは……。

寝たのが大体二時頃だったから六時間近くも寝てたのか。昼寝としては長すぎたか。

仕方が無いか。自分から作ろうとしない姉貴が悪いんだし、今からでも作ってしまえば文句は言われないうら。

そう思っただ寝起きで重くなった体をベッドから引きずり出したところであと違和感に気づく。

「妙に……明るい」

もう一度携帯のディスプレイを見る、よく見る、じっと見る。

AMとかいてある。

日付を見る。

今日が明日になってる。

つまり俺は、六時間じゃなくて十八時間も昼寝してしまったのか。恐るべしテスト勉強疲れ。

そして姉貴からの折檻決定。

俺の週末、終わった。

「はあ……。まあ仕方ないよなあ」

寝てしまったもんは寝てしまったんだ。起こさないほうが悪い。

とりあえず朝飯は作ろう。ちょっと遅めだが休日だしちよつどいいだろう。

「その前にシャワー浴びるか……。ベトベトだ」

着替えないで寝たから制服のままだし、よくこんな格好で半日以上も寝れたものだ。

タンスから普段着一式を持ち出し部屋から出て階段を降りる。

「ん……？」

その途中、妙な臭いが鼻についた。

「コゲ臭い……？」

「まさか……」

イヤな予感がしたので、階段から飛び降り台所へと駆け込むところには轟々と燃え上がる赤い炎。青い炎より温度は低いものの、見た目の凶悪さでは圧倒的な赤い炎が我が家の台所で猛威をふるっておられる！

その猛威の奥で見覚えのある後姿が冷蔵庫を物色していた。

「美代さん！火！火、消して！！」

「え？あ、悟さん。おはようございます」

ああおはよう……じゃなくて！

「な、鍋！鍋が燃えてる！」

「鍋？わ、すごいです。燃えています」

燃えています……じゃなくて！

「もういい！どけっ！」

滑るようにガスコンロの前に駆け込み火を止める。幸い油とかそういうあからさまに危ないものは燃えておらず、今はもう原型が何だったか知る由もない何かが消炭になると同時に火も小さくなり簡単に消す事が出来た。残ったのは焦げた臭いと、絶望的に焦げた鍋が一つ。

「だああ……。美代さん、何やってるんですか」

完全に焦げ付いた鍋を無駄だと知りつつ水につけながら放火未遂の犯人を問いたです。

「何って……料理ですよ？朝御飯と今日のお弁当を作ろうと思いましたが」

起きるのが遅かったら俺自身が直火焼きされるところだったのだが。朝起きたら目の前が真っ赤、もしくは川べりだった……なんてのは勘弁して欲しい。

しかしこれだけ見事な失敗をしておいて、美代さん自身はこれを失敗と思っていないらしい。

実際にいるもんだ……極度の料理下手な人って。記憶が無いから仕方無い事かもしれないけど、それにしてもやりすぎではないだろうか。もしかしたら鍋とか溶かしちゃったりするんじゃないでしょうか、この人は。

「もしかして……姉貴の手引きか？今もどこかで覗いているのか？昨日晩飯作らなかつた腹いせか？」

姉貴の夕チが悪いイタズラは今に始まったことじゃないが物理的に俺を追い詰めるのは珍しい。

「お姉さんならお仕事いきましたよ。ホーコクだけだから昼過ぎには帰るって言ってました。あ、昨日は起こししなくてすいませんでした。お姉さんが疲れてるから寝かせてあげてって。そうそう、晩飯もお姉さんが作ってくれたんですよ」

姉貴が晩飯を？あの仕事以外は万年ぐうたら姉貴が！

俺がまだ料理できなかった時期は姉貴が食事を用意してくれていたけど、俺が料理できるようになってからは一切作ってくれ無かったの……。

「信じられないな……」

くそっ、やっぱ落ちねえな、この焦げ。元から焦げてたんじゃ無いかつてくらい落ちない。

最初から焦げてるので、これ以上焦げない鍋！絶対売れねえ、買わねえ。

とりあえず昨日の晩飯の事は置いといて、朝一番の事件をもう少し追及してみよう。こっちは鍋と違って命に関わる。

「それで美代さんはなんで朝飯作ろうとしてたんですか？今度こそ俺を起こせばよかったのに」

むしろこれからは絶対起こしてくれ。今まで通り夕飯と朝食を兼用するという策は彼女がいるために使えないんだから。

「えっと、あの、そのですね。今日は悟さんをお願いしたい事があつたんですけど、朝御飯のために起こしてしまつたら頼みづらくて……」
彼女なりに気を使ったのだろうが、見事に逆効果だ。十八時間寝たはずなのに昨日の疲れがぶり返してきた気がする。

「朝飯くらいいつもやってる事だ。それぐらいの事、気にしなくていいから」

焦げ鍋は水につけといて夜もう一度チャレンジしよう。

「どつやら逆に仕事を増やしてしまったみたいですね……。すいません……」

気遣いは素直に嬉しいから今日のところは不問にしておいてあげよう。

濡れた手を拭いて、改めて朝飯を用意するために冷蔵庫の中を覗く。

「それで、美代さんは何を作ろうとしてたんだ？」

「お手軽にサンドイッチを！」

不問は取り消し。無期限台所立ち入り禁止を命ずる。サンドイッチ作るのに鍋使うなんてどういふ見だ。サンドイッチがどんな料理なのか知ってるかどうかも怪しい。

つうか我が家はご飯派なんで食パンは一枚たりとも置いてないわけだが。パンのないサンドイッチとはこれ如何に。サラダか？

目玉焼きに昨日の余りらしい味噌汁。ついでに適当な冷凍食品で朝ごはんの体裁を整える。

姉貴作の味噌汁は不味くはないが、作った人の性格がよくでている。言うならばお年寄に優しくない仕様だった。

ついでに、

「これがサンドイッチだ」

と目玉焼きを指差しつつカマかけたら、

「初めて見ました！これがサンドイッチなんですね！」
と返ってきた。

「やっぱり知らなかったのか……」

決定。今日の昼飯はサンドイッチにしよう。

「そういえば弁当がどうか言ってたけど、どこか出掛けるのか？
俺に頼み事ってその辺りの事か？」

箸を使って目玉焼きの黄身部分を裂く。我ながらナイスな半熟具合
で裂目から黄身が垂れる。

「あ、はい！それなんですけど、悟さんは今日用事とかありますか
？」

「いや、特に無いけど」

塩分増長気味の味噌汁を一口すすする。

しよっぱいけど、出汁自体は俺より上手く取れてる……。なんか悔
しいな。

「もし良かったら今日一日この町の事案内してもらえませんか？私
まだ商店街以外行った事なくて」

ふるふきじみた大根を口に運ぶ。でかいくせにこれにもちゃんと味
が染みている。

大雑把なのに繊細。どうやって作ってるのかわげがわからない。

「んぐ。いいんじゃないか。天気もいいし、絶好の散歩日和だ」

幸いにもこの町は観光名所とまで呼べる場所は無いが、観光客では
なく新しい住人という意味では見せる場所に事欠かない。

一日退屈せずに過ごすには十分すぎるだろう。

「ありがとうございます！では、準備しますね！」

嬉しそくに胸の前で手を合わせた後、二人とも食べ終わったのを見計
らって俺の分の食器も一緒に流しまで下げる。

さて、予想外な所で週末の予定が決まったわけだが先ずはどこに向
かうか。

この町は商店街を境目に発展具合がばつたりと変わってくる。こちら側は比較的まだ開発されておらず、散歩に適していると言ったらこつちだ。公園の数も多く、休日なので子供達の声でにぎわっている事だろう。

逆に商店街を越えた先の駅で電車に乗り、二十分ほど揺られれば人の手が入った町並みへと変貌する。商店街には無いちよつと手に入りにくかった物もそこまで足を運べば見つかる事が多い。

とはいえ基本的には田舎なので都心のような高層ビル等というものはないが。

純粹に遊びに行くといつたら駅に向かったほうがいいけど……。美代さんはゲーセンとか平気だろうか。

昼飯は……。サンドイッチ。これは決定している。具だけ持参して、パンは途中で買って……。

後はどこで食べるかって事だけ……。

ふむ。まだ朝も早いし、時間的にもあそこで食べるのが調度いいか。「美代さん、弁当は俺にちよつと考えがあるんだけど任せてくれないう？」

彼女にサンドイッチとは何たるものかというのを教えておかなければならなかった。

むしろ料理とは何たるものかという根本的な事を叩き込まなければならなかった。

「はいっ。楽しみにしてますね」

楽しみされるほど大した物じゃないんだけど、きつと彼女は思いつきり楽しんでくれるだろう。

作るほうとしても気合が入る。気合いれて変わるような物でもないのだけれど。

「とりあえずシャワー浴びてくるから、少し待っていてくれ」

小火事件のせいですっかり忘れてた。丸一日着続いていた制服は、寝汗のせいもあってか少し匂っていた。

俺が起きてから約一時間半。

シャワーを浴びた後、外出用の着替えを部屋から持ち出して着替え、弁当箱にサンドイッチの具を詰め込みこちらの準備が万端になったところで着替え終わった美代さんが階段を降りてきた。

正直に言います。見とれてしまいました。

冷静になつて考えたらパジャマ姿だったさっきまでの美代さんもそれはそれで十分にやばかったが……。

現れた彼女が身に着けていたのは涼しげな白いワンピースにつば広の帽子。

それだけでレッドカードを箱買いして封も開けずに投げつけるほど反則だった。

「どうですか？似合いますか？お姉さんに買ってもらった服なんですけど着るのは今日が初めてなんです」

似合ってるどころの話ではない。

今彼女が着ている服を男子高校生に例えたら、明日には校舎裏に呼び出されて袋叩きに遭うな。絶対遭う。俺が率先してボコる。

「ん、似合ってると思うよ」

しかし逆境に慣れた俺にかかれれば心の中に広がる動揺を押さえ込んで平静を保つ事など容易い。

「本当ですか！良かったあ」

だけどやっぱり彼女の笑顔の前に屈する事になり、視線を背ける。やばい、俺絶対今ニヤけてる。

ちよつと待てつて。俺は今から目の前のこの人と二人で町に繰り出すつもりなのか？

それって端から見たらデ、デート……だよな。

頭の中がぐつぐつと煮えていくのがわかる。

落ち着け……落ち着け俺。

ほら、デートが何だつてんだよ。もう既に一つ屋根の元で暮らしているじゃないか。

……それってつまり、同棲？

「……………」

逆効果だった。

「悟さん、どうしたんですか？早く行きましょう！」

何のかは知らないが、覚悟を決めよう。

今日一日彼女を退屈させない事、そしてこの町を好きになってもらう事。

それだけを考えて頑張るしか無いのだから。

「先ずはどこに案内してくれるんですか？」

俺の横にくっついて歩いている美代さんが、期待の眼差しを向けてくる。

「最初は商店街だ。期待を裏切るようだけど、パンを買わないと昼飯がサラダになるからな」

徒歩で十分強といった所にある巫山商店街。学校について俺がよく行く場所である。

しかしあくまで商店街は通過点。本日午前のメインイベントではない。

「お店でパンを買って、そしてまたこっちに戻ってくる」

彼女の瞳に期待の色が一層強まるのがわかる。

「それで、家でお昼ご飯ですか！」

期待してるのか……？家での昼飯。

「あれ？家でお昼ご飯っていつもと同じじゃないですか！」

どうやら彼女も彼女でかなりテンションが上がってきているようだ。

今の彼女ならきつとどんな事でも心の底から楽しんでくれるだろう。だからといって手加減するわけにはいかない。

「家では食べないよ。こっちに戻ってきたら俺の学校のほうに向かう」

比較的高い所に建っている校舎はここからでも小さいながら肉眼で確認できる。

「悟さんの学校でお昼ご飯なんですネ！それは楽しみです！」
む、それはそれで楽しそうだがそれはまたの機会にしよう。

「それじゃまだ昼飯にしては早いだろ。俺達の目的地はもうちょっと遠くて、あそこだ」

指で昼食を取る場所を示す。

それは学校の方角、しかし指はもつと高い所に向いている。

「今日の昼食はあの山の頂上で食べます！」

「山ですか！私、山登るの初めてです！」

そりゃそうだ。初めてじゃなかったら俺の計画が一気に崩れるところだ。

とりあえず午前中、なんとか彼女から退屈を奪い去る事ができるよ
うだ。

俺にとつてもきつと最高に楽しい一日になるだろう。

「それでは、しゅっぱーっっ！」

第五話：彼女と町へ（後編）

商店街、それは一つの家の食卓を預かるものにとって聖地。

食料品に関しては駅前以上の品揃えに質、そして値段。

今日の晩御飯の献立を考えたくなる衝動を抑えてサンドイッチ用のパンと水筒を用意するのを忘れていたのでペットボトルを数本購入する。

こんな夏の日に水分無しで山登りしようとは無謀の極みだということに。

「商店街は来たことあるって言ってたけど、何回か来てるのか？」
荷物を全部鞆に詰め込んだら少しきつい。パンが潰れなきやいいけど。

「いえ、悟さん達と会ったあの日だけです」
テスト初日のあの日か……。

「ん……？じゃあ他の日は一日中家の中だったのか？」

美代さんがこっちに来てから今日で六日目だ。最初の日はいいとして、残りの四日はどうやって過ごしていたんだろうか。

「お姉さんに色々教えてもらってました。イツパンジョーシキというものを」

美代さんの記憶ってそんなところまで抜け落ちてるのか。

しかし姉貴は美代さんに関しては甲斐甲斐しいな……。弟としてちよつと寂しい。

「最初は記憶そのものを戻そうと頑張ってくれてたんですけど、私記憶を失ってるわけじゃなくて記憶が元から無いみたいなんです」

「どういう事だ？」

俺の問いに美代さんもどういふ事でしょうと首をかしげる。

それだとやっぱり俺の事を覚えているってのも気のせいかなのだからか。

「ま、今日はそんな話するために出てきたわけじゃないし、行くか」

買うものも買ったので今まで来た道を真っ直ぐに戻る。

自宅を横切り、橋を渡り、学校をも横切る。

「あっ、悟さん！綾さんがいますよ！」

途中、休日返上で部活に勤しむ綾の姿も目におさめる。

さすが期待のエースの上に進級が掛かっただけあって気合の入れ方が違うな。

夏の大会も近いし、テストで鈍った体をほぐしている事だろう。

姉貴に雄、そして今年は美代さんも連れて応援に行くから俺の分まで精一杯頑張つて欲しい。

「悟さん？」

「ん……ああ、行こうか」

コンクリートの道は学校を過ぎて暫くたったところで途切れている。そこからは整備されているとはいえ土の道だ。

一歩一歩足場を確認しながら美代さんを先導する。

ここに来るまでに結構歩いたし、半ばまで来るころには疲れの色を見せ始めるとおもったが意外にも疲れらしい疲れを見せず軽快に山道を登っていく。もしかすると俺より疲れていないかもしれない。

「ここって何か気持ちいいですよね！元気が溢れてきますっ」

まあ確かに空気はいいけど……。何か顔赤くない？

「走りましょう！なんといいですか、じっとしてられませんか！」

「ちよ、待った待った！」

俺の腕を掴んで一気に駆けていく。

歩いたら十分かかる距離を五分で、二十分かかるところを八分で、どンドン速度を上げていく。

「ついたー！」

その結果、予定より大分早く山頂に到着する。

（しまったな……。ちよつと負担きてる）

男として疲れているそぶりは出したくはなかったが、否応無しに息の乱れが現れる。

だというのに美代さんは登っている時と同じテンションで山頂に作

られた公園の中を走り回っている。

見掛けによらず体力があるようだ。若干トリップしている気がするが。

公園の中は休日というだけあって人で、主に小学生くらいの子ども達で溢れている。

子どもの足では来るまでにそれ相応の時間がかかるにも関わらず、公園とは名ばかりの芝生しかないこの場所に子ども達が集まるのはきつとこの芝生が、行きに帰りに辿る山道が何にも勝る遊具なのだろう。

それは美代さんにも言える事のように、既に子ども達の輪に混じり満面の笑みを伴って山頂に響く声の一部分となっていた。

普段は規格外の容姿に年上なのかと惑わされがちだったが、ああして子ども達に混じってはしゃいでいる姿が本当の彼女なのかもしれない。

記憶の無い彼女は自らの事を話すことができない。

その中で彼女の一面を新しく知ることが出来た事に嬉しさや安心のような気持ちが沸き上がる。

しかしそんな俺の心にある一つの、どうすることも出来ない事実が影を落とす。

(美代さんは……既に死んでいる)

姉貴から何度も言われた。美代さんは幽霊だと。

あまりにも突拍子がなく、現実離れた話だから今まで実感というものが持てなかった。

幽霊だの何だのといった事はあんなのを姉貴に持つてるだけあって実在するんだなくらいには思っていた。

実感だつて一般人が同じ状況になった時と比べたらかなり持てているだろう。

そんな俺から実感を奪っているのは美代さん自身だ。

話す、触れる、食べる、寝る、そして笑う。

彼女は本当に生きている人以上に、ただ純粹に生きている。

それだけに彼女がこの世の人ではないという事を俺は納得する事が出来なかった。

彼女が今ここに居るのはほんの一瞬の奇跡なのか？

誰にでも訪れる、避けられない別れというものが彼女自身の事すら

実感がもてない俺の中で大きくなっていく気がした。

彼女のために……俺が出来る事は何かあるだろうか。

だから、そう思うのは当然の事だったのかもしれない。

「悟さん？」

頭の中に自分の名前が響いた。

その声に誘われ見上げてみれば座り込んで居る俺を上から見下ろす

美代さんの顔があった。

「ん……？」

そこには美代さんだけでなく、先ほどまで一緒に走り回っていた子ども達まで俺の顔を覗いていた。

「皆さんこれからお弁当だということで、私達も一緒に食べましょう」

とにかく俺は、彼女の笑みを絶やさせない事。

漠然としていながら、確固たる目標が定まったところでまずは彼女にサンドイッチというものが何かを教えてあげようと思った。

「ねーちゃん、おっきいのにバカなんだなー」

最近の子供は思ったことをすぐ口に出してしまうな。

確かにそのとおりなので俺は何も言えず、思われた事をそのまま言

われた彼女は三、四行程で完成するお手軽料理を掴んだ手を見ている。

「火を使わない料理が……あつたのですね！」

そして間の抜けた感銘を受けているようだ。

「彼氏も大変だな！ 体力の無いにーちゃん！」

待て、君が言っている事は全体的に間違いを孕んでいるぞ。

彼氏じゃないし、体力が無いわけでもない。

「だってさっきまでずっと座ってばっかだったじゃん。こんな山登っただけで疲れたんだろー。それじゃ体力あるなんていえないよなー。俺んちの父ちゃんみたいにメタボなるぞ、メタボー」

あれは山道のほぼ全部を美代さんに全速力で引っ張られたせいだ。

つまり、俺が体力無いわけじゃなくて美代さんの体力が並外れて高いつつただけであって……。

「あ、そうだ。にーちゃん、俺達とコレで勝負しようぜ」

そうして俺が生涯のうち一番目に行っているボールを脇から取り出す。黒い五角形のパネル十二枚と白い六角形のパネル二十枚で形成されている、どこにでもある普通のサッカーボール。

「ねーちゃんが言ってたぞ。にーちゃん、サッカー部なんだろ！」

だったら俺達全員からボール守ってみせてよ。そしたら体力無いつての無しにしてやるから」

美代さんにサッカー部のことを言った覚えはないはずなんだが……。

「私もお姉さんから聞きました。お上手、なんですよね？」

そんな顔ですよね、なんて聞かれたらお上手じゃないですなんて言えなかった。

(まあ……子ども相手だし)

ここに来るまでの、あの山道ダッシュで多少負荷がきてるが多少の無理は……、

「悟さんの格好いいところ、たまには見てみたいですよ！」

この笑顔のためと、たまにだけ格好いい男じゃないということを確認するためには必要だろう。

そう思うと、ただの球遊びが俺の中で再びサッカーになっていった。

それほど広くない山頂の公園の中において、唯一ともいえるそこがこの広さがある平面の部分を俺を中心とした子ども達が占領している。

俺の脚の下には子供達がもってきた先ほどのサッカーボールがあった。

「ルールを説明するぞ。制限時間は十分。その間に俺からボールを奪えればお前たちの勝ちだ。ただし、奪えなかった場合は俺の勝ち。俺が勝ったらちゃんと人生の先輩として俺を敬うのだぞ」

即座に「ちやんが負けた場合は？俺達に得がないなんて卑怯だぞー、という声があがる。

その年から自分の損得なんて考えてたらろくな大人にならないぞ。

「その自販機で全員にジュースを奢ってやる。これでどうだ！」
標高が低くても山は山。公園とはいえ辺鄙な場所といえば辺鄙な場所。

当然そんなところにある自動販売機の値段は従来のそれより割高に設定されている。

実にペットボトルで二百円也。

子ども達から歓声があがり、次々に自分の欲しい飲み物を我先にと口にする。

俺が負けるのはお前たちの中では決定事項か。

「ただし、ファールは取るからな。俺はともかくお前たちが怪我し

たら大変だ」

子ども達が元気よく「おーっ！」と掛け声をあげる。

「美代さん、時計はあそこにあるから時間のほうはよろしく」

「はいっ。どっちも頑張ってください！」

合図を今か今かと食いついてきそつな目で俺を見ながら子ども達が待っている。

「よし！ まとめてかかってこい！」

その瞬間、俺一人目掛けて一斉に走ってくる。

結果だけ言えば、完全に俺の勝ちだった。

内容を付け加えても完全に俺の勝ちなわけだが。

美代さんが終了の声を上げたと同時に子ども達から悲鳴が沸きあがった。

「えーっ！？ もう終わり？」

「くっそー！。取れなかったあ」

芝生の地面に座り込む子ども達。俺は悠然とボールを足の下に置きながら立っている。

「悟さん、すごいです！皆もすごく頑張っていましたっ」

一瞬のうちに過ぎた十分間。その間一度もボールの主導権は俺から移らず、イメージ通りの動きをしてその動きを止めた。

子ども相手に大人げないかとも思ったけど、有り余る元気は俺の腐りかけの技術を上回る可能性があったので悪い気もするが本気をださせてもらった。

「にーちゃん、すげえー！ プロの選手みたいだった！」

その甲斐あってか、すっかり俺は子ども達のヒーロー。こんな気分

もたまにはいいかもしれない。

「悟さーん！ もう一回見たいです。たまにしか見れないから今の内にたくさん見ておきたいですっ」

でも美代さんの中でたまにだけ格好いいというのは変わってないようだ……。

「そうだー！ 絶対とつてやるんだからなーっ！」

そして沸き上がるアンコール。

もちろん応えてあげてもいいが、その前にだ。

「一回ごとにちゃんと休憩いれるぞ。日射病は思ってるより怖いんだから、水分補給を忘れるなよ」

子ども達を気遣うと共に、自分自身のための休憩をちゃっかりと挟む。

それから二時間。

三回目あたりからプレイ時間が休憩時間を上回り始め、計六回行ったボール取り合戦の跡には芝生に倒れこむ子ども達がいた。

全部取られずに済んだのはいいが、流星に俺も限界が近づいてきていた。

「残念だったな。ジュースは諦めてもらおうか」

小さい悲鳴がちよろちよろと溢れる。

日陰に寝転がる子ども達は、荒い息の合間合間に悔しさからの嘆きを漏らしていた。

それでも顔は満足の色を現しており、そんな顔を見たら俺も頑張った甲斐があったと思えるというものだ。

「にーちゃん、すげー……。学校でもやっぱレギュラーで試合にで
てたるするのかー……」

期待の眼差しを向けてもらっているところ悪いのだが、高校はそこ
まで甘くないのだ。

「サッカー部には入ってるけど、レギュラーではないんだ。だから、
試合にも出てない」

その言葉に子ども達は驚きの声を上げる。

「すっげえー。にーちゃんより上手い人がたくさんいるのかあ、高
校って」

「まあ……。そんなところかな」

俺がレギュラーじゃないのは単に練習に余り出ていないって事なん
だけどな。

「皆すごい頑張りました。見ててすっごく楽しかったですよー」

唯一溢れまくり、余りまくりの元気で大声を上げる美代さん。

もしかしたら実際に遊んでいた俺達より楽しんでいたのかもしれない。
い。

だとしたら成果は上々。当初の見積もりより三割増しといったところ
かな。

「んじゃ、そろそろ次行こうか。美代さん」

正直言うと、これから駅前に向いたとして十分に遊ぶ時間も体力
も無いので帰宅するつもり満々なのだが、ここでそれを言うとは駄々
こねられそうなので下山しながらゆっくり説得するでしょう。

「あ、はいっ。みんなー、またねー」

疲れきった体でも、別れの挨拶は元気よく。

口は悪かったが、いい子達だった。

そんな姿を見て、昔三人でボールを蹴り合った思い出が、頭の中を
よぎった。

巫山の山頂を後にして、登ってきたルートを逆に歩き下山していく。下りだからといって楽というわけじゃないので、ゆっくりと一歩ずつ足を踏み出す。

「次はどこへ行くんですか？」

期待しているところ悪いのだけど、これから帰宅するという事を伝えたいわけだが中々きりだせない。

既に俺のは限界に近づいていて、歩くリズムが崩れたらそのまま俺のも崩れてしまいそうだった。

「だけど、どうしても。」

「早く行きましょう！」

俺の手を引こうとする彼女を、彼女の笑みを、止める事が俺にはできなかつた。

踏み外した先は何て事の無い普通の山道。

「悟、さん？」

しかし土に残る跡は、靴底ではなくて俺自身。ただそれだけの事だった。

第六話：目覚め

意識が途絶えた瞬間、激しい後悔に襲われた。

少しでも意識を保てていれば、後悔を埋め尽くす痛みがあったというのに。

やってはいけない事、越えてはいけない境界を知っていたはずなのに俺はまた繰り返していた。

何が原因だったとか、誰のせいだとか……そんなものはわかっていない。

全ては俺が原因で、俺のせい。

ゼロからイチまで全てを自分自身で背負わなければならぬのに、また俺は。

深い、深い底まで落ちていた意識が再び目覚める。

その瞬間に目覚められたということが、どれほどの犠牲を払ったの事かを知っているのに、また目覚める。

薄暗い部屋、光源はカーテンの隙間から漏れる太陽の光のみ。

どれくらい意識が無かったのか、その時間を推測するにはそれだけでは不十分。

しかし、広がっていく視界には俺が意識を失っていた時間を推測させる要因に溢れていた。

普段からは想像もつかないくらいにやつれた兄妹。

綾が……俺の右足を満遍なく濡れたタオルで拭いている。

数回繰り返し返したら再び濡らして、また数回拭く。

一体それを何回繰り返したのだろうか。

既に彼女の目には意識を示す光は灯っていない。
だというのに、一連の動作は止まる事を知らない。

「よお、気づいたか」

俺の隣で、俺と同じように体を横にしている雄が声をかけてくる。
綾と違って雄は意識を失ってはいない。いや、失う事ができない。
体中脂汗にまみれ、顔色も悪い。

「俺が大分楽になったって事は、お前ももう大分楽になってるだろ
そう言われて初めて自分の右足が痛んでいるという事に気付く。
休むことなく濡れタオルで拭かれているというのに、拭かれる事
のない時間……再びタオルを濡らすその時間のうちに乾いてしまっ
ほど熱をもっている。」

「また……やつちまったか。悪い」

前に二度、同じ状態になった時も二人にはかなり世話になった。

本来ならどれだけ謝っても許されないほどに。

「何言ってたんだ。まだ三回目だろうが。こっちは百回程度なら付き
合う覚悟でやってんだ。これくらいで謝るなよ」

「ああ、すまん」

また謝ってる、と苦笑混じりの返答がくる。

「ん……、また少し落ち着いたな。これくらいなら、寝れ、そうだ
気を失っていた俺とは違い、眠気をずっと痛みに殺されていた雄は
ようやくまともな痛みに治まってきたと同時に眠りにつこうとして
いた。」

「お前も、大丈夫そうならもう一回寝ろ。綾も、そろそろ休ませて
やってくれ」

静かに雄は眠りに落ちていった。

俺も今さっき気がついたばかりとはいえ、体は眠りを欲している。
再び体を倒して目を閉じる前に、無意識で体を動かす綾の肩を掴む。
びくっと体を震わせた後、完全に力を失くして床に倒れこみそうに
なったところをなんとか支える。

そのままベッドの上に引きずりあげて優しく寝かせる。
その隣に俺も体を預けて、再び意識を眠りの中に落とした。

事故の後遺症、現代の医学でもそうとしか言えない原因不明の症状。
中学の終わり、俺と父さん、母さんを乗せた車が事故に遭った。
命があったのは、俺一人。

そして俺は命の代わりに生き方を失った。
何度検査しても大した異常が見つからない俺の足は、大きな枷を背
負っていた。

時間にして一時間、それが俺が全力で動けるタイムリミット。
それを過ぎると……この有様だ。

空気に触れるだけでえぐられるような灼熱が俺の足を駆け巡る。
長く続けば軽くショック死する痛みの半分を雄が肩代わりする。
姉貴の怪しげな特技の成せる業で、俺が知る限り唯一俺のためにあ
る業だ。

そして綾が休むことなく俺の足を拭く。
濡れたタオルで拭く事が、直接的に痛みを和らげる数少ない方法だ
からだ。

姉貴に、綾に、雄。

俺が馬鹿みたいに無茶するせいで、三人にはこれ以上のない借りを
作ってしまう。

少しずつでも返さなくちゃいけないのに、今日また上乘せしてしま
った。

まったく……何やってんだか。

再び眼が覚めた。

感覚としては眼を閉じた瞬間に開けたくらいの短い間だったが、実際の時間はそうでもないらしい。

部屋には人工の光が溢れていて、今が夜だという事が推測される。多分……もう日曜の夜だろう。

「ようやく起きたわね。食欲ある？リンゴむいてあるけど」

ベッドの脇に置いてある椅子に姉貴が腰をおろし、綺麗に皮が剥かれ、手頃な大きさに切り分けられたリンゴを差し出してくる。

それを手に取り、一口食べる。

甘酸っぱさが口の中に広がっていく。

「二人はまだ寝かせといてあげなさい。悟と違ってぜんっぜん寝てないんだから」

隣には綾が、ちょっと離れた反対側には雄が穏やかな寝息を立てている。

俺は……もうすっかり治まったようだ。

姉貴の態度がいつもどおりな所からもそれがわかる。

あんなでも一応医学に携わってる人間だ。自業自得な病人とはいえ、少しくらい優しくなるといふものだ。

「そうだ、美代さんは？」

今もそうだが、一度眼が覚めた時も美代さんの姿が見えなかったのが気になった。

「私の部屋。あんたがそんなだと実体が保てないから、私の部屋で待機してもらってるわ」

「実体が保てないって……何で？」

「そりゃあ、悟の体を媒介にしてこの世に定着させてるんだから悟が不安定になったらダメに決まってるじゃない」

姉貴の言い分は理解できる範疇を結構越えていたが、今回俺は姉貴達のほかに美代さんにまでに迷惑をかけてしまったということだけはわかった。

「今回の功労賞は確実にあの子よ。消えかけの体で練習中の綾ちゃ

んの所まで助けを呼びにいったんだから」

それなら寝ている二人が起きるのを待つより、まず美代さんにお礼を言っておいたほうがいいか。

重い体を引きずりあげてベッドから降りる。

寝すぎたせいか、体のあちこちが軋むがこれといって痛む場所はない。

ゆっくりとドアまで歩いていき、たどり着いた所で一言。

「姉貴、ありがとう」

「弟を助けるのは、姉の義務であり権利よ。気にしちゃダメ」

残っていたリンゴを頬張りながら、姉貴は優しく笑った。

「美代さん」

姉貴の部屋は明かりがついていてもどこか薄暗い。

相変わらず頭がぼうつとする臭いは健在で、どこか浮世離れた雰
囲気が漂っている。

その部屋の中に一人、ベッドに腰掛けて床を向いている人がいた。

「悟さん……、もう大丈夫なんですか？」

少しやつれたように見える。

実際のところ彼女は幽霊なので外見的变化はない（らしい）のだが、恐らく彼女という存在が少し薄くなってしまうているのだろう。

「ああ、もうすっかりよくなった。美代さんのお陰だよ」

姉貴の言っていた事から推測すると、俺の体が治れば恐らく美代さ
んも回復する。

だから今は俺が元気だということを精一杯彼女にアピールしておく
たかった。

「ううん……、元はといえば私が案内してなんて頼まなければ」

やっぱり、そういう風に考えがいつちやうか……。

美代さんならそうなると思ってたけど、これは正しておかないわけ

にはいかない。

「あー、何だ。そういうのは無しにしてくれ。無茶しなけりやどうつてことないんだし、その、美代さんを案内できたのは楽しかったしな」

俺の事を気遣ってくれるのは嬉しい。

けれどそのせいで遠慮ばかりされるのは正直悔しいんだ。

本当に俺は壊れてしまったんじゃないかと思ってしまうから。

「俺が出来る事、出来ない事は俺が決めるし、無茶するかしないかも俺が決める。まあ……それで迷惑するのは俺以外かもしれないけど、それ込みで俺の事は俺に任せて欲しい」

ベッドの上の美代さんは俯いたままこちらを見てくれない。

彼女にとっては辛い事かも知れないけど、今は責任とかそういう事をすべて俺に押し付けておいて欲しい。

「……わかりました。悟さんが全部悪いっ！それで……いいんですか？」

「うぐつ。やたらストレートだなあ。ま、文句無しで合格だ。その調子でこれからもよろしく頼むな」

がっちりと握手を交わす。

美代さんの体はしっかりと実体をもっており、先ほどまで見えていたやつれた感じも今では消えていた。

「それで、あの。悟さんにちよつと話しておきたい事があるんです」
握った手を離れた後に、美代さんがそう切り出した。

「私、少し思い出した事があるんです」

「白い壁？」

冷蔵庫の中身を確認し、今夜のメニューが決定した所で先ほど美代さんから聞いた事を姉貴にも伝える。

姉貴と一緒に台所に立つなんて驚天動地さながらの出来事なわけだ

が、相談を持ちかけるにはまたとない機会だ。

「美代さんが言ってた。白い壁をずっと見ていた気がするって」
思い出せたのはそれだけだという。

というよりそれが本当に自分の記憶だったという確信もないらしい。
だけど姉貴なら思い当たる事があるかもしれない。

「白い壁……白い壁……。私が一番最初に思い浮かべるのは病院ね。
多分正解とそう遠くないと思うけど」

毎日のように通っているだけあって姉貴が最初に浮かべるのは職場
だった。

俺も俺で、病院の他に何か白い壁で思い当たる場所は無いかと言わ
れても答えられない。

病院は人の命を救う場所ではあるが、それ故に多くの人が病院でそ
の命を失う。

美代さんもその中の一人なのだろう。

救われなかった、救う事が出来なかった命のなかの一つ。

「なあ姉貴。もしかして姉貴は美代さんの事、知ってるんじゃない
のか？」

ふと頭に浮かんだ事をそのまま口にする。

姉貴は一言、『どうしてそう思うの？』とだけ口にして料理を続け
ている。

「もし美代さんの言う白い壁っていうのが病院だったとして、美代
さんと俺に何か接点があるってのも本当だとしたら巫山の病院が一
番可能性あるだろ？俺が世話になった病院ってあそこだけだし。ま
あ病院以外での接点だったとしたら話は別だけど……」

美代さんが何者か、それを知る手がかりは今のところ美代さんの記
憶だけだ。

今さっき思い出した『白い壁』の記憶、そして俺の事を知っている
という感覚。

俺のほうも美代さんとどこかで会っていないか、と記憶を探ってみ
たが思い出せた事は何も無かった。

「ねえ悟。悟は、運命の糸って信じる？」

返ってきた答えは、俺の予想とはかなりかけ離れていた。

「運命の糸……？姉貴にしちゃロマンチックな言葉が出てきたな」

「ロマンチックね……。知らない方が夢がある事って、この世の中結構あるわよね」

姉貴の意図が掴めない。糸だけあって。

我ながらどうでもいい。

「実在するのよ、運命の糸って。生まれる前から人は、誰かと霊的な繋がりを持っていて、自ずと引き合う存在……。まさしく運命の糸」
ロマンチックな話から一転して、姉貴らしいオカルトじみた話に切り替わる。

「もしかしたら悟と美代ちゃんは今にそれだったのかもしれないわ。亡くなる事が無かったら、どこかで出会って、もしかしたら結ばれていたのかもしれない」

姉貴の言いたい事が何となくわかったような気がした。

「つまり、俺と美代さんは生きてるうちには出会えなかった。でも姉貴曰くその糸を辿って俺の所にきた、そしてその糸があるから俺の事を知っている感覚がした……。てことか？」

「大正解。さすが私の弟。物分りが良くてよろしい」

こういう類の話に対しての物分りのよさは姉貴に叩き込まれているのだろう。

姉貴の教育の賜物だ。嬉しいかどうかは微妙だけど。

「……でだ。つまるところ姉貴は美代さんの事を……」
話を微妙にそらされた気がしてきたので修正を入れる。

二度目の問いに、姉貴は答えた。

「覚えがないわね」

それは予想通りと予想外れの間で揺れるような曖昧さを孕んだ返答だった。

「二人とも、今日は悪かったな」

最近頻度が増えてきた江藤家と狩谷家合同の食事は終わりを告げ、玄関で二人を見送っていた。

見送るといつても、我が家の玄関から狩谷家の玄関まで三十秒もかからず到着するのだが。

「悟、謝るのは禁止って約束しなかった？」

「そうそう。謝るくらいなら体で返せって言っただろ？」

そうだった……と、苦笑を漏らす。

二度ならず三度も馬鹿してしまっただせいで、借りを全部返すまでにはかなり時間がかかってしまいそうだ。

借りの有り無しに関わらず、俺達三人の関係には大した違いは出ないから問題なんて有りはしないが。

「ところで美代さんの事だけど、大丈夫なの？私達より彼女の事気にかけてほうがいいんじゃない？」

食事の席に美代さんも同席したのはいいが、終始無言、あまつさえおかわり無しという前代未聞の事態が起こった。

今はもう姉貴と一緒に部屋に戻っており、この場にはいない。

「うーん、大丈夫だとは思う……けど」

今日最初に美代さんと顔を合わせた時のような虚ろで、消えそうな雰囲気は食事の時には見えなかった。

責任は全部俺にとって事には納得してもらったと思っただけど、それでもなかったのかもしれない。

「寝る前にもう一度声かけてみる。それで駄目なら……明日からコソコソとやってほしいさ」

悟らしいわと綾が軽く笑う。

「さて、と。帰って寝直すか。徹夜した分を取り戻すにはまだ寝たりねえ」

「そうね。私なんて部活した後に徹夜よ？明日起きれないかも」

「……返す言葉もありません」

くすくすと兄妹揃って意地の悪い笑いを浮かばせる。

そしてその笑いを崩さぬまま、自宅への帰還を済ませていった。

「二人とも、本当にありがとう」

二人の姿が家の中に消えたのを確認して、俺は一番言いたかった言葉
を口にしました。

第七話：幕開け

新しい週の始まり……厳密に言えば一週間の最初の日は日曜日なのだが、休み関係無しに忙しい人や平日関係無しに休んでいる人以外は週の始まりといえれば月曜日と言えるだろう。

その月曜日の朝、昨晚解決する事ができなかった懸念事項がテーブルの上に置かれていた一枚の手紙によって俺の心の支配率を大きく上昇させていた。

『お姉さんと出かけてきます。悟さんが帰宅する頃には戻ると思いますが』

昨晚綾と雄が帰った後、美代さんともう一度話をしようとした姉貴の部屋に向かった所、部屋の前で待ち構えていた姉貴に『今日のところは何も言わないでおいてあげて』と言われ、美代さんが予想以上に今回の事を気にしていると知った俺は、せめて学校に行く前に一言……と思っていたわけで、それがこの手紙によって叶わないと知らされたのだから心穏やかになどなれるわけがなかった。

姉貴と一緒にということだからそれほど心配しなくても良さそうなものだが、落ち着かなさというのはどうにも拭えるものではなかった。晩飯の残りを暖めて朝食の体裁を取り、顔を洗って制服に着替えても俺の心の揺らぎは収まらなかった。

夏の日差しはこんな日に限って容赦なく照りつけてきていて、家を出る前からうつすらと汗をかいてしまっている。

まるで……一週間前のあの日を思い出させるような熱気だった。もしかしたら、家を出た瞬間に、また……。

「今日はまたあっちいなあ、江藤！」

平手による鈍痛が背中に走る。

ただでさえ暑いというのに、更に暑くなる挨拶をしてくるな。

「ああ、暑いな……」

まったくもって暑い、暑すぎる。

家から出て、学校へたどり着いても今日という日は暑いままだった。

もう一度あんな極寒地獄を味わいたいわけでも、更に一人同居を増やす事体になりたいわけでもないのだが、心の中の不安は気持ち悪い事この上なかった。

「何だ、元気ないな。まだ本調子じゃないのか？」

「んー……。体はもう良くなった……。って何で知ってるんだよ」

コイツには俺の体の事を話した事は無かったと思うのだが。

「土曜にグラウンドで部活してたヤツは大体知ってるよ。俺は俺で陸上部からの依頼でカメラ回してたからな」

こんなヤツでもカメラを回せば有能なヤツらしいから、そういった依頼は度々来るとは聞いていたけどあの日に限って仕事してる事はないだろう。

とりあえず俺の足について知っているわけでもないし、純粹に心配しているようなのでその気持ちは素直に受け取っておく。

別に、隠してるわけでもないんだが……。知られて余計な心配をかけるられるわけにもいかない。

「なら元気が無いのは別の理由か。……さては平坂さん関係だな」
ギクツと体が素直な反応を返してしまう。

馬鹿正直な俺の体が憎らしいぜ、まったく。

「そうかそうか。なら俺はノータッチを決め込まないとな。姐さんに惚れ込んだじゃいるけど、巻き込まれたいわけじゃないし」

何で美代さんの事が姉貴がらみの人だと……。って雄のヤツが喋ったのか。

「いんや、狩谷兄からは何も聞いてない。ただほら、一昨日の時コイツにばっちり映らなかつたからな。普通の人じゃないだろうと思つてたけど、まさか本物とは思わなかつたさ」

そういつて手に持っているカメラを叩く。

実体を持つてるとはいつてもやつぱり幽霊つてカメラとか鏡の類は映らないのか。

別にコイツになら知られても構いやしないだろうけど、一応気をつけておくか。

とはいつてもほとんど家にいるし、出かける時は姉貴がついてるのがほとんどだし大した事でもないか。

「おはようっ。悟、筒井君」

「ふあああ……。ねむ……」

後ろから投げ掛けられた挨拶におはようと返す。

「二人とも遅いな。狩谷兄はともかく、妹は朝練無いのか？」

陸上部期待の星であり、また自らの進級がかかっている綾にとって朝練をサボるとはあつてはならない事なのだが。

「そんなもの出れるわけじゃないじゃない。あつはつは」

わざとらしく笑いながら俺の背中を叩く。

筒井のヤツは意図を把握しかねて首を傾げているが、当然のごとく俺はその原因を知っている、というより原因そのものだ。

今の俺にとってはこういう綾の態度がとても心地よい。

「んじゃもうHR始まるし、またね」

そう言つて自分の席へと向かつていく。

雄も眠たげな足取りでその後続いた。

わずかに間を置いて遅刻かそうでないかの境界を示す予鈴が鳴り響く。

回りの教室から教師が中へ入ったと思われるドアの音が鳴る。

少し遅れてこの教室のドアも開き、担任が中に……。

「って陵先生？」

入ってきたのは担任の光坂先生ではなく保険医である陵先生だった。

自然と教室の中がざわめきに溢れた。

「はい、静かに。光坂くんは今日お休みなので私が代理でHRします」

ざわめきはおさまらない。

それだけあの先生が休むのは珍しい事であり、保険医がその代理というのも何かおかしくはないだろうか。

「先生、今日の朝のミーティングには映先生来ましたけど」

ざわめきの中で筒井が陵先生に問いかける。

そういえば映研の顧問は光坂先生だったっけ。

「あー。正確に言えば休み、じゃなくて早退か。何でも古傷が痛むよう。流石の私も手の施しようがないのよね、アレは」

陵先生は笑いながら話すが、生徒にとっては心配するに値する内容だった。

俺はというと、心配というより嫌な予感がした訳だが。

「それと、出席をとる前にこんな時期ですが君たちに新しい仲間を紹介したいと思います」

先ほどまで先生を想う理想的な生徒達はその言葉で一転し、先ほどとは違う意味でざわめきだした。

「転校生？先生、私は何も聞いていませんが」
異を唱えたのは古屋だった。

生徒会が強い権限を持つこの学校では転校生等の情報も生徒会を通してしている。

「本当は夏休み明けに転校してくる予定だったんだけど、少しでも早くここに馴染みたいっていう本人の強い希望で急遽今日からということになったのよ」

そうなんですかと、やや納得しきれて無い様子だったがそのまま古屋は口を閉ざした。

「いいわよー。入ってきなさい」

先生が手招きして教室の外へと合図を送る。
ゆっくりとドアが開き、外から制服を着た

一際強まるざわめきの中で、ゴンツという鈍い音がかすかに響いた。俺が机に頭をぶつけた音なわけなのだが。

「やっぱりか……」

まず最初に教室のドアから現れたのは揺れる長い黒髪だった。

恐る恐るといった風に中を覗く姿は、リスのような小動物を思い出させる。

既にこの時には歓声、主に男子の声があがっていた。

一目で男の期待を引き上げる美しさは同姓をも魅了し、羨望の眼差しを向ける人もいる。

しかし彼女が一步教室の中に入るとそのざわめきは落ち着いていく。ざわめくなど無駄な事はしてられない、少しの間も視界から外してられない、そんな空気が漂っていた。

それほど彼女の美しさとはある種の完成を見せていたのだ。

身に纏っているのは毎日のように目にし、毎日のように袖を通している物なはずなのに、とてもそうには思えない。

まるで、彼女のためにデザインしたような……彼女が着るために作られたような幻想的な雰囲気を放っている。

きつそうな胸元もその雰囲気が強めている要素の一つなのかもしれない。

俺も俺で机なぞに頭をぶつけている場合などではなかった。

毎日顔をあわせている美代さんが、制服を着ただけでこんなに受ける印象が強くなるなんて思っていなかった。

ゆっくりと先生の隣まで歩いて行き、深くお辞儀をする。

「あ、あのっ。私、平坂美代と言います。よろしくおねがひ、……します」

ただそれは、あまりに人間味にあふれた自己紹介によってあえなく砕け散ること事となった。

そして半日を掛けたテスト返却を終えて放課後となった時には、授業の合間に設けられている休み時間を経て作られた二つのグループが形成されていた。

一つ、美代さんを取り囲み質問を浴びせる女子の集団。

一つ、俺を取り囲み逃がすまいとする悪鬼と化した男子の集団。

「てめえ、江藤！どういう事だ！」

その中の一人が声を張り上げる。

「どうもこうもねえよ。さっき美代さんが言ってただろ。美代さんは俺の従兄妹でこの学校に通う間うちに下宿してるだけだ」

俺もついさつき知った事をさも当然のように口にする。

どうにも美代さんはあらゆる質問に対する答えを用意してあるようで、俺と同居している事実もそういう風に答えたようだ。

しかしそれで納得できるほど美代さんは普通の人ではなく、余りにも羨ましい状況下にある俺を許せない哀しい男の性がそこにはあった。

事情を知っている三人は、そんな様子を遠くからさも楽しそうに眺めていた。

相変わらずここぞという時には非情になりやがる。

悪鬼達はいよいよヒートアップしていく。

ねっとりとした呪いじみたオーラを撒き散らし、胃の一つや二つが悲鳴をあげかけている。

「どきなさい」

そのオーラを抑揚の無い声による一言が一刀両断する。

「古屋……」

声の主が我がクラスの事実上トップに君臨する副会長様と分かるや否や、蜘蛛の子を散らすように俺から離れていく。

秒を数える間に出来た道を古屋がゆつくりと歩いてくる。

先ほどまで群がっていた男共が放っていたオーラなどは比べ物にならない何かを放ちながらゆつくりと歩いてくる。

俺は知っている。

知らない人からすればいつもとさほど変わらない声だったが、知っている人には悪魔のそれに近い。

「ちよつと、トモ！」

たまらず綾が止めに入る。

傍観を楽しんでいた綾が飛び出す様がこの状況のヤバさを物語っている。

「大丈夫、少し江藤君に質問があるだけだから」

一瞬綾に優しげな微笑みを向け、再び獲物を食い殺すような目であに迫ってくる。

「いつから？」

一言、主語なんて影も形もない言葉の意味を何とか推測する。

「一週間……前から」

古屋から感じる威圧が俺の発声器官を不安定にする。

「一週間前というと、江藤君が早退した日……。それについて何か言うことは」

言うことは、と言われても取り憑かれて生命の危機に立たされていきました等とは言うわけにもいかず、俺はうわ言のように偶然、偶然と繰り返す事しか出来なかった。

「年頃の男女が一つ屋根の下で生活を共にする。学生の身分ではいささか問題があるように思えます。間違いが起こってしまったからでは遅いのですが」

間違いと言われても姉貴という絶対防御の前では起こしたくとも起こせない。

「大丈夫。うん、大丈夫」

まるで自分に言い聞かせるかのように言葉を口にするあたり実に説得力に欠ける。

「何があってもですか？」

「何があってもです」

「神に誓えますか？」

「ち、誓えます」

この誓いは男として少し惜しくはあるが、誓わない＝死っぽいこの状況では誓う以外に道が無い。

「……やはり、江藤君……貴方」

食い殺すような剣幕で迫ってきていた古屋が一転して口元に手を当てて一歩下がる。

その顔はわずかに赤く染まっているように見えた。

そしてふらついた足取りで自分の席へと戻り、机に伏してしまう。

「何なんだ……古屋は」

古屋と仲の良い綾も、今のやりとりの真意が掴めず首を傾げている。とにかく嵐は去った。

一度散った悪鬼達は再び集結することなく、帰り支度を済ませささと教室から退去していった。

とぼつちりを受けないための、賢明な行動と言える。

「悟さん」

ほっと一息ついた所に鞆を持った美代さんがやってくる。

先ほどの古屋の一件で、美代さんを取り囲んでいた女子達も散会したようではんの数分の間に教室にいる人間は数人にまでになった。

「えっと、その……ごめんなさい！」

突然深く腰を折り、謝罪の意を示す美代さん。

「うえ？」

謝れるような事が思い当らなかった俺は素っ頓狂な声をあげてしまう。

「えっと……昨日の夜の事と、今朝の置手紙の事。多分悟さん、かなり私の事心配してしまったのではないかと思って」

今朝の置手紙……。

確かにあれは思わせぶりな内容ではあったけど、それは昨日の夜姉貴に美代さんをそつとしておいてあげてって言われたから……ってまさか！

「その……昨夜は私、落ち込んでいたわけじゃなくて……コレ、読

んでたんです」

そういつて美代さんが鞆から取り出したのは一冊の大学ノート。表紙には『必勝！転校生がクラスに馴染むための質問応答マニュアル！幽霊編』と書かれていた。

「はあ~~~~~」

聞く人全てのやる気を削ぐような長い溜息が俺の口からあふれ出す。事の顛末がようやく掴めた気がする。

「つまり、昨夜の姉貴の言動も、今朝の置手紙も俺に揺さぶりをかけるためのものだったって事か……」

相変わらず姉貴の弟いじめはさりげない陰湿さで困ったものだ。

俺が今朝から……正確に言えば昨夜から抱いていた不安はもの見事に無駄な気苦労と化した。

「本当にごめんなさいっ。人生にはサプライズが必要だから協力してっってお姉さんに言われて……」

あんなのを姉貴に持ったせいで人生の半分くらいがサプライズなんだから、これ以上増やさないで欲しいものだ。

「まあいいさ。今日はもう学校終わりだから、帰るか」

部活に顔を出そうとも思ったが、美代さんの初下校なわけだし、今は右足に負担をかけるのは避けたいので、今日のところはまっすぐ下校しよう。

「あっ、そうです。職員室にこれを出してねっってお姉さんに言われているので、一緒に来てくれませんか？」

そう言って大学ノートのページの合間に挟まっていた一枚の紙を出して俺に手渡す。

「ん……入部届け？美代さん、部活でもやるのか……っ、ちょっと待った！」

渡された紙の真ん中あたりにつづられた『オカルト研究会』という文字が俺の心を再び不安色に染め上げていった。

第八話：今決める事

私立巫山高等学校、我が母校だ。

以前にもお伝えしたが、我が母校は風変わりな構造をしている。

一階に職員室、保健室等があるのは普通だとして、二階に三年、三階に二年、四階に一年の教室が連なっているというのは珍しい部類に入ると思う。

というわけで、俺は二年の教室を出て保健室へと向かっている最中なのである。

隣には入部届を抱えた美代さんが、後ろには鬼人のごとく形相でついてくる古屋を伴って。

「古屋……俺や美代さんに文句を言うのは筋違いだと思うが」
恐る恐る声をかけてみる。

「わかってます。ええ、わかってます。ですが……」
拳を震わし、納得がいかないことからくるやるせない怒りを表現する。

「私に話が通らないうちに転校してきた人がよりにもよってあの鳥居槻実率いるオカルト研最後の一人だなんて、納得できるわけがありません！」

先週末に会長が言っていたもう一人新入会員の目途があるというのは美代さんの事に他ならない。

つまり会長はあの時点で美代さんが転校してくる事を知っており、あらかじめ姉貴を通して美代さんがオカルト研に入るように仕向けていたのだろう。

「これは陰謀です！私を陥れるための陰謀です！江藤君、その辺りの事承知しているんでしょうね！」

その辺りって一体どの辺り！？

「陥れるって……。別にオカルト研が古屋に何かするわけでもないだろ」

あの会長が個人に対しての嫌がらせとかする人なわけがない。
あまりにも似合わなさすぎる。

「もし会長が何か古屋に何か仕出かそうとしたら、俺が止めるからさ」

「……あまり頼りになりそうにないですね」
まったくもってその通り。

何といても会長のバックには我が家の絶対権力姉上様がいらっしやるのだから。

「あの……オカルト研究会って怖いところなんですか？」

俺と古屋の何やら物騒な会話を傍で聞いていた美代さんが不安げな表情で尋ねてくる。

「平坂さん、貴女何も知らないでオカルト研究会に入ろうとしているの？」

もしかしたら美代さんはオカルト研究会がどういう所か、というよりオカルトという単語の意味すら知らないかもしれない。
自分自身がまさにオカルトだというのに……。

「え、あの、会長さんにはお会いしたことがあります。この学校で知っている人って余り多くなくて……、お姉さんがオカルト研にいればいざという時も大丈夫って……。あ、これは、あの秘密です。忘れてくださいっ」

忘れてくださいと言われると、逆に忘れられなくなるものですよ美代さん。

まあ今のでなんとなく姉貴の意図が掴めた気がする。

美代さんに何かあったとき、医者……陵先生ならなんとか出来そうな気もしないでもないけどやっぱり専門（？）の会長がいてくれたほうが安心だ。

「……………」
事情を知らない古屋は首を傾げている。

納得できない事がまた一つ増えてしまったようだ。

「それにしても、入部届ならぬ入会届を渡すなら朝のうちでもよか

「つたんじゃないのか？顧問、陵先生なわけだし」

話是最初に戻るわけだが、今俺達は保健室へと足を進めている。部活や同好会に入る時、入部届に希望する場所を記載したのち顧問に提出するというのがルールとなっている。

オカルト研の顧問は一応陵先生という事になっているのだから朝のHRの際に渡しておけば済む話なのだが……。

「えっと、お姉さんが渡すときは放課後、悟さんと一緒に行ったほうがいいって」

また姉貴の不可解な指示か。

悪い事にはならないだろうけど、少なくとも何も無いというわけにはいかないんだろうなあ。

一階へとつづく階段を降り、数十メートル歩いた先にある保健室へと到着する。

「失礼します」

先頭をきって入室し、保健室の主に一礼する。

続いて後ろから美代さん、古屋と続きそれほど広くない保健室に計四人が集まった。

「お、来たね。灯さんも一緒か。まあ来るんじゃないかとは思ってたけど」

白衣の保険医は珍しく眼鏡を着用し、それなりの厚みをもった紙の束と睨めっこをしていた。

俺達が来たのを確認すると、紙の束を机の引き出しへとしまい、眼鏡もはずしてケースに収める。

「で、例のものは？」

「はいっ」

元気よく美代さんは返事をし、陵先生へと手渡した。

それを恨めしそうに睨みつける古屋。

「灯さんもあんまり怖い顔しないの。気持ちはわかるけど、これはもう校則にのつとった正しい手続きなわけなんだから」

「……わかってます」

校則を出されると古屋は弱い。

校則を何より重んじる生徒会員の鑑だ。

「これでオカルト同好会、もとい研究会は正会員が三名となり改めてこの学校の研究会と認められるわけだけど、悟君はそれでいい？ 結構無理やり入れられたみたいだけど」

「別に、いいです。反対したところでどうにかなるものでもないしそれが姉貴の意思なら、俺に反論があるはずがない。

「ところがどっこい、そういうわけにはいかないのよね」
先生の目つきが、変わる。

どこか姉貴に似た、逆らえる気がしてこない強い強制力を持っているような目。

「それって、どういう事……ですか」

俺をオカルト研へと入れようとしたのは姉貴だ。

だというのにそういうわけにはいかないとは、どういうことなのだろうか。

一瞬のうちに緊迫していく空気に、美代さんも古屋も……もちろん俺も動揺を隠せない。

「被奈からの伝言。そろそろケジメをつけろ、だとさ」
がくん、と。

その一言で何か大切なものを握られた気がした。

「これから貴方のそこそこプライベートな話になるけど、人払いする？」

どのような内容の話かは大方予想がつく。

予想通りの話ならば聞かれても特にどうということは無いけど……。あまり人に聞かせて気持ちの悪い話ではないし、二人には悪いけど……。

「じゃあ……」

「ちよつと待って下さい！」

二人に外に出ていてくれないかとお願いしようとした最中、美代さんの声が保健室に響いた。

「ごめんなさい。聞かれたくないのはわかります。けど、悟さんの事なら私聞きたいです。知っておきたいです！」

強い意志が感じられる言葉。

「学年が違えばいざ知らず、同じ学年、ましてや同じクラスで過ごす仲間の事なら私は大抵の事を把握しています。その範疇でなら聞いていても構いませんか？」

それに古屋が続く。

大抵把握してる……ってやっぱり古屋はタダ者じゃないな。

「そう……じゃあ、どのくらい知っているかも兼ねて灯さんに悟君の経緯をざっと並べてもらおうかしら。それでいい？」

元々二人に聞かせたくないわけじゃない。

聞いてもつまらない思いをさせるだけだと思ってたから出ていてもならないかと言おうとしたのだから、二人が聞きたいというのなら断る理由はない。

頷き一つで、先生に、古屋に合図を送る。

「じゃあ、灯さん。悟君が受験生の頃に起こった事、教えてくれなにかしら」

そう言われた古屋は、懐から一冊の手帳を出し俺のページらしき場所を開き読み始めた。

「江藤悟、自らが所属する中学サッカー部を県大会優勝へと導き、巫山高特待生へと挑戦する切符を手にする」

自分の経緯を晒されるのはやはり少し恥ずかしい。

この学校、巫山高のサッカー部は夏、冬ともにその名を毎年連ねる強豪であり、そんな高校のサッカー特待生というのはかなりの優遇を受けると同時に、それを勝ち取るには生半可な実力では到底無理だ。

中学時代、全国レベルの成績を上げてようやく特待生試験へと挑戦

する切符を手にする事ができるくらいだ。

古屋によって、俺がそういう人間だったという事を思い出した。

「合格確実と言われて臨んだ特待生試験。期待通りの成績を上げ、文句なしの合格と審査するまでもなく言い渡される」

その中でも俺は飛びぬけていた。

自分で言うのも、何なんだけど。

思えば、あの時が俺の最後の煌めきだったのだろう。

「……………」

その次を古屋は言い出さない。

そこまで知っていて、その先を知らないというわけはないだろう。

ただ単に、言いづらいだけ……………か。

「その、試験の……………帰り、運転席に父、助手席に母、そして後部座席に江藤君を乗せた車が……………事故に遭う」

右足が、じくりと痛んだ気がした。

なんてことない普通の事故だった。

飲酒運転のトラックが、信号を無視して突っ込んできた、ニュースの中では誰もがよく目にしていながら、自分には起こらないだろうと楽観視するような、ありふれた事故。

医者に言わせれば運が悪かった。

俺に言わせても、運が悪かった。

だから一人で電車で行くと言ったんだ。

息子の晴れ舞台だといっても、両親揃って車で送迎なんてする必要無かったのに……………。

「江藤君の両親は、その事故で……………他界。奇跡的に一命を取り留めた江藤君も、右足に……………後遺症が残る」

右足に、後遺症。

それを聞いた美代さんが一瞬体を震わせる。

俺が右足に後遺症を持っているという事は、古屋でなくても知っている人は多い。

ただ……………それがどういった後遺症なのかを知る者はほとんどいない。

「特待生の件は、白紙になり……、その後一般入試により巫山高へと入学。サッカー部へと入部し、今に至る……」
古屋が手帳を読み終える。

流石、としか言いようがない。

俺が抱えている事情を、余すことなく把握していた。手帳を懐へとしまった古屋が少し俯く。

やはり、聞かせても、思い出させてもつまらない思いをさせるだけの話だった。

「……すごいわね。さすが副会長。さて確認が終えた所で聞くけど再び俺を姉貴と似た目で捕えながら、言った。

「どうして、サッカー部に入ったの？いえ、未だにサッカー部に残っているの？悟君」

この人は本当に学校の保険医なのだろうか。

ただの一言で核心をついてくる様はまるで捕虜を尋問する軍人のようだ。

「だって悟さんは……っ」

答えられないでいた俺に代わって美代さんが答えようとしたのをすんでのところで止める。

この答えは誰かに代わってもらっていいものではない。

「諦めきれなかったから、出来る範囲だけでもしたかったからなんて甘い事が許されるとは思っただけじゃないわよね？」

普通ならば、それでも良かった、許された。

ただ、俺にはそんな甘えが許されるはずもなかった。

「灯さん、去年サッカー部に起きた事、わかる？」

「え……っ？」

突然話を振られて驚く古屋。

去年の出来事は手帳に記録していないのか、自らの記憶から該当する情報を探している。

「特に……これといった事は無かったと思います。強いて言うなら……その時からあまりサッカー部の成績は芳しくは無いという事で

すか」

そう、なのだ。

我が校が誇る全国の常連であるサッカー部は去年からぱったりとその姿を、その名を消した。

正確には県大会の一試合目、二試合目で敗退している。

これまでの成績から考えれば、調子が悪かったで済まされる結果ではない。

「その原因が……俺なんだ」

口にして、再び自分がしでかした事の大きさを噛みしめる。

それと同時に、未だに部にその名を連ねている浅ましさを呪う。

「今のサッカー部にとって、悟君は百害あって一利くらいしかない。そんな事、自分でもわかってるんでしよう」

今現在、サッカー部は建て直しの真つ最中だ。

去年の成績のせいか学校からの援助はかなり減り、全国から選りすぐりを集める……といった事ができないでいた。

かといってその年の成績が悪かったからといってサッカーをする場所としては申し分ない所というのは変わりはない。

サッカー部目当てで難しい入学試験をパスしてまで巫山高を志望する人は後を絶たない。

しかし特待生として引き抜く事が出来ない以上、新生生の質は下がってしまう。

だから今はその新生生の育成に総がかりでかかっている状態なのだ。俺も……それに協力しようとしてもいるだけでマイナスを与えてしま

まう上に一時間しか俺は参加することができない。

あまりにも中途半端で……誰も喜ばない行為だ。

「この学校でボールを蹴る。それがどれだけの事なのかは私にはわからない。だけど今何が大事か、わからないわけではないでしょう？」

そんなもの、わかっている。

蹴れないものは蹴れない。

わかっているのだから、今できる事といえば僅かしかない治る可能

性にかけて足に負担をかけない事。

姉貴が俺の足を治す方法を探している事だっけ知ってる。

だというのに俺は、それを無碍にするような事を……。

「わがままを通すのも通さないのも貴方の勝手だけど、それでいいの？」

先生が椅子から立ち上がる。

一枚の紙を取り出して。

「オカルト研が正式にスタートするのを機会にもう一度考えてみて
そしてそれを俺に渡す。」

先ほど美代さんが、先生に渡したものと逆の意味を持つ紙を。

「悟さん……」

美代さんが、心配そうに俺を見てくれる。

「美代さん、悪いけど先に部屋に行つててくれないか？」
手渡された紙を見ながら、決める。

「少し、寄る所ができたから……」

第九話：憧れの人

巫山高校第二グラウンド。

綺麗にならされた土の上を何十人もの生徒が走り回っている。

この場所に、この時間に制服で立ち入るとは思ってもいなかった。手には一枚の紙。

ボールペンで俺の名前が書かれている。

「さて、と。監督はどこかな」

その紙を渡すことがどういう意味を持っているかという事を理解しているのに俺の心はいたって平穩だった。

きっと俺自身もそうしたい、そうしなければならぬとずっと思ってたのだろつ。

「江藤？」

後ろから声がかかる。

「速水部長……」

振り返った先にはこの部をまとめている部長の姿があった。

「制服つてことは、今日も参加していかないのか。それとも、後輩の指導にでも来てくれたのか？」

思えばこの場所に立ち入るのも大分久しぶりだった。

部活用のグラウンドなので体育の授業では入らないし、テスト期間中やテスト本番中は部活中止だし、テスト終わってからは一度も参加していなかったからだ。

「いえ、これを……出しに来ました」

一枚の白い紙を見せる。

それが何の紙なのかは書いてある内容を見ないでもこの人にはわかったようだ。

「……そうか。監督ならいつもの場所だけど、俺が代わりに出しておくか？」

その申し出に甘えて、俺はその紙を部長に渡す。

本来なら、こんな大事なものは自分で出すべきなのだと思う。ただどうしても、監督を目の前にしたら俺はきつと出せないだろう。

あの日、俺に文句なしの合格だと期待に溢れた目を向けてくれたあの監督には。

そしてきつと渡す姿はあの子にも見られてしまう。

監督の事と同じくらいに、俺のそんな姿を見せたくない人だった。

「すいません。よろしくお願いします」

深く頭を下げて礼をする。

申し訳なさで頭が一杯になる。

結局俺はこの人との約束も……。

「江藤。俺は諦めてないからな」

下げていた頭を上げた時には、すでにグラウンドの中央へと歩き始めていて背中しか見えなかったが、その背中が確かに言った。

「お前と同じユニフォームを着てプレイしたい。この学校で果たされるはずだった約束、いつか必ず守ってもらうからな」

そういつて歩きを走りに変えて遠ざかっていく。

体が震える。

今すぐこの制服を脱ぎ捨ててグラウンドに溢れる熱い声の中に混じりたい衝動を必死に抑える。

今は、そう今は耐える時なんだ。

いつかまた、戻るために。

そう心に決め、俺は踵を返してグラウンドを後にした。

思ったよりも早く用事が終わったので、陸上部が練習をしている隣の第一グラウンドを覗きに行く。

とはいえ、主に視界に入ってくるのは高跳び、幅跳び等で綾の姿は見えない。

ロードワークか、競技場にも行ってるのか……。

綾の頑張っている姿を見ると、今みたいな憂鬱な気分を払拭できるから少し見学して行きたかったのだが……。

男として格好悪い事だとは思うけど、俺が頑張れなくなってからその分綾に頑張ってもらおう……というよりも身近な人が頑張っている姿を見て自分を落ちつけている。

「いたとしても邪魔になっただら悪いし、さっさと戻るか……」

今頃オカルト研の部室で美代さんと会長が待っているだろうし、さっさと靴を履き替えて行くとするか。

校舎より第一グラウンドを横切り、下駄箱へと向かう。

まばらだがまだ他の生徒の姿が見える。

そのほとんどが校門へと向かう中、その流れに逆らって校舎の中に入る。

「先輩！」

靴を履きかえ校舎の奥に進もうとした時、女の子の大きな声が反響した。

固有名詞の無い呼びかけだったが、それが自分に向けられているという事を感じ振り返った先には体操着を着た女の子が立っていた。

息切れた肩と一緒に、栗色のセミロングの髪が上下に揺れている。彼女の大きい瞳が、俺を射抜くように真っ直ぐこちらを見つめていた。

「メグ……、どうした？ マネージャーとはいえ部活を抜け出したら駄目だろう」

彼女は初瀬巡はせめぐり、愛称メグ。俺が先ほどまで所属していたサッカー部の一年生マネージャーだ。

元から人懐っこい性格ではあるものの、俺には特別に懐いてくれていた女の子だ。

まあ、それはこの高校に入る以前から知り合いだったという事からなのだけでも。

「そんな事はいいんです！ それよりも……それよりもっ」

顔を伏せながら一步一步近づいてくる。

そして手が届く距離まで歩いてくると俺の制服の裾を強く握る。

「辞めないでください……。行かないでください……」

泣きそうな声で、そう懇願した。

もうメグにも伝わってしまったのか……。

何となくこうなる予感がしていたので、監督に直接渡さず部長に渡してもらおうよう頼んだというのに……。この分では部長、直接彼女に話したんだろうな。

「メグ……俺がもうサッカーできる体じゃないって知ってるだろ？
だというのに、俺がサッカー部にいる必要なんて……。ないだろ」

あの日事故に合って何週間も生死の境を彷徨った後、病院内で目覚めた俺を見舞ってくれた人達の中にメグの姿もあった。

姉貴や、家族同然の綾や雄と同じくらいメグは俺の事を心配して、
想ってくれた。

そして……。誰よりもボールを蹴れなくなった俺を惜しんでくれた。

「でも……。でも、でもっ！一年生の指導とか、きつと出来る事は一杯あるはずです！何も……。部活自体辞めなくなつて……」

精一杯俺が部活に残って欲しいと説得を続けるメグ。

その気持ちは嬉しい。

……。
だけど……。

「自分が蹴れなきゃ、意味がないんだ」

メグが俺の言葉に反応して伏せていた顔を上げる。

その瞳にはうつすらと涙がにじんでいた。

自分でも我がままな言い分だと思う。

「自分の足で走って、自分の足で蹴る。そうじゃないと、俺は嫌なんだ」

自分のしたいサッカーをやりきれたのなら、後から続く者を育てる楽しみなんてのも出てくるんだろうけど、今の俺にはそういうものは無かった。

「それに俺は諦めたわけじゃない。いや……。思えば、今まで諦めて

いたのかもしれない。今にしがみついて、出来もしない事を続けていた」

そのせいで部には迷惑をかけたし、この足だって悪化してしまったかもしれない。

姉貴が頑張ってくれている事だって、知らないわけじゃなかったのに。

「メグ、俺は確かに部を辞めたけど、サッカーを辞めたわけじゃない。高校では無理かもしれないけど、きつと……」

子供の頃から夢に見ていた舞台に立つ事を諦めきれないわけがなかった。

ずっと俺は中途半端に壊れてしまったせいで、諦めきれずに自暴自棄になっていた。

いつそ無くなってしまうんじゃないかと思っていた時もあった。

今思えば何て恥ずかしい自分だったのだろう。

「先輩……。そっか、先輩は先輩でたくさん事を決めたんですね」
彼女の瞳からにじみ出ていた涙がいつのまにか無くなっている。

そしてその涙の存在を消すかのような笑顔で彼女は言った。

「私、先輩の事が好きです」

唐突に、そして真っ直ぐで純粋な告白。

彼女の笑顔に朱が混じっていく。

「メグ……」

急すぎて驚くと共に周りに人がいないかを確認してしまう。

馬鹿か俺は。

そんな事をするより先にする事が、何か言う事があるだろうか。

「先輩を追いかけてこの学校入って、腑抜けた先輩を見た時は正直がっかりしました。でもやっぱり、先輩は先輩です」

言葉が出せない俺をたたみ込むように言葉を重ねていく。

そこには今まで感じた事がない種類の暖かい想いがあった。

「私、サッカー部のマネージャーなんかより、先輩の……先輩だけのマネージャーになりたいです」

ちよつと、くさいかな……と、頬をかきながら下を向いてしまう。俺は俺で、彼女とは逆に恥ずかしさで上を向いてしまう。

何か言わなければ、こんなに真つ直ぐ想いを告げてくれている彼女に何か言わねばと思っても言葉が出てこない。

「でも、無理ですよ。私なんか」

言葉が見つからないまま、再び彼女が言葉を重ねていく。

しかし、重なる場所は先ほどとは違っていた。

「先輩、モテますもんね。今日転校してきた人もすっごい綺麗な人だったし、あの……先輩と同居してるって」

「いや……美代さんは従兄妹で同居というより下宿みたいな感じで……」

そして俺は、白々しい嘘を重ねていく。

「それにツキちゃんだって……」

「いや、会長は違う」

これだけはきっぱり言えた。

会長とそういう付き合いになるとは到底思えない。

会長自身もそう思っているはずだ。

「今の言い方、ツキちゃんが聞いたらきつと怒りますよ？」

笑顔に少し儂さが混じる。

「それに私、綾先輩には絶対勝てる気がしませんから」

そしてやはり、最後には綾の名前があがった。

あれだけ一緒にいれば勘違いされるのも無理は無いのだけれど、綾とは決してそういう関係じゃない。

恋人とか、そんなのよりもっと大切な……家族みたいなものだ。

「格好いいですよ、綾先輩。背も高くて、明るくて、陸上部のエンジニアだし、家事だってこなせる。私の理想そのものです」

頭は悪いけどな、と茶化す気にはなれなかった。

確かに俺だって、すごい女だと思う。

だからこそ、綾には綾にふさわしい人がいるだろう。

「だから……格好いい先輩二人は、とてもお似合いだと思います。」

私になりたいのもきつと二人のマネージャーなんだと思います」
メグは俺なんかを綾にふさわしいなんて言ってくれる。

自分の気持ちを押さえつけてまで。

俺は、そんな彼女に何を言うべきなのだろうか。

「ごめんなさい。変な話してしまって。私、そろそろ部活に戻りますね。先輩、また！」

結局俺は何も言えないまま、走り去って行くメグを無言で見送ってしまう。

暫く彼女が走り去って行った方向を見ながらぼんやりと考えていた。思えば、これが初めてだった。

自分でいうのもなんだけど、地元では結構有名人だったのでそれなりにモテていたといえればモテていた。

だけどそれはあくまで有名であつたからであつて、現にサッカーができなくなつて以来はさっぱりだ。

でもメグは違う。

こんなになつてしまった俺でも想っていてくれていた。

そしてそれを俺に真っ直ぐ伝えてくれた。

悪い気はしない、するはずがない。

それだけに俺は彼女に何て言っていかわからなかった。

部を辞めてしまったので、きつと彼女と会う回数は減つてしまつたろう。

でも次ゆっくりと話す機会があつたら、何を言うべきか考えておく必要があるだろう。

そうやって俺はとりあえずの結論を出し、待たしているオカルト研究会員の元へ向かうため校舎の中へ向かう。

その瞬間、メグとは違う走り去る影が見えた、気がした。

「で、何やってるんだよ二人とも」

校舎へと入ってから一分程度でオカルト研部室へと到着し、部室のドアを開けた瞬間広がったのは机に並べられた沢山の本とその中の一つを手に持ってまじまじと見ている美代さんとぶら下がり健康機で遊んでいる会長だった。

「あ、おかえりなさい。悟さん」

「サ、トー……くん。お、かえり」

会長は何やら苦しそうだ。

苦しいのならその手を離せばいいのに。

ぶら下がり健康機なんて先週までなかったはずなのに一体どこから持って来たんだろうか。

「サ、サトーくん……」

全身を震わせながら会長が俺の事を呼ぶ。

何か話したい事があるなら手を離せばいいのに。

「お、降ろして」

「……………」

あー、つまり会長は掴まるだけ掴まって手を離すのが怖くなっちゃったのか。

まったく……妙な所で世話を焼かせる会長だこと。

とにかく会長を優しく抱き抱えてそっと地面に降ろしてあげる。

「ありがとう、サトーくん……。陵先生がいららないから置いてあったんだけど、使えないね。槻実じゃ誰かに手伝ってもらわないと掴めないし離せないよ」

掴むことも無理なのか。

相変わらず可愛い会長だ。

「それで、美代さんは何を読んでるんだってそれは!？」

美代さんが持つ本の表紙には『悪魔召喚・入門編』と書かれている。いつぞや俺も会長に薦められた本だが、まさか美代さんにも薦める

とは。

「読んでるといふよりも、見てるだけですけど……。私、まだ漢字があまり読めなくて……」

それでいいのか会長。

「いいのいいの！この分野は結構気合と根性でなんとかなるんだから！」

オカルトは体育会系な分野だったのか……。

「ま、今日はサトーくんも帰って来たし、お開きかな。新しい生活にドキドキワクワクしてるサトーくんには悪いけど、今日は槻実、ちよつと予定があるの」

ワクワクというよりハラハラしているわけですけどね。

とにかく、する事が無いのなら今日の所は帰るとしますか。

「あ、美代さん、その本持って帰ってもいいよ！暇があったら実践すると尚ヨシ！」

「はいっ。出来る限り頑張ります！」

頑張らなくてよろしい。

きつとそのせいで俺に被害が及ぶだろうから。

まったく……これから今までに増して騒がしくなりそうだ。

第十話：変化

名前は研究会だが、晴れて正式にこの学校の同好会と認められたオカルト研の第一回活動になると思われた今日は、研究会の頂点に君臨する会長が用事ありという事でお流れとなった。

なので閉じまりをするという会長を残して俺と美代さんの二人で校門を出た先の坂道を並んで降りていた。

空を仰げばいつの間にか雲がかかり始めていて、天気予報で降水確率二十パーセントと言われそんな空模様となっていた。

そして空模様と同じくして、俺と美代さんの間にも少なからず暗雲が立ち込めていた。

いつもは話している時間が黙っている時間を上回っているんじゃないかと思うくらい的美代さんが今日に限って一言も話さない。

そして俺も、美代さんに話しかけられる心境ではなかった。きつとメグとの一件が俺に何か変化を与えたのだろう。

思えば初めてだったのかもしれない。

女の子は女の子だという事を、性別の違いというものを目の当たりにした事は。

近くにいた異性というのが姉貴のようなあまりに特殊な人だったり、綾のような家族同然の人だったりしたせいかな、もしくは俺が今までそういう事を気にする余裕が無かったのか。

どっちにしろ俺が異性というものに余りにも不慣れすぎたせいで、メグに何と答えたらいいか、これからメグとどう顔を合わせたらいいいのかが全く分からない。

そしてその煽りで、隣にいる……今まで普通に接してきたはずの彼女にどう言葉をかけたらいいいのかがわからなくなっていた。

つまるところどうしようもない位に彼女を意識してしまっていた。

改めて思えば、彼女は俺の知っている誰よりも女の子ではないのか。癖がなく腰までまっすぐに伸びる黒髪。

それと対をなすような乳白色の艶やかな肌。

そして、彼女が動いたたびに存在を主張する母性の象徴……。
いかん、いかん……。

思考が雄や筒井みたいになってしまっている。

「悟さん、大丈夫ですか？」

「ふえっ!？」

突然心配そうな声が隣からかけられ、妙な叫びをあげてしまう。

「あの、上向いたり、下向いたり、首回したり……してましたけど」
そんなに挙動不審でしたか俺!

しかも首から上だけ。

「いや、全然大丈夫、大丈夫……」

流石に美代さんを見て戸惑っていましたがとは言えずに曖昧な返事で濁す。

「やっぱり……部活を辞めるのは辛かったですか？」

「ん……?」

そうか、さっきからずっと美代さんが何も言わずに黙って歩いてたのは俺の事を気にしてくれていたのか。

保健室であんな話を聞かしてしまったんだ。

そんな風に思わせてしまうのも無理のない事だった。

「辛い……って言えば嘘になるかも、というよりなるな。この学校でサッカーするのは俺にとって一つの夢みたいなものだったし」
今日俺は、一つの夢を諦めた。

そんな風に言うのと大げさに聞こえるかもしれないけど俺にとってはまさにその通りだった。

「でもこの夢が一番大きな夢の通過点にある夢に過ぎないんだ。もちろん、通過点なんだから通ったほうがいいに決まってるんだけど……」

高校三年間で味わうはずだった勝利の余韻、敗北の苦汁。

きつとそれは大きな財産になった。

俺がこの先歩いて行く上で大切な。

「でも一番大きな夢は諦めたくない。回り道をする事になったけど、諦めなければいつかきつと辿りつけると思うからさ」
出来ない事にしがみついてもしょうがないんだ。

そんな事をする暇があるのなら今何ができるのかという事を探した
ほうが何倍もマシだ。

「私、保健室で悟さんの話を聞いた時思いました。生きる事って、
楽しい事ばかりじゃないんだって……」

不意に美代さんの口から暗い言葉が出る。

「私、生きる事ってどういう事か最初はわかりませんでした。でも、
悟さんがいてお姉さんがいて、綾さんや雄さんがいて……。学校に
は人が一杯いて、とても楽しい事ばかりでした。だから生きる事っ
て楽しい事だと思ってたんです。でも、そればかりじゃないんで
すね」

物事にはすべて表と裏がある。

日のあたる表だけを見続ける事なんてできない。

裏があつてこそその表であり、表があるならばすぐそこに裏もある。

「そうだな。でも、辛い事や悲しい事を知ってるからこそ楽しい事
を楽しいと感じられるんだと思う。美代さんが今を楽しいと思える
のはきつと……」

そこまで言つたところではつとなり、言葉を切る。

美代さんは生きる上で一番辛く、悲しい事を、生きるという事その
ものの裏を記憶に残っていなくても……知っているんだろう。

だからきつと誰よりも今を楽しいと思えるのではないだろうか。

「悟さん。これから、楽しくなりますよね？」

本格的に始まるオカルト研で何をするのかは全く予想がつかないけ
ど、きつと悪い事にはならないだろう。

新しい生活がどう転ぶかわからない。

でもきつと……。

「楽しくなるさ。いや、楽しくするんだ」

誰よりも眩しい彼女の笑顔が、どうか絶えませんように。

一番星が顔を出すには、まだ時間がかかりそうだった。そして置手紙にあった『悟さんが帰宅する頃には戻ると思いますが』の本当の意味を知って長い溜息をついたのは、それから暫く経った後だった。

振動音が部屋の中に響く。

夕飯の用意を終え、自室で姉貴の帰りを待っていた俺のポケットの中から聞こえてくる。

寝そべりながら携帯を取り出し、親指ではじいて画面を確認する。

『新着メール：一通』

ボタンを押しメール内容呼び出す。

「雄から？」

差出人の欄には隣の住人の名前が記されていた。

何だろう。雄がメールを寄越してくるなんて珍しい。

内容を確認するべく画面を下にスクロールしていく。

そこには『話があるからベランダに出てきてくれ』とだけ記されていた。

起き上がって後ろを見る。

今は雨戸に遮られ外の様子は見えないが、その先に我が家のベランダがある。

雨戸を開け、日が落ちて暗くなったベランダに俺の部屋の明りが流れる。

その明りに照らされるような形で、反対側のベランダに雄が立っていた。

子供でも楽に渡れるほどに近いお互いの家のベランダは、家と家を行き来する手段の一つでもあった。

利用するのは……主に綾一人だったけど。

「よっ」

軽く手をあげて雄が挨拶をする。

同じように手をあげてそれに応え、雄のほうへと一歩近づく。

「どうしたんだよ急に」

ベランダ越しに言葉を交わすのは中学以来ではないだろうか。

携帯という文明の利器が俺たちの間でも普及するようになってからはこんなローカルな会話手段を用いる事はなくなっていた。

今回に限ってはその文明の利器を利用してまでセッティングされた状況であり、かなり珍しい……というよりも奇特的な状況だ。

「いや、なんつーか……」

頭をかきながら言いづらそう、というより何と云っていいかわからない表情をする。

「悟さ。お前、綾と何かあった？」

考えた挙句、どうやら直球投げるしか思いつかなかったのかはつきりとした口調でそう言った。

「綾に何かあったのか？」

しかしその質問の答えを持ち合わせていなかった俺は、そっくりそのまま返すことしかできなかった。

「放課後まではいつも通りだったと思うんだが、帰って来てから様子が変なんだよ。飯も作ってくれないし、さっさと寝ちまうし」

「部活で疲れてたんじゃないのか？」

陸上部に限らず部活の練習はハードだ。

綾のような優秀な選手は特に。

「うーん、疲れたにしる体調崩したにしるいつもなら連絡寄越すんだけどな……」

連絡くれれば夕飯の用意くらいなんとか出来たのにと漏らす。

「悪いけど、ちょっとわかんないな。綾を最後に見たのは雄と同じで放課後だしなあ。部活中に何かあったとか。記録が伸び悩んでるかとか」

「記録か……。もし記録で悩んでるならやっぱり……」
そこまで言いかけて言葉を切る。

その先に続く言葉を予想する事は出来るが、確実な答えを俺には出せなかった。

「なあ」

どうやら雄の話はそれで終わりのようで、口を閉ざしてしまった雄にせっかくだから質問してみる事にした。

「雄はさ、誰かに告白された事ってあるか？」

俺の心に衝撃を与えた今日のメグの言葉。

その衝撃が良いものなのか、悪いものなのかを判断するには俺は知らない事が多すぎる。

「告白か。年に二、三回はされてるな」

……ある程度は知っていたが、さらりとその事実を口にする我が友の器のでかさに改めて驚愕する。

「その割に誰かと付き合った事とか無いんだよな。雄は」

そして更にそれだけ告白されておいて、未だに一度たりとも交際というものを始めた事がない。

「まあな。何となく告白されて付き合ってたのは性に合わないんだよ。どっちかという俺は自分の方から好きになりたいタイプというか何というか」

そんな事を言っておきながら雄自身が誰かを好きになったなんて話、今まで聞いたことはない。

相手もいないのに一途なヤツだ。

「それに、俺は兄貴だから」

照れくさそうに頬をかきながら雄は言う。

何だかんだ言っただけ妹思いの……表彰してやりたいくらい兄貴の鑑なヤツだ。

「ハナさんもよくお前に言ってるだろ？弟を助けるのは姉の義務であり、権利だって。妹と兄だって、同じだ」

幼い頃、俺に何かあればいつも駆けつけてくれた姉貴の姿を思い出

す。

さすがに俺は高校生に、姉貴は社会人になった今ではそんな事も無くなっただけ、大事な時にはちゃんと傍にいてくれた姉貴。

その裏で一番俺に怖い思いをさせたのも姉貴なのが少し複雑ではあるが……。

「まあ、そんな感じで俺だけ彼女作って楽しくやってますみたいな事をする気にはなれないんだよ。せめて綾が自立するまでは」

「雄、それじゃ兄貴じゃなくて父親みたいだ」

「まったくだ」

二人して笑いあう。

俺には姉貴が、綾には雄が。これだけ自分を想ってくれている身内がいるというのはなんて幸せな事か。

「それでだ。メグちゃんからの告白の返事はどうするつもりなんだ？」

「っ！？な、何でそれを！」

「何年お前と付き合ってると思ってんだよ。少しズレてたけど話の流れからして明らかだろうが。俺に相談するほど告白されて悩む相手にメグちゃんぐらいだよ」

さ、さすが我が親友……。

告白された事くらいは見抜かれると思ってたけど、相手まで見抜かれるとは思っていなかった。

「んで、どうすんだ。喜んでってなら相談するほど悩む事でも無いだろうから、断るつもりか？」

「それが全然わかんないんだよ。どうしたらいいのとか、そもそも俺はメグをどう思ってるのか」

答えがわからないのではなくて、答えを出す事が出来ない。

右辺にも左辺にも虫食いがある数式のような……そんな感じだ。適当な数字を入れれば数式は完成するだろう。

でも人生は数式とは違う。

自分が選んできた選択、左辺。それにより導き出された、右辺。

一度選んだ左辺は変えられない。一度導きだされた右辺は覆せない。だというのに、どれが正しいなんて誰にもわからない。

「悩むのも無理はない。俺の場合と違って悟はメグちゃんの事、そう悪く思っていないんだろ？」

俺にとつてメグは何なのか、メグにとつて俺は何なのか。

深く考えたことなんて無かった。

ただ漠然と大切な友人だと、そう思っていた。

だけどそれが正しいのか、それすらももうわからない。

「悟自身も微妙な時期だからな。無理に答えを出す必要は無いが：

…いずれ答えを出さなきゃいけないって事だけは頭にいれとけよ」

「そうだな。うん、雄に相談して良かった。もう少し自分で考えてみる事にする」

「おう。がんばれ男の子！」

お互いに笑って別れを告げて後ろの自室へと戻る。

解決こそしなかったが、胸の中のもやもやが少し落ち着いた感じがする。

メグの事は、彼女には悪い事かもしれないけどゆっくりと、お互いに納得のいく答えを出せるようにしよう。

「納得か……」

自分で言っておいて、その納得のいく答えというものに納得できそうにない。そんな気がしてしまった。

矛盾した感情が俺の中に湧き上がっていく。

せつかく落ち着いたと思つた胸のもやもやは、また違う所から俺の胸を侵略し始めていた。

それと呼応するように外から雨が滴る音が僅かばかり聞こえてきた。

「姉貴、傘持つてってなんかいないだろうな……」

胸のもやもやを少しでも払拭するため、タオルの用意をしに部屋から出て行く。

その際に雄の気配がまだベランダにある事を感じた。

気になったものの俺はそのまま下の階へと降りて行った。

第十一話：増員

気がついたらすでに放課後だった。

何度確認しても時間は昼過ぎで、何度周りを見回しても帰り支度をする人であふれていた。

おかしい……、朝起きて朝飯食べて家を出て学校に着いたあたりまでは記憶にあるのだがそれから時間が立つことに記憶が曖昧になり、ある一瞬を境にしてまったくの記憶が残っていない。

その間に一体何が起こっていたのだろうか……一体俺はナニヲシテイタノダロウカ！。

「現実逃避はやめろ……悟」

後ろから肩に手をかけられる。

首筋を弱く、そして優しく風がなでる。

「補習、がんばれよ」

そして肩に置いた手でガッツポーズを作る。

瞬間、あらゆる現実が脳裏に蘇って来た。

ほとんど勉強に手がつけられなかった初日のテスト、採点して返される前から結果がわかりきっていたとはいえ改めて現実として受け止めると思いのほかダメージが大きいようだ。

慣れるもんじゃないな……。慣れるのもどうかとおもっし。

「そつえば綾のヤツ、いつも通りだったな」

昨夜雄から聞かされた事。

部活を早退し、夕飯も作らずにそのまま寝てしまっなんて事は普通の高校生ならばともかく綾にしてみれば珍しい。

それとなく心配して声かけてみたのだが、至って普通。変な所なんて見当たらなかった。

「んー、一晩寝てすつきりしたんじゃないのか？見た目通り単純なヤツだから」

切り替えが早いのは綾の良いところだ。

とりあえず心配事が一つ減っただけでもヨシとしよう。

「はあ……」

大きな溜息が洩れてしまう。

昨夜もずっと考えていた……メグへの返答。

結局俺は何て言うべきか、何て言いたいのかわからないまま今日を迎えてしまっている。

部活を辞めてメグとの大きな接点が無くなってしまった以上、学年が違つと会う機会というのがほとんどない。

「先輩、溜息なんてついちゃって……」

「ああ、溜息の一つや二つくらいつきたくなるってもんだよ。こんな時に日本人らしく日本語を巧みに操れなくてどうすると」

ふと、何か違和感を感じた。

俺はさっきまで雄と会話をしていたのだから、今の声は雄のはず。でも明らかに女の子の声で……明らかに先輩って……。

「……どうして二年の教室にメグがいるんだ」

「入っちゃいけないなんて校則は無いですよ。それに入れてくれたのは雄さんです」

その雄は……もういねえ。

それにしても割と冷静だなあ、俺。

冷汗は相当量でてるけど。

「それで先輩、話があるので一緒に来てください」

「お、俺はこれから研究会に顔を出さなきゃならないんだ」

ここで逃げを選択するか、俺は。

「その行きがけで済む内容なので行きましょう」
しかし回り込まれた。

仕方がない、観念しよう。

正直、とりあえず自分が納得できる答えを見つけてないまま答えるのは気が進まなかったのだが……。

「まず初めに、昨日私が言った事はとりあえず忘れ……るのもなんなので頭の片隅の方にしまっただけです」

教室を出て最初にメグはそう言った。

昨日の事ってのはつまりあれの事だよな……。
しまっておく、というのはつまり？

「答えてくれるのはまた今度でいいです。いいえ、今度にしてください。私、少し納得できない事ができました」

慥然とした口調でそう言うメグの横顔を盗み見るとわずかに怒りの色が見えた。

そんなメグを見るのは本当に稀……というよりも見た事がない。

同じような表情を見せていた時はあったが俺がまだ小学校の、メグに会った頃の事だ。

「あ、先輩に対してじゃないので安心して下さい」
その言葉に甘えて安心する。

今でこそ明るく元気な彼女ではあったけど、出会った頃は無口で無愛想とほとんど逆な性格の子だった。

違う中学だったので確かな事は言えないが、いい中学生生活を送れたのだろう。

「でも……それを俺に言うって事は少なくとも俺が関係してる事なのか？」

安心したところでふと違和感を感じたので尋ねてみる。

納得できないのが俺に対してでないのなら、それを俺に言う必要は無いのでは。

あるとしたら間接的にでもその『納得できない事』に俺が関わってるって事だ。

「そう言う事になりますね。もしかしたら先輩が悪の根源かもしれないう事です」

一気に不安が沸き上がってくる。

やっぱり俺はメグに何かしてしまったのだろうか……。

思い当たる節は無い事も無いのだが、今ここで大々的に話題にする事となると首をかしげてしまう。

「先輩にはきつとわからないと思います。わかったらちよつと嫌です」

「何だよそれ。結局のところ俺が悪いのか悪くないのかどつちなんだ……」

どうにも原因があつちこつちにいつててよくわからない。

「そうですね……」

メグは一瞬考えた後、優しく微笑みながら言った。

「きつと、悪い人なんてどこにもいないですよ」

そのまま俺たちは並んだまま無言で階段を降り、廊下を進んでいく。何か新しい話題を出す雰囲気でも無かつたし、出せる話題も無かつた。

ただ居づらいというわけではなかつた。無言だというのに、柔らかくて和んでしまいそんな空気。

いつまで居ても苦にならず、それを破ってしまうのが惜まれる。

しかし旧校舎の突き当り、つまりオカルト研究会の部室前でそれは終わりになつた。

「あ……つと。悪いな、話は終わつてたつていうのにこんな所まで付き合わせて」

「え？何か謝るような事ありました？」

不思議そうに首をかしげるメグだったが、その仕草に俺も首をかしげてしまう。

「いやだつて、下駄箱はもうとつくに過ぎただろ。サッカー部は今日も練習あるだろ。マネージャーだからといってさぼつたらいけないんじゃないのか？」

辞めた人間が言つても説得力に欠けるものがあるが。

「先輩、私の服装見てくださいよ」

そこで気づいた。メグが今着ているのはジャージではなく制服である。

マネージャーが制服で部活に出るのは一応禁止はされていないが、良い事ではない。

「じゃあ今日はもう帰るのか。なら尚更悪かったな。何か用事があるんだろ？」

「確かに用事はありませんけど、学校に用事なので下駄箱は通り過ぎても全然かまいません」

つまり旧校舎に用事があるという事か。

「そつか。でもこっちは階段無いし、どっちにしる引き返す事になるんだろ？じゃあその分だけでもすまないなという事で」

「だから、何で謝るんですか？先輩、私に何かしましたか？」

「いやだから余計な労力使わせちゃったなと」

「いえ？特に余計な労力は使っていませんけど」

口早に交わされる問答に悪い予感を感じざるを得なかった。

隣を見れば部室の扉、前を見ればニコニコ笑うメグ。

ああ、ちよつと頭痛が。

「二人とも！いつまで部屋の前で騒いでるの！そんな所にいないで中に入って！」

扉が開いて中から会長が現れる。

「お待たせツキちゃん！これからお世話になるね」

二人でハイタッチを交わす。

同学年で同じ女の子だというのに結構な身長差があるので、メグにとってはいわばロウタッチのようだったが。

「だあ……」

本日二回目の溜息は脱力感をふんだんに含んだものだった。

思えば最近溜息の回数が増えてきているような気がしてならない。

「基本的に同好会も、研究会も開始時刻は従来の部活と同じ……つまり遅刻です、江藤君」

そして部室に一步踏み入れた時に、更なる違和感が俺の心を支配した。

トーンの低い女性の声、美代さんのか？

美代さんは既に部室にいたが、無言で例の本の続きを読んでいる。そもそも声質が美代さんのものじゃなかった。

というよりこんな特徴的な声質、俺で無くとも聞き分けられる。

「なんで古屋がここに……」

「それは私も今日から研究会の一員だからです」

ああー、なるほど。

「つて、ええええー！？」

お、落ち着け俺！

どういう事だ？メグだけでなく古屋が？よりによって古屋がオカルト研に？

何で？何故、どうして？この前まではオカルト研の存在をあれほど認めていなかった古屋が……。

「規定を満たしてしまっっては付け入る所がありません。なので何か起こせばすぐ然るべき対処ができるようにと内部の人間になったままでです」

「まさに獅子身中の虫だねっ」

会長、それは嬉しそうに言うセリフではありませんよ。

「悟さん、人数は多い方が楽しいですよ」

本から目を離して俺に微笑みかける美代さん。癒されるけど、なんだか涙がでてきちゃっよ。

「……あれ？」

そして今日何回目かの違和感を感じる。

「なあ古屋、ちょっといいか？」

立ち上がって扉に近づきながら古屋を呼ぶ。

無言で俺の言葉に応え、俺より先に部室を出て行く古屋。

「っと会長、少し出てきます」

一言断りを入れて古屋を追いかける。

古屋は廊下の中程で立ち止まり、こちらを見ていた。

「何か」

いつもと変わらない声で尋ねてくる。

「古屋はオカルト研が同好会の規定を満たしていないにも関わらず、部室を持つてるから会長に立ち退きを命じてたと思っただけで、こうしてめでたく規定を満たした後も関わってくるって事はそういうわけでもなかったのか？」

確かに古屋自身納得のいかない満たし方ではあったものの、基本的に校則に違反していなければ古屋はノータッチのはず。

「ええ。他の同好会ならば規定を満たした時点で私は関与しません。しかし、オカルト研究会だけは別です」

古屋の瞳にはわずかに怒りの色が見える。

しかし、先ほどのメグにあったような色とは違う。

もつと濃くて深い……そんな感じの色だった。

「もしかして古屋は……俺の姉貴と知り合いだったりするのかわか？」
ふと思いついた事を訪ねる。

古屋がオカルト研に対して普通じゃない感情を抱いているのは何となくわかった。

しかし今のオカルト研は今年の四月に会長が一人で始めたもので、特に何かしたというわけではない。

つまりはオカルト研にそんな感情を抱く原因になったのは前のオカルト研……つまり姉貴の代の事になる。

そうなると古屋と姉貴は……。

「被奈さんですか。被奈さんとなら何度かお会いした事があります。やっぱりか……。意外と世間は狭いな。」

「姉貴が原因じゃ良からぬ印象を持つのは仕方のない事だけどさ。今のオカルト研は昔とは違うんだから、そんなに気にしなくてもいいんじゃないか？」

大方姉貴に怖い思いでもさせられたのだろうと、古屋に対して僅かな同情を抱く。

「いえ、被奈さんには感謝こそすれ恨むような事は何一つとしてありません」

しかしその同情は見事に的外れだったようだ。

「じゃあ、何でそんなにオカルト研に執着するんだ？」

聞いてはいけない事だったかなと、一瞬思いはしたが聞かずにはいられなかった。

「理由は単純です。ただ単にこの学校にオカルト研究会等という物は不要だからです」

いつも以上にはつきりとした口調で、オカルト研究会の存在そのものを否定する。

俺の中に僅かな憤りが渦巻いていた。

「俺は……オカルト研を楽しいものにしたいたいと思ってる」

美代さんが、心の底からそう思えるような……そんな場所にしたいと思ってる。

「あの会長の事だから、きつと変な事件が起きたり、起こされたりすると思うけど……。俺はそれでも楽しいと思う。古屋がオカルト研に対してどう思ってるのかは知らないけど、今のオカルト研が不要だなんて俺には思えない」

息を吸い込み、呼吸を整えてから俺は続けた。

「だから古屋も、楽しもう」

古屋は何かを考えるかのように頭を垂れて下を向いている。

そして消え入るような声で、再び言う。

「オカルト研究会はこの学校にあるべきではない」

その声に俺はかける言葉を忘れてしまう。

「でも少しくらいなら」

その顔が再び上がった時にはいつもの生徒会副会長の顔だった。

それにつられて俺の顔にも自然と笑みがこぼれた。

メグだけでなく古屋も加入ということと不安に苛む事になるかと思っただが、この分じゃその心配はないようだ。

きつとオカルト研は楽しい所になる。

その楽しさで古屋の考えも変わってくるといいのだけれども。

「ああそうだ」

忘れていたことをふと思い出す。

「なあ古屋。先週言ってた俺の痴情って一体何なんだ？」

部室立ち退きの最後の切り札でもあったそれは、俺にとっちや切られたら困るものだったので今のうちに聞き出しておく必要がある。

「え……、あ……」

古屋の顔が少しだけ朱に染まる。

俺の痴情とやらはそんなにやばいのか。

「私は割とどんな事があっても貴方の味方なので安心してください」
そして変な返し方をされごまかされる。

最初のほうにつけられた割とという言葉が、俺の不安をさらに膨れ
上がらしていった。

第十二話：活動開始？

部屋に戻ったとき、先ほどまで無かったはずのオカルト研に新たな備品が加えられていた。白い板に黒いペン、つまりところ普通教室には必ず備え付けられている黒板とは逆のホワイトボードであった。

「この教室は一応物置、ということになっているので黒板は設置されていません」

と、古屋が補足する。確かに普通の教室とは二回りほど小さく、たった五人しか中にいないというのに少し狭苦しさを感じてしまうほどだ。

その五人でも狭苦しく感じてしまう教室の一番奥にはホワイトボードがあり、それに何やら文字を書き込んでいる会長がいて、その横に控えるように立っている美代さん。そして長机を挟んで入口側で椅子に座っているメグ、古屋そして俺。何をやるわけでもなく、ただ会長がホワイトボードに書き込んでいる何かが完成するまでじっと待っていた。

「さて」

会長が持つペンの動きが止まる。どうやら書き終えたようである。皆が注目する中、会長が高らかに宣言した。

「オカルト研究会第一回ミーティングを始めます！」

それに合わせて隣に控えていた美代さんがクラッカーを鳴らす。相変わらず用意がよいのはいいのだが、たった一発のクラッカーでは言葉に出来ない寂寥感が溢れてくる気がする。

「はい、拍手！」

その寂寥感を払拭するべく会長が俺たちに向かって拍手を要求する。呆気にとられていたメグは慌てるように拍手を、慣れっこだった俺はメグの後を追うように拍手を、古屋は組んでいた腕を崩すことなく溜息を吐いていた。

「さて、今日はオカルト研究部にて活動するにおいて知っておかねばならない事を学習します。ああと、そんな難しい事じゃないから気楽に聞いてね！」

会長は持っていたペンを置いて代わりに指差し棒を取り出し、一直線に俺に向けてくる。

「さて問題です。私達の母校であるこの巫山高等学校は今年で創立何周年を迎えたでしょうか！」

急に振られて慌てて自分の記憶の中にダイブする。有象無象のデータが散らばった記憶を創立何周年という言葉で検索にかける。しかしいつまでたっても該当するデータは見つからず考えあぐねた結果、そういった事に詳しくそうな隣の人物に視線で助けを求め。だがその視線の先にあつたのはまるで「その程度の事、この学校の生徒ならば知っていて当然。知らないのなら一からこの学校の変遷をたたき込むしかありません」みたいな顔だった。ならばと逆に視線を向けてみればそっぽを向いている。わからないのか……。

「確か、五十いくつだと思っただけ……ど？」

自信無く答えると目の前と隣にいる人物に溜息を吐かれてしまう。仕方ないだろ！普通創立何周年覚えてるヤツなんてごまんというだろ！それに聞かれなかつただけでメグも知らないはずだ。

「全くサトー君は勉強が足りてないんだから……。うん、そうだね。槻実が説明してもいいけど、せっかくだから新入会員である灯さんに説明してもらおうかな。会員との理解を深めるのは大事な事だと槻実は思うの。灯さんもそう思うよね？」

古屋はとりあえず今はオカルト研を無くそうと動いている訳ではないので、古屋への呼び方が普通になっている。しかしながら灯先輩でなく灯さんであるあたり、完全に気を許した訳ではないらしい。古屋もそれをわかっているのか僅かばかり表情を厳しくして椅子から腰を上げてしゃべり始めた。

「まあいいでしょう。勉強不足な人がいるのは確かな事なのでこの際じっくりとこの学校の歴史と言う者を叩きこんでおくのも悪くは

ありませんから」

「ちらりとこちらを見下ろす古屋の視線は『後でテストしますからよく覚えておくように』と語りかけてくるようだった。

「巫山高等学校、つまりこの学校自体は今年で創立六十一年を迎えます。残念ながら五の字はどこにもありません。六十一年、つまり終戦から暫くしてという事になりますが、これは厳密に言えば正しくはありません。巫山、と名が付いたのは確かに六十一年前の事になります。この場所に学び舎という物が出来たのは江戸の時代にまで遡ります。当時この辺りは霊験あらたかな土地として有名でしたので、そこに学び舎を置く事でそれらにあやかろうとしたのでしよう。それから長い時間有名な学び舎として名を広めていきました。が、戦時中の空襲によって建物が完全に焼失。その際学校の名を校舎を置く山の名に改め現在に至る、という事です。わかりましたか？江藤君。それに初瀬さん」

「う……」

古屋に知らなかったことを見破られ唸り声をあげるメグ。というよりそんな話、忘れていたというより初めて聞いた。古屋お得意の生徒手帳にもそんな事は書いていなかったと思うぞ。

「確かに。巫山と名を変える以前とは一応別の建物として区別されているので生徒手帳はおるか図書室の蔵書にも記述があるかどうかも怪しいです。しかし別と区別されているとしてもお互いに全く関係が無いという訳にはいきません。特にこのオカルト研究会では「どういふ事だと尋ねようとしてふと頭に何かが引っかかる。

厳密に言うなら違つうのだが、この学校は一度空襲で完全に焼失しているらしい。つまり、つまりつまりだ。空襲された時間が時間なら……？

「そう……。サトー君の想像は多分当たりだよ。この学校の下にはその際犠牲になってしまった人達が埋まっているの……。言うならばこの学校はお墓の上に……。いや、一説によればこの学校は墓石という意味も込められて建てられ」

「ツキちゃんストップ！ストローップ！止めて止めてそれ以上言わないでーっ」

会長の話が終わる前にメグが大きな声をあげてそれを妨害する。女の子にはちよつとキツイ内容の話だったのだろう。ただこの部屋の中にいる四人の女の子の中ではメグ以外は平気そうな顔をしていた。会長はもとより平気だとして、古屋も柳に吹く風のようにさらりと流している。美代さんも浮かべていた笑顔をぴくりとも崩していない。流石本物、というより会長の話の内容を理解していない可能性がある。

「メグったら……。そんなじゃオカルト研としてやっていけないよ！大丈夫なの？」

メグは胸の前で手を結び、目には薄らと涙を浮かべている。誰が見てもオカルト研には似つかわしくない女の子らしい仕草であり、同時にこんな場所においていい子ではない。

正直俺もかなり動揺していた。オカルト研なんて前に会長に読んでおいてと薦められ、今は美代さんの愛読書と化している本に書かれているような事を遊び半分に実行し、もちろん何も起こらず笑いあうみたいな事をするものだと思っていた。

しかしこの学校にそんな曰くがあるとしたら話は別だ。というよりもあの姉貴がこの学校でオカルト研究会なんていうものを発足させてしまった所から気付くべきだったが、会長が姉貴から今の会長に移ったからと言って安心できるなんて言う根拠にはならない。

「だ、大丈夫。大丈夫だもん……。私、がんばるよ」

しかしメグはそこでぐつと堪えて踏みとどまる。このオカルト研に彼女をこうまでさせる理由が一体どこにあるのだろうか。思い当たるフシ、みたいな事はいくつもあるが、どこか昨日のメグと今日のメグは違う人物のような違和感を感じてしまう。そんな事あるはずないのに。

「メグ、その息だよ！じゃあ覚悟も決まったみたいだからサトー君に質問だよ。槻実の話を聞いてオカルト研がこれからどんな活動を

していくのか予想がついたと思うけど、どんな事をすると思うかな」
「またもや指差し棒で俺を真っ直ぐに指し示す。突き出された白い人差し指が微かに揺れている。」

「あんまり考えたくはないけど……洒落にならないくらいにマジな七不思議を説明したり、夜の学校に忍び込んで迫りくる怪奇現象と戦ったり……とか？」

自分でも現実離れた事だとは思って、現実離れた姉に現実離れた事をされ続けた俺にとっては割と現実的な答えだ。

「うんうん、そうなんだよね。槻実もそういう活動できたらいいな
って思ってるんだけど、実はそうもいかないというより出来ないんだよね」

本当に残念そうに肩を落とす会長。それと同時に安心感から胸をなでおろす俺とメグ。しかし、出来ないとは思わなかった。会長がどれだけ怪しいパワーを持っているかは知らないけど、少なくとも一般人とは言えない事をする事は出来ると思っていたのだが。

「正確に言うとならないというよりする事が無いって言った方がいいかな。シャレにならない七不思議に怪奇現象、この学校は元々そういう類の事に事欠かないだけだね。そういうのは根こそぎ先代オカルト研によって解決されちゃったんだよね。だから槻実達のオカルト研はする事が本当に無いの。本当サトー君のお姉さんすげえだつて。少しくらい次に回してくれてもいいと思うのになあ」

姉貴、よくやった！と心の中でガッツポーズを決める。思えば姉貴が高校の時に一番弟弄りが大人しかった時期だ。恐らくオカルト研で忙しかったのだろう。その時が俺にとって一番心穏やかな時期であり、そしてその時の姉貴の頑張りによって今の俺に降りかかる危険が減った。今までずっと姉貴は俺に厄介事ばかり引き寄せてくると思っていたけど、いざ本当の厄介事が降りかかろうとした時は姉貴が払ってくれる。ああ、俺ってば愛されてるんだなと一人で勝手に感動に浸っていた。

「ん？じゃあ会長は何でオカルト研なんて作ったんだ？する事が無

いなら別に作る必要無いと思うんだけど」

「それは違うよ、サトー君。こういうのはね、作ってから何をやるなんて事は大事じゃないんだよ。作る事に意味があるんだよ！」

声高らかにそう言いきる会長。そこまで自信たっぷり言いきられると何も言う気になれない。

「でも作った理由を強いて言うならば、尊敬する人と同じ立場になりたかったって所かな。憧れの職業みたいなものだよ。まあ職業とかだったらオカルト研みたいに作るのもなるのも簡単な事じゃないだろうし、その後何をするのかって事も重要になってくるんだけどね」

はにかみながら笑顔を浮かべる会長に、本当に姉貴の事尊敬してるんだなと今更ながら実感する。いつもは何しているのか全然わからない姉貴だけど、影ではこんなにも誰かに想われるような事をしているとは弟としてちよつと誇らしく感じた。

会長の話はそこで終わった。その後は会長の言っていた通り特にする事もなく、各自思いのままに過ごしていた。美代さんは会長と一緒に例の本を熟読中。とはいえ今は内容を理解するための読書ではなく、漢字の読み書きを覚えるための読書のような感じだった。漢字が出てくるたびに会長に読み方を教えてもらって少しずつ少しずつ読み進めていた。どうにも美代さんは中々優秀な生徒のようでは教えられた事は一度で覚え、すぐに自分のものへとしてしまう。この分だと夏休みが終わる頃には俺より博識になってしまいかもかもしれない。

それと意外にも古屋は所狭しと部屋を占拠する本棚から何冊か本を取り出し、椅子に座って読みふけていた。てつきりオカルトの類は嫌いだとばかり思っていたが本人に確認したところオカルト

研の存在が認められないだけでオカルト自体に特別な感情は持ち合
わせていないようだった。

そしてメグは既にこの教室にはいない。一応サッカー部のマネ
ージャーでもある彼女は会長の話に一区切りついた後、教室を出て
行って恐らく体操着に着替えグラウンドへと向かったのだろう。マ
ネージャーとオカルト研とはいえ兼任はそれほど楽な事ではない。
本当に大丈夫なのだろうか。何のためにメグはオカルト研へと入っ
たのかという事が未だに俺にはわからなくて、わからないからと本
人に直接尋ねるのはしてはいけない事のような気がした。

そして俺は本を読む以外出来る事がないこの空間において本を
読んでいなかった。つまりは何かする訳でもなく椅子に座って部屋
の中を見渡していた。会長に美代さんに古屋。そして既にここには
いないがメグ。穏やかとは言い切れないものの居心地のよい空気に
段々と眠気を催し始めてきていつしか体を机に預けて眠りの中へと
落ちていった。

眠りにつく直前、誰かの俺を呼ぶ声が聞こえた気がするが、そ
んなものでは今の眠気を払う事などできなかつた。

「うん。じゃあそろそろ帰ろっか」

次に俺が気づいた時は、会長が終了の合図を出した時だった。

第十三話：突然の祭

俺自身には特にそんな気はないが、恐らく記念すべき第一回オカルト研活動を終えた俺は美代さんと一緒に十数分程度の帰路を歩いていた。会長に古屋、そしてメグは電車通学なので坂を下りた後の分かれ道にて別れた。会長と古屋が電車の中で乱闘……とまではいかずとも何かしら物騒な事を起こさないか少し心配ではある。

隣を歩く美代さんは相変わらず会長から渡された入門書を熱心に読んでいた。比較的車や人通りが少ないとはいえ、まったく前を見ずに歩く美代さんは限りなくあぶなっかしい。ほっといたら川にでも落ちかねない。

「というより、まだ漢字とか読めないのが多いんだろ？そんな状態で本なんて読んでても面白いのか……？」

部室で美代さんが言っていた事が事実なら美代さんが読んでいる本はさながら中途半端に解読された古文書である。読み解くという事を楽しんでいるのだろうか。

「すごく面白いです。それに難しそうな漢字は読めませんが前後の文脈からおおよその内容は推測できるのでそれほど大きな問題という訳でもないです」

そうなのか、と普通に流そうとしていた俺がいたが冷静に考えるとそれってかなりすごい事なのではないだろうか。

「……美代さん、漢字読めないって言うけどそれも記憶が無いからだよな。てことはひらがなは？というか言葉自体もわからなかったのかしてたのか？」

にわか知識ではあるけど、記憶喪失にも色々な種類があるという事くらいは俺でも知っている。美代さんの場合は読み書きや常識といった事は覚えているけど自分が何者だとか自分の人間関係の事とかをすっぱりと忘れてしまうタイプのモノだと思っていたが違うのだろうか。前提からして現存するタイプでくくれるのかどうかも怪

しいが。

「そうですね。読み書きに関しては本当に何も知りませんでした。この一週間でなんとかひらがなと簡単な漢字はお姉さんに教えてもらいました。でも聞いたり話したりする分には問題は無かったです。そもそも会話してたじゃないですか、私が悟さんの前に現れた日は」

そういえばそうである。あの世にも恐ろしい食事会で綾の料理を口にしながら喜びの声をあげていたではないか。

「にしても一週間で基本的な読み書き……かあ。言葉自体は元から知っているとはいえ美代さん実はすげえ頭いいんじゃないのか……」
「はい！お姉さんにも夏休みが終わる頃には十分学校の授業に追いつけるだろうって」

つまりは今の授業に置いていかれている俺以上になってしまっているという事か。俺も少しは真面目に勉強したほうがいいのだろうか……。

「待てよ。読み書きは覚えてないのに言葉自体は覚えてるって何か妙じゃないか……。えらく限定的に忘れたというか」

教科書の間にはさんだプリントだけ持っていつて肝心の教科書を忘れるような……ありえなくもないが何らかの意図が絡んでるのではないかと疑いたくなるようなそんな感じだ。

「そうですか？言葉だけしか教えてもらえてなかったとかそういう事ではないんでしょうか」

言葉だけか。昔ならばそれも珍しくなかったのだろうけど、このご時世でそれは珍しいんじゃないだろうか。美代さんが昔の人なのかもしれないが、それだと俺の事を知っているという事と矛盾してしまう。もしかや俺の前世と何か関係があったのではないだろうか！
「思考が姉貴や会長に毒されてきたか……？」

突飛な発想にいらぬ苦悩を強いられてしまう。俺は普通の人、俺は普通の人、俺は普通の人……よし、大丈夫だ。

「でも、別に戻らなくても困りません。私、今すごく楽しいですか

ら

優しくふわりとした微笑みを見せる美代さんを見てると、なんだか安心する。

まるで年を重ねていくと共に忘れてしまふ純粹な微笑みを見ているようだ。

そう長くもない帰路を終え、ただいまと言いながら玄関のドアを開けようとした時何か違和感を感じた。

「悟さん？どうしたんですか？」

怪訝な顔をしながら首をかしげる。

そんな美代さんをよそに俺はドアの奥に意識を集中する。耳を澄まし、気配を感じ取り、視覚に頼らないで中の状態を読み取るようにする。その結果、何やら家の中が騒がしく、玄関の所に誰かが立っているような気配を感じる。また姉貴が何かを企んでいるのかと思っただが、それにしても中にはいる人数が多いような気がする。経験からして綾や雄は姉貴のイタズラには関与しないはずだし。

「どうしたんですか？早く中に入りましょう」

そして我が家の違和感を感じたせいか、美代さんの態度が……思えば今日一日どこかおかしかったように思えてくる。

「そういえば美代さん、今日は無口というか淡泊というか……やけに大人しくなかった？」

ピクツと美代さんの体が一瞬震える。それではば答えてしまったようなものだが。

「そ、そんな事ないよおっ。いつも通りです、よ」

その答えに裏付けるような妙な口調で弁解しはじめ。

「ふうん、そう。あー、俺ちよつと買物してくるから先に入ってくれないか？」

少し面白くなってきたので少し揺さぶりをかけてみる。

「だ、駄目です！先に悟さんが入らないと駄目……あつ」

案の定、簡単にボ口を出す美代さん。

苦笑いをする美代さんを見て、姉貴の差し金であるという事はほぼ確信する。となれば俺がこのままドアを開けて家の中に進むという事は全弾装弾済みのロシアンブルーレットに参加する事と同意である。もちろん最初に銃口を眉間に当てるのは俺だ。

「悟さん！今回は平気です！本当ですつ。私もう隠しませんから……とはいっても何をするかまでは言えませんがとにかく危なかったりはしないですから」

必死に引きとめる彼女を見ると、このまま家に入らないというのも何だかわいそうになってきてしまった。美代さんの言葉に嘘は無さそうだし、今回に限っては姉貴の差し金だというのに危なくないという珍しいパターンなのかもしれない。

「わかった。わかったから。危なくないんだな？」

再三確認する俺の姿を傍から見れば臆病な男に見えるかもしれないが、俺にとっては生きていく上で大切な事なのだ。いわゆる生活の知恵である。死活問題である。

俺のしつこい問いかけに熱のこもった頷きで返す美代さん。これ以上は男として色々と駄目になってしまつので俺は覚悟をきめて玄関のドアノブを回して……開けた。

最初に飛び込んできたのはクラツカーのような炸裂音。そして一瞬後に俺の上に降りかかる紙吹雪によって、それが本当にクラツカーの音である事を知る。

「悟。誕生日おめでとう！」

姉貴のご機嫌そうな声。その後ろには雄に綾が控えており、バタバタとリビングのほうから筒井までもが顔を出してきた。

「よお、江藤！俺が今日一日の思い出を記録しにきてやったぜ」

そう言いながらいつもどおりにカメラを回していた。

「姉貴、俺の誕生日は一週間以上前だぞ？」

思い返せば美代さんが現れた日の前日が俺の誕生日だ。

「そんなのわかってるわよ。ただ当日は私忙しかったし、翌日には美代ちゃんが来たから慌ただしかったじゃないの。だから何となく今日祝おうかなと」

また唐突に……。まあ、祝ってくれることについては素直に嬉しいが、十七にもなつてこんなに盛大に祝ってもらうのも何だか気恥ずかしい。

「ま、悟の誕生日はついででよついで。盛大になるのは……」

姉貴がそこまで言ったところで真後ろにある玄関のドアが勢いよく開かれる。

「先代会長！飲み物買ってまいりましたー！……あれ？サトー君、まだ玄関にいたの？」

二リットルのペットボトルが入った買い物袋を片手に会長が登場する。

「ついでにつまむものも買ってきました」

その後ろにメグと、

「何で私はこんな事に付き合わされているのだろうか……」

頭を抱えている古屋の姿があった。この顔ぶれを見れば何が行われるかは大方の予想がつくが、その予想を口にしようとした所で姉貴の静止がかかる。

「綾ちゃん、雄！横断幕！」

姉貴の号令で後ろに控えていた狩谷双子が何か棒きれのようなものを持つたまま左右に展開した。それにより視界の大部分を占領せんとするかのような布が広がり、そこには『祝、オカルト研究会再興！』の文字が刻まれていた。

ちなみに『ついでに悟の誕生日』と、視力が一以下の人には見づらくらいの文字でそう刻まれていた。

その日は、狩谷家以外のご近所が比較的遠いという事を幸いだ

とこの上なく思った日だった。姉貴、綾、会長、筒井の四人が率先して騒ぎ、美代さんがアルコールなんて一切無いのに場の雰囲気だけで酔い、古屋はあくまで落ち着きはらっていたが、たまに姉貴の杯を満たしていた。テーブルに展開された料理やお菓子はその大部分を雄とメグが片付けていた。事前に姉貴から代金を受け取っていたらしいメグは、それをいい事に自分の好きな物を買ってきていたのだろう。料理以上にお菓子に手が伸びている。そして俺は……。

「悟さん、どうしたんですか？」

リビングの喧噪に当てられた俺は自室のベッドの上で体を休めていた。すぐに戻るつもりだったが、美代さんが呼びにきたという事は自分が感じていた以上に時間が経っていたようだ。俺は体を起こしてドアから入ってきた美代さんに視線を向けた。

「ん、もうちょっとしたら戻るよ」

実際に流れた時間通りの休息を得られなかった俺は、もう暫くここに居る事を告げて再びベッドにその体を預ける。今日も割と色々な事があったせいか、瞼はわずかに重い。恐らく十分程度こうしていれば眠りの中に落ちていってしまうだろう。リビングに行けば眠気など一瞬で去ってしまうのだからあくまで休息のために視界を閉じた。

目を閉じてほんの数秒が経ったとき、軋む音と一緒にベッドが僅かに片方に傾く。

「美代さん？」

目を開ければ美代さんが俺の足元に腰をかけていた。

「悟さん、大丈夫ですか？何だか嬉しいような、悲しいような複雑な顔しています」

思わず吹き出してしまう。

「あ、笑うなんてひどいですよ」

悪い悪いと謝りながら上体を起こして美代さんと同じようにベッドに腰をかける。いつもどこかぼんやりしてる感じの美代さんらしかぬ鋭さだったから思わずおかしくなってしまうた。

「そうだな。今俺は嬉しくて、悲しい……じゃないな。何というか申し訳ないようなそんな気分だ」

ふう、と一息つきながら俺は喋りはじめた。

「俺が中三の頃に事故で両親と、夢を……失った事知ってるだろ。それから姉貴は何かにつけて俺を気遣うようになった。親を失ったのは姉貴だって同じはずなのに……自分だって悲しいはずなのに俺の事ばかり考えてくれた。綾や雄だってそうだ。普段と変わらないように見えて、色んな所で俺を気遣ってくれた」

もちろん、それ以前から姉貴だけじゃなく綾や雄は家族だ。家族同士気遣い合ったり優しく合ったりするのは自然だった。ただ、俺はその中で特別になっちゃった。

「今回だって、ついでなんて銘打ってあるけど、きつと俺に重く感じさせないようにわざとやってる事だと思う。姉貴にとっちゃ半ば強引に部を辞めさせた代償みたいに思ってるんじゃないかな。俺にとってあれは気持ちを切り替えるために必要な事であって、むしろ姉貴に感謝したいくらいなのにな」

自分が夢を失った事を自覚した頃はそれを感じる余裕なんて無かった。だけど、落ち着き始めてからどこかに違和感を感じ始めた。最初俺が夢を失った事で回りが変わったのかと思っただけで失ったのは俺だ。だから変わったのはきつと俺なんだ。

「たまに、そうたまに。例えば今日みたいな日。皆の視線が俺を通り抜けていくみたいに感じるんだ。俺を通り抜けて……皆昔の俺を見ている。昔の俺を知っている人は皆昔の俺しか見ていない……そんな錯覚がするんだ」

いつの間にか、俺の声に涙が混じりはじめていた。今まで誰にも話さなかった事なのに美代さんの前で何故か漏らしてしまったのは、きつと……。

「大丈夫です。私は知りません」

そう、美代さんは昔の俺を知らないからなんだろう。

突然、美代さんの腕がふわりと俺を包み込んだ。

「……っ！美代さん!？」

驚いて咄嗟に後ろに下がろうとしたががちりと両の腕で固められ、身動きがとれない。零距离まで近づいた美代さんの、その、母性の象徴とも言えるものの感触に俺の体温は急上昇していく。

「悟さんは辛い時とか、こうされる事が好きだってお姉さんに聞きました」

姉貴め……また妙な事を。

しかしこれはとても気持ちいい……じゃなくて非常に恥ずかしいものの、悪い気はしない。

「私は、今の悟さんしか知りません。だから……私が悟さんに優しくしたりするのは、今の悟さんにそうしてあげたいからです」

優しい言葉、優しい感触。嘘や偽りばかりだった俺の心を問答無用に溶かしていくようなその優しさに俺は……何を思ったのか。

「悟に美代さん、二人とも遅い！何やって……、本当に何やってるの……?」

ただ、この瞬間の言い訳を考えるのは困難を極めるだろうなと考えるもなく思った。

第十四話：秘められた想い

「あ、綾……」

姿は視界が美代さんの……アレに包まれているので見えないが声だけで誰だかは理解した。理解したからこそ俺の体からは冷たい汗が流れ出していた。

「休憩するって部屋に行っただけ戻ってこないから美代さん呼びに行かせたというのに、全然戻ってこなくてしょうがなくあたしが様子を見に来てみたら……。全く、幸せそうな顔しちゃって」

嘘だ。この体勢だと俺の顔は見えないはずだ。だが、ほぼ百パーセント俺は幸せそうな顔をしている事だろう。何せ俺は男の桃源郷の中に身を任せているのだから。そして迫りくる悪鬼修羅が住む混沌の世界。

「待て、待て待て。落ち着いて話し合おう。話せばわかる、話せばわかる」

「その格好のまま言われても分かり合える気が少しもないんだけど」

まさしくその通りである。名残惜しくも美代さんから離れ、ベッドの上に正座する。

「またして欲しくなったら言ってくださいね」

いやもう、悪いけど美代さんは少し黙っていてください。

「見たところ美代さんが悟を抱きしめていたように見えるけど。年頃の男女が、ベッドの上で」

笑っていない笑顔で俺を尋問してくる。その笑顔はまるで針の筵のようで俺の全身にこれでもかというくらい穴を開けていく。

「何というか、その、美代さんに癒しパワーを分け与えてもらっていただけです」

咄嗟に訳のわからない事を口走ってしまったが、あながち嘘ではない。つまらない事を一気に流してくれた気がする。

そして気がついてくれるかどうか微妙な所だが、美代さんに話を合わせてくれと目で合図を送る。その合図に気づいたのか綾の質問の対象が美代さんに移る。

「そうなの？美代さん」

「はい！悟さんを癒していました」

奇跡である。これでもかと言うくらい自然体で俺の言葉に肯定してくれる美代さん。ただ、あまりの自然さに合図に気づかず、そう答えた気がしてくる。恐らく、気づいていない。

「ふうん」

伏し目がちに俺を見下ろす。その目は嘘は言っていないが、何か隠している事があると思っっているような目であった。女というのはどうしてこうも変な所で鋭いのか。

「あ、折角ですから綾さんも悟さんを癒してみませんか？」

美代さんの爆弾発言そのいち。

あまりの破壊力に伏していた綾の目が丸く開かれてしまっている。俺に至っては口も開いている。

「くす。そうね、それもいいかも」

何だその、くす、とかいう笑い。にあわねー。というよりいいかもじゃねー。口を開けたままそんな事を思う俺の横に綾が腰かける。そして、先ほどまで美代さんがそうしていたように両の腕を俺の頭と胸に回し、自らの胸元に俺を誘った。

呆然としていた俺はそれを甘んじて受けてしまい、そして一秒後の自分を死ぬほど呪うのであった。

「……………硬い」

首と胴にかかった致命的な圧力。そして顔面に綺麗な回し蹴り。覚悟していたものより傷は軽いつても痛いものは痛い。蹴り倒されたままの恰好でベッドに倒れている俺を美代さんが心配そうに声をかけてくれた。

「だ、大丈夫ですか？」

うん、多分ね。結構慣れっ子だし、ボク。

慣れさせてくれた張本人は既にこの部屋にはいない。さっさと下に戻ってこいだけ告げて退室していった。戻ってこいと言われてもこのままベッドとお友達になりたい気分なんですけど俺。

「だがここは素直に従っておくべき、か」

痛む体を起こして立ち上がる。美代さんもそれにならって立ち上がり、体の調子を確認する俺を見ていた。

「あ、そうだ」

さて戻るか、と部屋の外に出ようとした所で美代さんに言うておかねばならない事を思い出す。振り返って美代さんが正面にいる事を確認する。

「さっき言った事は皆には内緒にしておいてくれ。あんなもん次の夢を見つけれない俺が勝手に見た被害妄想に過ぎないからな。聞かせといてあれだけど、正直聞いてつまらなかつただろ？」

思い出すだけで悶えてしまいそうな恥ずかしさが込み上げてくる。男らしくない事この上ない。

「いえ、話してもらえて何だか少し、嬉しかったです」

彼女独特の柔らかい笑みを見ると、話して良かったとも思えてくるから不思議だった。

階段を降りてリビングに向かう際、少し違和感を感じた。

どうにも静かである。少し前の記憶が掘り起こせないほど俺はぼけちゃいない。あの戦争じみた騒がしさまるで終戦直後の焼け野

原みたいに静まり返ってしまっている。もしかしてもう解散してしまっただろうか。時間的にもそろそろ遅いし、あり得ない事でも無かった。そう思うと少し惜しい気もする。

解散したならしたで片付けだけでも手伝おうとリビングに繋がっている扉を開けようとしたその瞬間、横から引つ張られる。

「つとと。メグ？どうした、こんな所で」

階段の影にメグが座り込んでいた。その顔は僅かに赤い。

「いえ、ちよつと見ていられなくて……」

それだけ言つて何かを思い出したのか顔を更に赤くしてうつむいてしまう。なんとなく軽く錯乱状態にあるようでもあった。

「何かあったのか？」

リビングが静かなのは何か理由があるようだ。

「えつと、私の口からはとても言えませんが。知りたかったら静かに……キッチン側から入つてください……」

まったくもつて要領がつかめない。まあキッチン側から入れればわかるという事なので大人しくそれに従う。

「つて、皆してキッチンに隠れながら何っ」

全部言いきる前に姉貴の手によつて口を塞がれる。後ろを見れば美代さんの口も会長によつて塞がれていた。

それほど広くないキッチンで、姉貴、会長、綾、筒井の四人がどこか興奮した様子でリビングを覗いていた。先ほど俺を蹴り飛ばした綾でさえ、一瞬俺に向けておぞましい殺気を向けただけで再び覗きを再開する。皆して何を見ているのかと、俺と美代さんも他の四人に習いリビングを覗きこむ。流石に六人も集まると狭苦しいがそれでも何とか顔を出す。そこにあつたものとは……。

「……っ！」

驚きの声を上げてしまいそうだった所を予測していたかのごとく姉貴によつて口を塞がれる。俺が落ち着いたのを確認した姉貴はそつと手を離す。姉貴の手から解放された俺は信じられない目の前の光景に目を凝らすと同時に耳も澄まし始めた。

「ねえ、何で何もいってくれないのよお。狩谷君、狩谷君ってばあ。お願いだから答えてよお。私はこんな貴方の事を想っているっていうのにい」

あり得ない古屋がいた。

床に倒れた雄の上に四つん這いになり、上気した顔で艶めかしい声を上げている。

「な、ななな何だあれは。一体何があつたんだ……？」

震える声で姉貴に問う。ニヤリと不敵な笑みを浮かべた姉貴は懐から怪しげなビンを取り出し左右に軽く振る。

「一人だけ素面を通すなんて、不公平かと思つてちよつと一服盛らせてもらったの」

ちなみに断つておくが、この場にアルコールは一切持ち込んでいないので全員素面です。

なので不公平なんて事は一切なく、その毒牙にかかった古屋に同情する。

「一体そのビンの中身は何なんだよ……。古屋の変わりようからしてマトモな物とは思えないんだが……。推測するに惚れ薬とかそんなのか？」

姉貴の私物でマトモな物はほとんど無いのだが。

「そんな思春期の少年少女に使つたら危ないものは持ち出さないわよ」

持つてるのかよ。

「これはただの『どんだけ強いアナタも一発泥酔状態エキス（ノンアルコール）』よ」

ただの……か？

「これを飲み物に一滴垂らして飲ませれば奥に隠れた欲望もダダ漏れという優れ物よ」

げに恐ろしきかな我が姉よ。一体その成分は何で出来ていらつしやるのか。

「……待てよ？それじゃ古屋は元から雄の事を」

「好きだったみたいね」

まさに青天の霹靂である。あの外はカリカリ中はモフモフのメロパンみたいな生徒会副会長が雄に恋心等というものを抱いていたとは。

「綾は……知ってたのか？」

先ほどの事もあつて話しかけるのをためらわれたが、あんな古屋を見てしまつてはそんな心配はどこかに飛んでいつてしまった。

「うん。知つてた。相談受けた事もあるし、そもそも仲良くなつた切っ掛けでもあるから」

まさに寝耳に水だ。まさか綾と古屋の馴れ初めにそんな事情があつたなんて。

「その事を雄は？」

「知らない……と思う。あたしは話してないし、トモも告白してないし、普段の様子からは感づかれるなんて事もないと思う」

確かに。鉄壁を思わせる普段の古屋からは、誰かに恋してるなんて様子は微塵たりとも感じられない。それだけに今目の前にいる古屋は衝撃的である。

「雄もびびつてるだろうな……。いきなり押し倒されてあんな告白されちゃあ……」

「いや、雄は気づいてないぞ。押し倒された時に椅子から落ちて気を失つたからな」

古屋にとつてそれは幸か不幸か……俺にはわからない。そしてちやっかりカメラを回している辺り抜け目の無い奴だ。

「ま、部費アップくらいは安い物だろ」

テープもろとも筒井が社会的に消滅してしまいそんな気もいたしませんが。

「まったく。災難、災難でしかないわ。この私が一目惚れなんてしてしまうなんて。責任とってよお、とれないならちゃんと答えてよお」

気を失っている相手にあれだけ言ってしまうとは……なんだか古屋がかわいそうになってきた。会長はキッチンの隅で笑い死にしかけているし。

「わかった。何も言ってくれないなら……」

古屋が前髪を横に分けて雄の顔の真上に自らの顔が来るような体勢を取る。

「キス、しちゃうんだから。嫌なら拒んで。拒まないのなら、責任とってくれるって事でいいわよね」

再び走る緊張。笑い転げていた会長も息を潜め再び覗きに徹する。

古屋の顔が段々と降りていく。それは同時に雄の顔との距離が縮んでいくという事だ。

する方も、見る方もどくんどくと心臓が早鐘を鳴らしている。この場で一番落ち着いているのが当事者でありながら気を失っている雄だという事が何だかおかしい。

十センチ、八センチ、五センチ……。段々と近づいて行く顔と顔。唇と唇。

三センチ、二センチ、一センチ、そこまで近づいた瞬間古屋の動きがぴたりと止まる。

「あ、薬の効果切れた」

間の抜けた姉貴の声。啞然とする野次馬一団。そして先ほどと比べ物にならないくらい赤くなる古屋。

「でさ、姉貴。これ薬の効果中の記憶って……」

「ばつちり丸暗記。これなら暫く夢にも見るわね」

古屋、ご愁傷様……。

「あ……、え？私、なに、を？」

ふらふらと立ちあがりながら今まで自分がしていた事を思い出す

かのように頭を抱えながら壁にもたれかかる。そしてすべてが現実だということに自覚し、更にキツチンにいる俺達に気づいてそれを一部始終見られていた事を知ると。

「ふ、ふぎゃああああーっ！っ！」

訳のわからない奇声を発しながら一目散に我が家から出て行ってしまった。

「少し、やりすぎちゃったかしら」

バツが悪そうに言う姉貴の顔には、達成感の色が包み隠さず現われていた。

結局古屋が帰った事でキリがついてしまったのか、騒がしかった祭は終わりを迎えて會長達三人も自宅へと帰って行った。筒井に女の子二人の送りをさせるのは何かと気が引けたが、片付けが残っているのはここはヤツを信用してやる事にした。ちなみに雄は未だに気を失っているのでソファの上に寝かせてある。

「あ、トモ鞆忘れていつてる。明日持つて言ってあげるか。終業式だし、別に大丈夫よね。……さてよ」

古屋が忘れていった鞆を持ち上げながら何やら不敵な笑いを浮かべる綾からは自然に視線をそらして片付けを進める。

「あ、そういえば」

その途中、美代さんが何かを思い出したように姉貴に問いかけた。

「トモさん、キスするって言ってましたけどキスって何ですか？」

「自分の唇と誰かの唇を重ねることよ。まあ、好きな人相手にやる儀式みたいなものね」

姉貴にしてはマトモな回答である。美代さんも納得したようにうんうんと頷いている。

「じゃあ私、悟さんの事好きですし、してもいいんですね」

美代さんの爆弾発言そのに。そして爆弾行動そのいち。

え？ と振り向いた先には既に美代さんの顔があり、背伸びしながら近づいてくる美代さんの顔を、唇を避ける事が出来ずに……。
「んっ」

胸に抱かれていた時とはまた違う、柔らかい感触がした。呆然とし、美代さんが離れるまで一步も動けなかった。

「あ、もちろん綾さんも好きですよ」

「え!?!」

爆弾発言そのさん、そして爆弾行動そのに。俺にしたのと同じように綾にもその唇を重ねる。完全に不意を突かれたのか綾もそれを避けることなく受け入れてしまう。

「当然私にもよね」

「もちろんです!」

これは特に爆弾ではなかったようだ。

それにしても美代さん……キスするのはね、ライクな人とするもんでは無いと俺は思っんですよ……。姉貴、その辺りもう少し詳しく教えてあげてください。

それが、俺のセカンドキスを美代さんに奪われた瞬間だった。

第十五話：夏の思い出

その日の目覚めは良いものとは言えなかった。とはいえ、悪いかと聞かれればそうとも言えず、適当な言葉を選ぶのならば複雑な感じでも言ったところだろうか。

昨日の美代さんキス魔事件の後、俺は腰を抜かし、綾は動揺しながら雄を引つ張って自宅に戻り、姉貴は美代さんといつまでも戯れていた。そのせいで残った後片付けを立てるようになった後俺が一人でやることとなり、肉体的にも精神的にも疲れ果てた俺は足早に寝る準備を進めベッドに潜り込んだのだった。

今日は一学期の終業式。時計の短針がてっぺんを指す前に長い夏の休みへと突入する事となる。だるいな、さぼりたいなと思っても一応成績表を持ち帰り姉貴に見せなければならぬ。溜息しか出ない成績表なんかを見て姉貴は面白いのだろうか。面白いのだろうか。そういう人だ。

「にしても……」

カーテンから差し込む日差しを浴びながら思い出す。

「原因は美代さんの昨日のあれだろうけど、また懐かしい夢を見たな」

あれは確か、中二の夏休みが終えた頃の事だったか。

「よおーっ、江藤！」

夏休みが終え九月になったといっても暑いと感じる日が続いているというのに、クラスメイトの一人が後ろから俺の肩に腕を回してくる。暑苦しいと思ったらありはしない。

「なんだよ……」

加速していく不機嫌さを隠そうともしていない声で応える。だか

らと違って腕を肩から離さないコイツとは、知りあい以上雄未満と
いった感じの間柄で、簡単に言えば普通の友達である。

「聞いてくれよ！俺にもついに春が来たんだよ！一年の子なんだけ
ど、夏休み最後の部活の帰りに声かけられてさー。彼女持ちで新学
期迎えられるなんていいスタートだとは思わないか！思うよな！」

「はあ」

否応なしに溜息が漏れる。嬉しいのはわからないでもないが、ク
ラス中の男子に言いまわる事でもないだろう。しかしほんの少しだ
が、それだけの事をして呆れの溜息一つで済まされるコイツのキャ
ラクターが羨ましくもあつたりする。

人の好みにケチつける気はさらさらないが、どうせ好きになる
ならもつとマシな奴にしておけと時間が戻せるなら告白に踏み切る
前にその子に忠告したい。

「というより、何だ俺にもつて。他に誰か夏休み中に彼女ができた
奴がいるのか？」

入学したてで勝手にわからない一年でも、受験で忙しくなる三年
でもない中だるみの二年という時期はそういう色気づいた話題で盛
り上がる事が多い。特に夏休みを終えたこの時期は。一夏のアバン
チユールとか言うやつか。違うか。

「はあ？何言つてんだよ。お前の事に決まってるだろうが。この学
校で一番有名なカップルじゃんか」

何言つてんだよはこつちの台詞だ。一体何回否定すればコイツは
……コイツだけじゃない、この学校の人間はわかるっていうんだ。

「お前も狩谷さんも、夏の地方紙を飾った地元ヒーローだろ。そ
れに雄も雄で成績は学年一位、年間告られ数も学年一位。三人とも
既に色んな学校から声がかかってるって話じゃねえか。まったく、
お前ら一体どうなってるんだよ」

「九十九パーセントの努力と一パーセントの才能でできております
が」

「そうは言うけど、九十九パーセントの努力を保つのに才能がい

るだろう。努力する才能が」

そんなもん才能以前の問題だ。まあ、本気で何かを好きになる事ができるって事は割と運が作用する所があるかもしれないが。

「とりあえずもう一回言っておくが、俺と綾は恋人とかそんな生ぬるいもんじゃない」

これ以上無駄な話に付き合ってられるかと、荷物を持って部室へと足を向ける。

そして、教室を出る前にもう一度釘をさしておく。

「俺達は、家族だからな」

部活が終わった頃には既に日は沈んでいた。日が短くなってきたとはいえ、もう既に早いところでは晩飯が始まっけていてもおかしくない時間だろう。この学校のサッカー部は一年前まで弱小とも、強豪とも言えないいわゆる普通の部活だったが、夏に行われた大会で地方紙の一面を飾る程度の成績を上げた事に味をしめたのか、二時間ほど校則で定められた時間より長く活動する事ができるようになっているからである。

俺が入ったから、なんて傲慢な事は言わないが囃し立てる事が特技のような一般大衆は俺をそういう位置に祭り上げる。税金みたいな物だと諦めてはいるが、迷惑ではないという嘘になる。

「ま、しょうがないか」

そうぽつりと嘆きながら校門から出ると、聞きなれた声に呼び止められた。

「綾？」

「ようやく終わったわね。まったく、サッカー部だけ特別扱いなんてずるくない？」

競技は違うが、俺と同じく地方紙にその存在を飾られた綾であったが、その成績は俺とは違い部全体のものではなくあくまでも綾個

人のものであるため、陸上部には活動時間のオマケがつく事はなかった。

「む……。制服じゃないって事は一度家に帰ってからまた来たのか？」

綾が着ていたのは夏休み中何度か目にした私服であった。それに加え、傍らには自転車も置いてある。

「ああうん。兄貴に晩御飯与えなくちゃならないからね」

綾と雄が二人暮らしを始めたのは中学に入ってから。

三年ほど前、二人の母親が病気で亡くなり、父親も仕事で海外から帰れず等の事情で暫くは俺の家で暮らしていた二人であったが、中学に上がるのを機に自宅での二人暮らしが始まった。

それからというもの、綾は家事全般を引き受けながら部活であるの成績をあげてしまったりすごい奴だ。

「というより、わざわざ自転車で学校まで戻ってきて何か用なのか？どうせ帰る所はほとんど一緒なんだから家で待ってればいいのに」

「あ、うん。歩きながらでいい？」

断る理由も無いのでそれに従って歩きはじめる。

自宅まで徒歩で三十分程度。ほとんど一本道の平地なので、自転車ならば半分以下の時間で済む帰路を進んでいく。

歩きながら、なんて言った綾だったが、一向に口を開く気配がなく、時間ばかりが過ぎていった。その綾らしかぬ様子に、一株の不安を抱かずにはいられなかった。社会人一年生な姉貴がまた良からぬ事をしでかす暇があるとは思えないが、その油断をついてくるという事も十分考えられる。

「あ、ちよつと公園に寄つていかない？」

ようやく口を開いた綾だったが、それも綾らしくないものだったので不安は一層深まるばかりだ。

「構わないけど、何でまた」

「いいからいいから」

自転車を入口付近に止め、小走りで向かった先は小さなブランコだった。その片方に座り、隣に座れと目線で指示する。

まあ……ベタな所としてペンキが塗りたてとかそんな感じか。

ノーマル過ぎる気もするが、一応確認のため指でなぞって確認する。「別に、ハナさんならみじゃないわよ」

見事に見抜かれて仕方なくブランコに座る。

小さすぎてまともにも漕ぐこともままならない。そして、このブランコがちょうどいいくらいの年頃には既にボールを追いかけていた俺にとって家から一番近い公園のブランコだというのに座った回数是指で数えられる程度だろう。

そしてその頃から一緒だった……綾も俺と似たような感じだろう。

「それで、話って何なんだ？」

座ってから暫くたってもなかなか肝心な話を振ってこない綾に、俺の方から問いかける。

「えっと、それなんだけど……」

まったく明日は雨か雪か槍か？こんなに歯切れの悪い綾は写真に撮っておきたいくらい珍しい。

「私のクラスでさ、やれ誰が誰を好きだとか、やれ誰と誰がくっついたとかそういう話題があふれかえってさ」

どこのクラスでも似たようなものなのか。

「そんな中さ、本当何回も否定してたのにまだあたしと悟が付き合ってるって思ってる人がいてさ。改めて違ってたら絶対付き合ったほうがいいとか言ってくるんだよね」

「それはまた……」

付き合った方がいいって……もし、本当に俺と綾が付き合ってたとしても今と大して変わらないだろうに。

「それで、提案なんだけどさ……」

一度わずかに大きく息を吸い込みながら俺の方を向いて、そう言った。

「試しに、付き合ってみない？」

「ぶっ」

思わず吹き出してしまふ。

「へ、変かな？」

「変じゃないけどさ、別にどっちでも変わらないだろ。買い物だつて一緒に行くし、夏休みだつて何回も一緒に遊び行ったりしただろ。周りから見ればそれこそ付き合ってる証拠になるんだろうが、俺達は家族なんだからそれが普通だ。

「いいから、ちょっと試してみよ？手始めに、手を繋いでみるとか」
ブランコを繋いでいる鎖を掴んでいた左手をこちらに伸ばしてくる。こちらは右手を離して伸ばされた左手の上へ重ね、握り合う。

「別に、なんとも」

手の暖かさは感じるが、それ以上の事は特に……といった感じだ。そもそも手なんか飽きるほど繋いでいるんだから、試す以前の事だ。

「そ、それじゃあ、キ、キスしてみるとか」

「キスねえ……」

確かにそりゃいかにも恋人つて感じだし、今までした事もない。ただ、いざするとなつても恐らく普通の恋人達がなるような気持ちには沸いてこない。

例えるなら母親と子供がキスするような、そんな感覚に近い。

「ね、悟のほうからして？男の子でしょ」

まったく似合わない乙女チックな言葉が聞こえてくる。仕方なしとブランコから腰をあげ、綾の正面に立つと腰をかがめて視線の高さを同じにし、

そつと、口づけをした。

先に顔を引いたのはどっちだっただろうか。少しずつ目の前の

顔が遠ざかっていく。そしてお互いどんどん顔がゆるんでいく。

「に、似合わないわ……」

「確かに……」

そしてゆるんでいく顔が段々歪むと表現したほうが近いほどになり、すぐに決壊した。

「く、くくく。似合わないすぎて笑えてくるんだけど……」

「試してよかったかもな。いい結論が出たじゃないか」

確かめる事でも無かったが、これではつきりした。

俺達は恋人なんていう段階は一度も足を踏み入れるまでもなく飛び越えているなんてわかりきっている事だった。

何せ、俺達は家族なんだ。家族より大切な恋人なんてそうそうないだろうに。

「もー、あまりに笑えすぎて試そうなんて言い出した事が恥ずかしいっいたらないわ。だから先に帰るね。また明日！」

笑い顔のまま自転車に飛び乗ってさっさと公園から離れていく。

「まったく綾も変な事言いだすなあ」

そして俺も、遅れて公園から離れていく。

ふと思う。

たった数分程度の恋人ごっこ。

だけどその数分間、二人は確かに恋人だったのではないかと。

恋人というものは何なのかと、その時知ったのではないかと。

「どんだけこっぴどくかしい青春してんだ俺は……」

あらかた回想し終えた俺は、あまりにも中学生日記的な思い出しに布団の中で悶絶していた。

当時の俺は、というより一昨日までの俺はどうとも思わなかっただろうが、今は違う。なぜなら昨日の事件で俺は家族としてじゃなく、一人の異性という認識の人からのキスを知ってしまったからだ。一人の異性、というのを綾にあてはめてあの時の事を思い出すと……。

「うああああ、今日から綾にどんな顔していいかわかんねえ」

そもそも昔と今じゃ俺自身が変わってしまったている。昔はボールさえ蹴ってればそれで良かったと言えるくらいに熱中していた物があった。そして今は無い。つまりこのモヤモヤとした気持ちを晴らす手段が無い。不快とまではいかないが、普段通りというわけにはいかないだろう。

ああ……、本格的に終業式さぼりたくなってきた。

とりあえず結論から言うと、そのモヤモヤを一時的とはいえ晴らしたのは姉貴の存在だった。俺の通知表は姉貴の養分になるわけだから、その養分が得られなかった場合養分の代わりに蓄えられた鬱憤が俺に向かってくるのだろう。そう考えるとさぼる気など失せてしまった。

着替えてリビングに向かうと、すでに美代さんは起きてテーブルについており、昨夜の残り物で朝食をとっていた。

「お、おはよう」

昨日の事で完全に美代さんの事を意識してしまっており、ぎこちない挨拶が俺の口から飛び出る。

「おはようございます。悟さん」

対して美代さんは昨日までと一切変わらない挨拶を返してくる。あれだけの事をしておいてケロっとしているあたり、美代さんの天然っぷりは最早凶器なんじゃないかと思えてくる。

「明日から夏休みですね。せっかく学校に行けると思ったのに休み

だなんて、少し残念です」

美代さんはたった三日だが、三ヶ月間の一学期を過ごした俺にとつては貴重な休みである。

「ま、学校は九月になればまた始まるし、休める時に休むのは常識つてもんだ。補修と宿題さえ終われば遊び放題だ。海にでも遊びに行きたいな」

行きたいな、と希望の形で言うてはいるが百パーセントに近い確率で行く事になるだろう。

それにしても海か……水着か……いいなあ。

そこまで連想して、折角落ち着いてきたモヤモヤが復活して自己嫌悪に陥る俺がいた。

第十六話：地下室の秘密

夏休みというのは一ヶ月ちょっとという長い時間、辛く厳しい毎日の勉強から逃れられる学生として貴重なイベントではあるが、それを目前に控えた終業式という行事も一年に一回しか無い大切な日だとは思わないだろうか。思いませんか。

こんな俺が通っているといっても、一応名実共に県で一、二を争う有名校。恐らく半数以上の人が将来設計とまではいかずとも、尋ねられたらすぐに自分の志望校を言えるくらいは先を見ている事だろう。つまりは夏休みだからといって遊びにばかり感じている場合ではない人が多いという事だ。

「おはよ。悟」

特に意味もない事に頭を使っていた俺の後ろから朝の挨拶が送られる。今朝のモヤモヤが再発しそうな心を押さえつけながらあくまで自然に挨拶を返す。

「よお。昨日は散々だったな」

その言葉で昨日の事を思い出したのか、深いため息を吐きながら教室の奥へと視線を向ける。その先には美代さんの机があり、当然美代さんはそこに座っている。季節はずれの転校生という事もあるし、目立つ容姿をしているので三日目となった今でも彼女のまわりの人だかりは減りそうにない。

「そういえばトモはまだ来てないの？ 鞆持って来たから渡したいんだけど」

そう言われて教室を見渡す。確かに古屋の姿は教室の中では見られなかった。いつもは朝練のある生徒より早く来ているというのに。「もしや、今日学校休む気なんじゃないのか……？ 古屋に限ってそんな事はないと思うけど」

荣誉ある生徒会副会長が終業式に欠席。普段の古屋の行いからさぼり等とは思われないだろうけど、逆に急病と思われて皆に心配さ

れてしまつかもしれない。

「急病か……。姉貴のあの薬、副作用とか無ければいいんだけど」
そう思うところもちも心配になってくる。一応無事を確認しておこ
うと綾に連絡とってもらえないかと頼もうとした矢先、古屋が教室
にやってくる。

いつもより遅い登場に、クラスの視線が一瞬集まるが思い起こせ
ば今日は終業式。その準備か何かだろうと集まった視線はすぐに散
っていく。その変わりに古屋に向けた挨拶がいくつも教室内を飛び
交った。

それに一つ一つ応えた後、人だかりを分けて美代さんの所まで
行き、何かを伝えた後にこちらに振り返った。

「綾に江藤君も、ちょっと来て」

緊迫した声を出す。自然と教室内にその緊迫感は伝わっていく、
騒然としていた教室内が静まり返る。何の用かが容易に想像できる
せいで、当事者である俺達は少しも緊迫しないとはおかしな話だ。

古屋の慎重さは筋金入りだった。誰かに話を聞かれたらまずいと
思ったのか、廊下の一番端にある空き教室の鍵をわざわざ職員室か
ら借りてきて俺達を招き入れた。

「絶対に、口を割らないように」

強い口調でそれだけを告げた。俺と綾は元から喋るつもりなんか
さらさらないので問題は無いが、問題があるのは……。

「トモさんが、雄さんの事を好」

一瞬にして美代さんの口を塞ぐ。

「貴女が一番心配です……」

美代さんは誘導尋問にかけようと思ったたらかける前に何の前触れ
もなく喋ってしまいそうな天性の危なっかしさがあるから案外秘密
を握られると一番やっかいな人かもしれない。

「ああ、それと。こちらは忠告する事でもないかもしれませんが、一応言っておきます」

普段、あまり感情を見受けられない古屋であったがその一瞬だけは確かに強い感情を垣間見た。

「部費アップなどと愚かしい考えはしないほうが身のためです」
邪悪と殺意に染まった見事なまでの笑顔だった。

余談だがその日、筒井は欠席だった。

「うーん」

部室にて会長が唸り声をあげていた。

既に終業式は終え、夏休みに突入したという開放感と、溜息しか出ない通知表とがうまく中和し、結局いつも通りの気分で体を満たしつつ部室で昼食を食べていた時の事だ。

「おかしいなあ。こんなはずないんだけどなあ」

いつも考える前に行動する会長には珍しい悩み事のようにだ。

「どうしたんですか？」

一緒に昼食をとっていた美代さんが心配そうに声をかける。

「うーん。とりあえず皆が揃ってから話したいんだけど、メグは部活の方に行くって言ってたし。ねえサトー君、トモリは今日来ないの？」

上級生でしかも生徒会の副会長を呼び捨てにするあたり、会長の会長たる何かを垣間見る。

「古屋は生徒会の仕事を終わらせてから来るって聞いている。後一時間位はかかるんじゃないか？」

それを聞くと、会長の唸り声はさらにボリュームを上げ、乱暴に

会長椅子に座ると美代さんにお茶を要求し始めた。

「あ、はい。ただいま」

そんな会長に自分の昼食を放り出してまで甲斐甲斐しく給仕する。いつのまにか会長に専用メイドとして洗脳されてしまっているのかもしれない。羨ましくなんてないんだから。

「悟さんもどうですか？」

あれ……何か涙が……。

それからというものの、会長は椅子に座ったまま床を蹴り続けた。座ると床に足が届かないので、音自体は床とかする程度しかなかったが、落ち着きの無さというのは伝染していくもので、美代さんみたいに天然じゃない限りは否応なしにそわそわして来てしまう。

「会長、本当に何があったんだ？」

「それはトモリが来てからだよ。今の状況を理解できるのは多分、槻実とトモリだけだもん」

嫌な予感というものは往々にして的中率が高いものである。あの会長がここまで落ち着きを無くすというのはそれを感じるに十分な要素だった。

古屋よ、早く来てくれ。理解できなくとも状況が前に進んでいれば幾何かは落ち着けるはずだ。

「失礼します」

その願いが通じたのか、思っていたよりも早く古屋が登場する。

「トモリ遅い！」

「貴方に呼び捨てにされたり、遅いと言われたりする筋合いはありませんが、気にしないでおきます。それで、何か用ですか？ 珍しく焦っているように見えますが」

本棚から本を取り出し、手近な椅子に座りながら、読みかけだっ

たのか途中のページから読み始める。

まったくの無関心を決め込むつもりだろうか。

「地下の封印が解けかかっている」

バサ、と床に本が落ちる音が響く。もちろん、古屋が持っていた本だ。

今日の会長が会長らしくないというならば、今の古屋もまさに古屋らしくなかった。

本は既に床に落ちていているというのに未だに手は本を持つ形をしており、視線は会長に固定されていた。

「封印？何の事だ？」

何やら無駄に姉貴の匂いに溢れる単語だが、俺には何の事かわからない。

「どういう事が説明しなさい、鳥居槻実」

美代さんも部屋に漂う妙な空気を感じたのか、どこか落ち着かなさそうな様子だ。

「説明って言っても、槻実もよくわかってないよ。前から違和感を感じていたんだけど、今日になってはつきりした。封印、解けかかっている」

「お、おい。何の話だよ。完全においてきばりにされているんだが」
会長と古屋の間にだけ成立する会話を繰り返されてもこちらは混乱するばかりだ。俺達にもわかる説明をしてもらおうと思ったが、二人は言うべきかどうか迷っているような顔をこちらに向けた。

「……うん。サトー君も美代さんもオカルト研の会員だもんね。メグがいけないのは好都合だったかもしれない。メグを巻き込みたくない話だし」

つまり、説明をされたら巻き込まれるという事か。そう思うと説明される事に抵抗が生まれるが、それをぐっと抑える。会長が言ったように俺も美代さんもオカルト研の一員なのだから。

「つまりね、この前槻実はおカルト研としてする事は先代オカルト研がすべてやっちゃったから無いって言ったけど、それが有ったっ

て事かな。有ったというより、後始末みたいな感じなんだけどね」
「被奈さんがオカルト研究会として活動する以前は、この学校には七不思議どころか百不思議くらいの奇怪な出来事があった。被奈さんはその原因がこの学校の地下にある事を突きとめて、その原因を封印した。それが今解けかかっている、という事です」

会長の説明に古屋が補足する。

「そ、それじゃあ、姉貴に連絡したほうがいいんじゃないのか？ 姉貴じゃなくても陵先生や、光坂先生でもいい」

元オカルト研が二名も職員としてこの学校にいるのだ。何も俺達の仕事、というわけじゃないだろう。

「それが一番早くて安心なんだけど……。槻実はやりたいよ。だって、せつかくオカルト研を再興できたのにする事が無いなんてつまらないよ！」

つまらないって……。そんな事を言っている場合でも無いと思うのだが、古屋も何か言ってやってくれよ。

「再び被奈さん達の手を煩わすのは少々心苦しいものがあります。出来る事ならば私達でどうにかしたい所です」

こんな時に限って古屋は会長の味方をするのか。

「わあ、楽しそうですね！」

美代さんはやっぱりずれているし。

「それで、サトー君。槻実達かよわい女の子はやるって言ってるけど、その上でサトー君は降りられるのかな？」

相変わらずどこか卑怯だ。そんな事を言われれば断ったりしたら男として許される事じゃないだろう。

「わかりましたよ。ただ、メグには黙っておくって事でいいんだよな」

流石にメグにまでこんな危なっかしい事に巻き込むわけにはいかない。その事については会長もわかってるだろう。

「うん。夏休みの活動表も槻実達の分と、メグの分。二つ作っておくよ」

一人だけのけ者にするようで悪いような気もするが、これもメグのためと抑え込む。

「とりあえず、これから簡単に活動内容を説明するね」

ホワイトボードを隅から持って来て、そこに文字を書いていく。

「とにかく今日は一度、知らない人もいるようなので地下の見学を兼ねて調査にいくよ。結構入り組んでるから初めての人は方向感覚を保てる位に中に慣れること。奥まで行かない限り危険は無いと思うけど、いずれ行くことになるだろうからそのつもりでお願い」

そう言いながらホワイトボードに『おさない』『かけない』『しやべらない』と次々に書いていく。しかしそれは避難訓練である。

「とにかくだよ。絶対に槻実かトモリから離れなちゃ駄目だよ。でもサトー君は先代会長に鍛えられてるから大丈夫だし、美代さんはそんなサトー君に盾になつてもらえばいいかな」

「悟さん、よろしくお願いします」

何だか納得がいかないが、言われずともいざという時には盾にでもなんでもなるさ。他に男がいないんじゃないや仕方がない。

「じゃあさっそく地下に降りるよ。道具は揃ってるから、後は心の準備だけ済ましておいてね」

深呼吸を一回、二回。これから何が起こってもいいように、今まで姉貴にされてきた事を一つ一つ思い出して、体を慣らしておく。

「そういえば、地下って言うてもどこから行くんだ？」

会長から聞く限り屋上以上に立ち入り禁止になりそうな場所らしいので、案内図に記載されないのは当然として、地下なんてもの今まで噂にも聞いた事がない。

「地下へ行くにはコレを使うんだよ」

会長が取り出したるは久々に登場したドアの動きを縦横無尽に変更できる謎のリモコン。俺が無事入会を果たしてしまったので、その役目を終えたものだと思っていたがそうではなかったようだ。

「一応皆にも教えておくね。簡単だからすぐ覚えられると思うからちゃんと聞いててね。それじゃ言うよ。上上下下右左右左B A、だ

よ。覚えた？」

一瞬で覚えました。

「ちなみに、それ決めたの誰？」

「先代会長だよ？」

「そうか、姉貴世代だもんなあ……」。

「じゃあ開けるから見ててね」

慣れた手つきでリモコンを操作する。そして最後のAボタンを押した瞬間……。

「何も起こらないじゃないか」

「サトー君、あせりすぎだよ。このコマンドは開けるための前準備みたいなものだよ」

一番奥の本棚の前に立ち、それを横にスライドさせる。

本が何冊も収納されており、数十キロの重さを誇るそれが簡単に横へと動いて行く。その裏に、木造の扉が隠されていた。

「お、おお〜」

男子というものは、隠し扉の類には心ときめかせるものだと思う。俺すらときめいてしまうくらいなのだから。

「サトー君。わくわくするのは悪い事じゃないんだけど、今から行くところはわくわくしながら行くような所じゃないから気を引き締めてよね」

「う、わかった」

先頭をきる会長に釘をさされながらその後についていく。道は細く、俺の後ろに美代さんが、最後尾には古屋と一列に並んで目の前に広がる暗闇の中を進んでいった。

明りは各自が持つ懐中電灯のみ。軋む階段を一步一步降りて行った。

第十七話：地下に潜むモノ

そこは妙な気配で一杯だった。

ほんの数メートルしか部屋から離れていないというのに、五度近く気温が下がったように感じる。それを証明するかのように、俺は無意識のうちに腕を腕でさすりあっていた。

たちこめるカビのような臭い。しかし、あくまでそれはカビのよ
うなだけで、懐中電灯で辺りを照らしてもその臭いの発生源らしき
ものは見受けられない。

「何だかねとねとします」

美代さんがそう不平を洩らす。

確かに何かがまとわりつくような感触が体中を取り巻いて話さ
ない。

空気の成分に靈気が三割ほど混じっている、と言われても容易
に信じられそうな不快感だ。

「それに、ちよつと天井低すぎないか」

俺の肩あたりまでしか床と天井の距離が無いため、必然的に腰を
低くしての行軍になる。

「そうかな？」

「そりゃ、会長にはちよつとどいいくらいかもしれないけど」

他の二人も若干変な体勢で歩いている。

恐らく、長いことこんな体勢でいたら腰が悲鳴をあげるに違
ない。

「もうちよつとしたら高くなるから我慢だよ」

それは本当にもうちよつとだった。

階段を降りた先は学校の廊下のように真っ直ぐな通路があった。
天井は腰を真っ直ぐに伸ばせるのはもちろんの事、上に手を伸ばし
てよつやく指先が触れるくらいあり、若干普通の建物より低いとは
いえ十分な高さがあった。

振り返れば思っていたよりも近くに部室の明かりが見える。学校の階段よりかずつと短い、踊り場程度の距離だった。

ぎゅつとシャツを掴まれる。何かと試みてみれば、もう天井は高い所にあるというのに縮こまった美代さんがいた。

「悟さん……、少し怖いです」

「大丈夫か？無理しないで、戻るか？」

「いえ、大丈夫です。それに、何かあったら悟さんが守ってくれますよね？」

上目遣いでこちらを覗く瞳が僅かに揺れている。

そんな目で見られて、首を横に振る男はいない。小さく「ああ」と答えて、シャツなんかじゃ心許ないだろうとその手を自分の手と合わせる。

それからは暗い通路をゆっくりと歩いて行った。

しっかりとした作りになっているとはいえ、恐らく相当古い建物だというのに木々の悲鳴は俺達の足元からしか聞こえず、それが却って不気味さを演出していた。

「会長、ここって……」

廊下の途中、左右に扉があるのが見えた。学校の教室、という感じのものではなく、どちらかといえば病院のそれに近い。

「旧日本軍の実験施設って噂だよ」

さらりと恐ろしい事を言う。

「旧日本軍って……。ここ、空襲で焼けおちたんだろ？地下といってもそんな深くないし……。戦後に作られたものじゃないのか？」

「運よく残ったのか、または戦後に作りなおされたのかわかりませんが、ただ言える事は……」

先頭と最後尾から積みかけるように恐ろしい言葉を繋いでいく。

「ここで、たくさんの命が失われたって事だよ」

「きゃっ」

会長の止めの一言と同時に、美代さんが小さな悲鳴をあげる。

ダブルで襲いかかる恐怖に、俺の背中は鉄の棒でも入れたように真っ直ぐに伸びる。

「な、何かが今通り過ぎていきました……」

ほら、会長が怖がらすから美代さんが神經過敏になってしまったじゃないですか。

「うん。今、小さいのが横切ったね」

「あの程度なら別に害はありません。大丈夫です」

「そうそう。美代さん少し怖がりすぎじゃな……ってええっ?」

普通に肯定され、自分一人だけ何も感じなかったという事に少し疎外感を覚えてしまう。

「サトー君は先代会長にとことん鈍くされてるようだから仕方ないよ」

確かに、この手の事は姉貴に大体やられてきたからな。だが、やられてきたからこそここのういった事に敏感になってしまっているのではないのだろうか。

「鈍く、というよりも慣れて……と言った方が正しいのかもしれないですね」

つまりは先ほど美代さんの横を通り過ぎた物は皆にとっては軽い怪奇現象の一つかもしれないが、俺にとってはそよ風程度の事にしか思えないという事か。

「この手のモノに有効な対処法は何といっても気づかない事に限るんだよ。サトー君はそれが出来る人だね。次に怖がらない事かな」

「それだと私、危ないですか?」

美代さんはすっかり、この暗くて薄気味悪い空間にのまれてしまっている。

その状態が危ないというのなら、今日の所はこの辺りで引き返した方がいいのではないだろうか。

「大丈夫だよ。平坂さんは狙われる事は絶対ないから」

確信に満ちた声で美代さんを励ましている。

「ごうというのがする事って、生きてる者を自分の側に連れ込もうとするって事が大前提なんだよ。その方法は色々あるから巻き添えをくらっちゃうってのはあるかもしれないけど、平坂さん自身が狙われるって事は無いよ。あ、でも平坂さん位になると判別つかないかも……」

「そ、そうなんですか」

会長が安心させようとしているのはわかるのだが、最後にそれをすべて無効にしまった。

「そういえば、古屋は知ってるのか？」

美代さんがどういいう存在なのかという事を、古屋にはまだ話していなかったはずだ。

「私を甘く見ないでもらいたいものです」

生徒会副会長の座は伊達ではなかった。

「それで、さっきの話の続きなんだけどね」

美代さんの緊張も解け、地下通路も大分奥まで進んできた所で会長が再び口を開いた。

「霊とか怨霊とか、そういう類のものへの対処法が存在に気づかない事、怖がらない事ってさっき言ったけど、それとは別に狙われやすくなる要因ってのがあるの。それは知ってしまう事なんだよ。霊について知り、それらがどういいうモノなのか、それらがどんな未練や恨みを持っているのかとか。意思とか疎通できちゃうと真っ先に狙われてしまうんだよ。だから、この中で一番狙われやすいのは多分槻実。その次にトモリ。サトー君は眼中に無いって位狙われないと思うよ。でもその分槻実達は実力で追っ払えるからどっちが安全かって言われるとどうとも言えないんだけど……。それにしても、やっぱり面白い話だよな。やっつける力を身につければ身につけるほど

深く理解するって事だから必然的に狙われやすくなっちゃうんだからね」

口を挟む隙も無く、一気に言葉を出す会長にどんな意図があったのかがわからない。美代さんを安心させるためや、今の状況を確認するといったためという訳でもなく、どこか自嘲的な意味が含まれているような感じさえした。

それを聞いた古屋も、どこか遠くを見るような目で暗闇の先を見つめていた。

暗い道を黙ったまま進んでいく。軽く数えてもその間にあった部屋は両の手では数えきれない。その部屋で何が行われていたか考えるだに恐ろしい。

「あ、階段だ」

先頭を歩いてきた会長が急に立ち止まりそう告げた。

「階段つて……。ここ、更に下があるのか？」

肩越しに覗いた先には下に向かう階段があった。部室からここへと降りる階段とは違い、天井の高さは低くはない。学校のそれと同じで踊り場がある事までは何とか見て取れたが、それから先は、まるでドロドロの液体みたいな暗闇が階下を覆い尽くしていた。

「会長、この先は物凄くやばそうな感じがするわけですが」

「ん、サトー君がやばそうって思うなら今日はこの位にしとこうかいくら俺が鈍いとはいえ、あの掬えそうな暗闇の中を歩いて行く気にはなれない。」

会長の号令の元、先頭を古屋に任せて今来た道を引き返して行く。

進行方向を逆にしただけで、部室から差し込む光が見える。長い距離を歩いてきた感覚があったが、どうやらそれほどでもなかったようだ。

「ん？」

背中を撫でられるかのような感触を、突然感じた。

「どうしたの？サトー君」

「いや、この先つてもしかして外に繋がってたりするのか？今、奥から風が吹いてきたような気がしたんだけど」

はて、と首を傾げる会長。

「気のせいじゃないかな？槻実はそんなの感じなかつ……っ」

その言葉を全て言い切るより早く、懐から何かを取り出し階段奥へと投げつける。

バチン、と物凄く強い静電気が発生したような音が鳴る。そして、それさえも打ち消してしまうほどの会長の声が響く。

「伏せて！」

何、と聞く前に体を動かす。反応できていない美代さんを半分叩きつけるかのように伏せさせる。

「悟さん……」

吐息を感じるくらい近い距離。ただ、それに恥ずかしがっている場合ではない。

天井を這うように金色のもやのようなものが頭上を通り過ぎて行く。それがどこか人の形に見えたのは、会長の話を聞いたから起こった気のせいか、もしくはは真実か。

「トモリ！」

「わかつてます！」

制服の裏ポケットから数枚の紙を取り出して床に並べる。

それがどのような効果を持っているのかは知る由もないが、暫くの安全を保障できる物のようだ。

「札……って。古屋は神道か陰陽の人だったのか？」

テレビドラマ位にしか見る機会が無いような札と共に、古屋のまた違う一面を見てしまった。

「いいえ、これは既製品です。私自身は特にこれといった力は持っていない。だからこそ道具に頼らざるを得ないのですが」

既製品で、一体どんな購入ルートなのだろうか。

「入口側を占領されちゃったね……」

困ったように会長が言う。先ほど頭上を通った金色のもやは、古

屋が設置した札からこちらには侵入できないのか、動かずその場に留まっているが、そこは俺達が外に出るために通らなければいけない通路。

相手の動きを封じる代償に、こちらも退路を失ってしまう。それに加え、俺達の後ろにはあれが出てきた階段がある。実質はさみうち状態という事だ。

「あれをもう一度後ろに受け流すってのは出来そうか？」

「いまいち実態が掴めないから、何とも言えないけど……。結界張りながら近づいて、槻実が怯ませるから、その隙に一気に駆け上がる……。のが一番安全かな。部屋にさえ入れば、確実に安全だよ。あそこは特別丈夫に出来てるから」

あの部屋は関所的な意味も兼ねていたのか。

「しかし、張りながら進むと言っても精々二十メートル位が限度です。生憎と、大した数を持ち込んでいなかったのです」

古屋に元々そういう力が無いせいか、もしくは既製品だからか札は使い捨てで再利用はできないようだ。しかし、二十メートルでは部屋までの距離の半分も埋められない。

「会長はそういう事出来ないのか？」

「槻実のモットーは攻撃は最大の防御だよ！」

つまり、出来ないという事ですか。

「それならやつついたりとか出来ないんですか？」

「出来ない事もないけど、建物の安全の保障が出来ないかな」

それは勘弁してほしい、という事で先ほどの案で行く事が決定する。

俺や美代さんはこう言った事にはまったくの素人なので、余計な口出しはせず二人の指示に従って動く。

会長が目の前を牽制し、その隙に古屋が結界を奥へと動かしていく。

ただ、それでも後ろの階段はちっとも遠くならないし、前の階段は近くにならない。

ただ床に、古屋が使った使用済みの札が数十枚と散らばるばかりだった。

「……っ。無くなった。結構距離が残ってしまったけど、ここから先は走るしかないわ」

悔しげに表情をしかめる古屋。恐らく古屋が見積もっていた距離より大分短かったのだらう。

「仕方ないよ。後は、槻実の腕と皆の脚力次第。いい？ いつせーのーせで行くからね」

言葉も無く頷き合う。

靄をひるませる役の会長が先頭に、残りは会長の後について走り出す体勢をとっている。

「いくよ。いつせーのーっせー！」

瞬時に走り出す。

出来事はほんの一瞬だった。

結界から飛び出た俺達に向かって靄が流れるように動く。

それに向かって会長が小さな玉のような物を投げつけ、淡い光が出る。それがどういった意味を持っているかはわからないが、少なくとも靄の動きが止まる。

今が好機と、更にスピードをあげようとする。

そして、ゴンツと中途半端に硬い物がぶつかり合ったような音が鳴り響いた。

「きゃっ！」

「美代さん!？」

なんてこった。

美代さんが、結界を通れなかった。

「サトー君！」

会長が俺の事を呼ぶ。

何を言おうとしているのかは何となくわかる。

美代さんは結界の向こう側にいる限り大方安全だ。しかし、俺達はそうではない。無防備なのだ。

だから一度安全な所まで走りきって、それから早急に対策を練るのが最良。

でも、しょうがないだろう？体が、勝手に動いたんだからさ。

「悟さん、後ろ！」

再び結界の中に戻るまで後三步。

その瞬間、肩を掴まれる。

思わず振り返る。

そこには金色の、人の形をした何かが立っていた。

第十八話：記憶と居場所

一歩一歩足を踏み出すごとに、足場としての信頼度を疑いたくなる音が鳴り響く。たった一人が歩くだけでそうなるのだから、四人が並んで歩いているこの状況は否応なしに不安を煽る。

「ここが基点ね。昔ならいざ知らず、今の日本の地下にこんなもん
コソコソと作ってるなんて、世の中色々な人間がいるものね」

髪を頭の後で結う、いわゆるポニーテールの少女が呆れた声を出す。左手に暗闇を照らす数少ない光源である懐中電灯を持ち、問題の場所に光を当てていた。

「映君、必要になるとは思えないけど、一応証拠写真とっておいて
まだ何が潜んでるかわからないし」

少女の言葉に反応したのは一人の少年。カメラを取り出し、慣れた手つきで数枚の写真を撮る。

「それじゃ、早速封印作業に取り掛かるから玲華は辺りを警戒、紗
希は私の手伝いをよろしく。それと……」

少女が『五人目』を見て言う。

「サトウ君は、巻き込まれないように注意してて」

瞼が開いた。

「だけど目が覚めたと自信を持って言えない。起きているという
自覚がありながら、まだ夢の中にいる……そんな半覚醒状態の中に
俺はいた。」

俺？俺って、誰の事だ？

目が覚めているという自覚も、今感じている自分という意識が
本当に自分の物だという認識も曖昧になっている。

記憶を掘り返してみても、今がどのような状況なのかを決定づ

ける物は無い。あつたとしても、それが本当に自分の記憶なのかもわからない状態では意味がない。

突然視界がすうっと後ろに下がる。恐らく俺が、数歩後ろに下がったことによるものだと思う。

そして気づく。意識はともかく、この体自体は俺のものではないという事に。

周りを見渡して現状を確認しようにも、首を左右に振る事さえかなわない。

動かない視点と、働かない意識の中でようやく掴めた情報は、今この場にいるのが男が一人に女が三人、そしてサトウと呼ばれた自分のみという事だ。

その情報を得て、最初に感じたのは強烈な既視感。

視界に映るどの顔も、どこかで見た事のあるような気がする。

特に一番奥にいるポニーテールの少女。どこかで……と考えるまでもなく記憶の一番上の方に刻まれているある人物が思い当たった。

「姉……貴？」

そう呟いた瞬間、視界が急に暗転する。

「ん……」

強い日差しがまるで瞼を焦がさんとするかのように照りつけてくる。

その暑さに耐えられず、瞼を開ければ当然のごとく直に眼球を照りつけられ思わず手で日差しを遮ろうとする。

しかしそれよりも早くに、手の何倍もの大きさをもった物体が日差しを遮断した。

「悟さん！大丈夫ですか？」

逆光に遮られ、シルエツトしか見えないが俺を心配するその優しい声を聞き違うはずもなく、俺はその言葉に応えた。

「ん……、大丈夫。美代さん」

目が覚めた、今度ははつきりとそう自覚した。

寝転がっている場所が部室の床の上だという事もわかったし、枕代わりの物くらい用意してくれていてもいいんじゃないかと思えるくらい余裕もあつた。

「良かったあ。流石の槻実も一杯心配したよ」

会長にそこまで心配されると流石の俺も背筋が凍る思いですよ。

「今回の事は肝心な事に気付かなかつた私と鳥居槻実に責任があります。申し訳ありません」

「思い切り頭ぶつけてしまって、少し痛かつたです」

ばつの悪そうな顔で笑う美代さんと、苦笑いを浮かべる古屋は対照的だ。

「まったく。無茶をするのはオカルト研究会の習性とは聞いてたが、何も受け継ぐこたないだろうが」

きつと創設者の呪いだろう。自分から巻き込んだら気分が悪いから、向こうから巻き込まれてくれるような空気をここに染みつけてきたに違いない。

「ところで、あんた誰だよ」

あまりにも自然に会話に入ってきたからスルーしかけていたが、いつの間にか部室に見慣れない男が椅子に座っていた。

制服からこの生徒だというのはわかるが、背丈からして一年か？にしては態度がどこか偉そうである。短く切りそろえられた髪と睨むようなつり目が嫌でも目に付くほど印象的だ。

「なんだ貴様。俺の事を知らないのか」

訂正。

どこか偉そう、ではなくまんま偉そうだった。

しかも外見とは方向性がどこかずれた感じの。

「お前、先輩に貴様はないだろ」

ぴくつ、と眉が動いたのが見えた。

「……ほう。貴様は実は大学生なのかよ」

「江藤君、先輩は彼のほうです」

古屋が横から声を挟む。

「へ？」

その言葉を理解するのに僅かな時間を要した。

「おい灯。コイツはお前のクラスのだろ？ちゃんと黙っておけよ」

「別に私は調教師というわけではないので」

慣れた感じで古屋と会話を交わす。

「まさか……古屋の、弟？」

「年上だっかっていってんだろっが！」

声を荒げて主張するが、どうにもそうは見えないので仕方がないだろう。

「はあ……。江藤君、彼の名前は鳥居曉。この学校の生徒会長です。そして」

古屋が一度、言葉を切った。

切った理由になんとなく気づいた俺は、古屋が視線を向けたほうへ自然と顔が動いた。

「鳥居槻実の兄です」

「なるほど」

「てめえ、今何に対して納得した？」

何やらさつきから怒ってばかりだな、うちの生徒会長は。

「って、生徒会長！？だって、明らかにほら、あれじゃないか」

「似合わねえってんだろ、わかってんよ。内申目当てで生徒会に真面目ぶって立候補したらいつの間にかこんな事になってたんだよ。

ま、今は優秀な部下がいるから楽だが」

溜息をつく古屋の苦労がうかがえる。

「おい、何しにきたの」

そこに実の兄を前にして一切口を開かなかった会長がぼそりと言葉を漏らした。

「会長？」

その様子がいつもの会長らしくなかった。いつも超がつくほど明

るい少女が、今では暗がりでも丸まっている、そんな感じを思わされる。

それに加え、先ほどまで高校入学と共になめられたくないが為中途半端につっぱっている感じにしか見えなかった生徒会長も、真剣な眼差しを向けていた。成程、この顔つきならば生徒会長というのにも頷けなくもない。

「なあ、槻実。姉貴の真似事はほどほどにしておけて俺は言ったよな？」

今まで会長の家族構成というものを聞いた事が無かったが、どうやら兄のみならず姉もいるらしい。

そして姉に対する呼び名が同じという事で、この生徒会長に変な親近感が沸いた。

ただ、今それに浸っているわけにはいかないという事は、言葉のトーンによつて嫌というほど感じられた。

「真似事じゃないよ。槻実は、槻実がこうしたいからしてるだけ。お姉ちゃんは無関係ない」

「なあおさらわりいよ」

会長の反論も、最後まで言い切らせないかのごとく正面から否定された。

「真似事程度の遊びだったから好きにさせてきたが」

そこで一旦言葉を切り、俺の方に視線を向ける。

「姉貴の二の舞だなんて、冗談じゃ済まねえんだぞ。何も知らなさそうな素人を巻き込んだなら尚更だ」

どうやら俺の事を言っているらしい。俺自身、自分の体がどんな状態にあったのか正確に把握していないのだが、さっきの美代さんの様子や、部室に漂う空気からして冗談で済まされる程度の事ではなかったようだ。

「ちよつと待ってくれ。会長に姉がいるってのはわかったけど、二の舞ってどういう事なんだ？俺みたいな目にその人も遭ったって事か？」

俺のその質問に、場の空気が今までの比ではないくらい重くなる。

その空気を破ってくれる誰かの声をじっと待っていた。

「貴様みたいな目、なんてもんじゃねえよ。姉貴は死んだんだよ。八年前、この学校にあったオカルト研究会に巻き込まれてな」

「え？」

死んだ、なんて言葉をすんなりと口にする様子に、一瞬冗談か何かと思ってしまう。

しかし実際は、すんなりと出せるのは言葉だけで、その様子は未だに姉の死を受け入れられていない、そんな感情が見て取れた。

「この学校で、この研究会で、人が一人死んでいる。その事実を踏まえて改めて問うが、この研究会に入る気はあるか？」

机の上に置いてあった鞆から一枚の紙を出す。

それは、俺の名前が記されたオカルト研究会への入部届けだった。

「どういってもりだよ」

一度受理された書類をどうこうされようと問題はないだろうが、この状況はちよつとした脅しなのではないか。

「何、この研究会が存続できるかどうかってのは貴様次第っただけだ。今この場で、続けるか否かをはつきりしてもらおう」

「俺次第？」

「貴様さえ抜ければ、巡とかいう子も説得すりゃ抜けるだろ。そうすりゃ後は灯が抜けて残り二人。ほらもうオカルト研究会は存続できな」

古屋は黙ったまま何も言わない。俺とメグとの事は古屋からの情報か、それとも生徒会長自身の情報収集能力か。どっちでも変わりはないが。

「おにい、今は事情が違うよ。オカルト研究会は無くちゃいけないんだよ」

「事情？それこそお角違いだろ」

一度会長のほうに視線を向けた後、小さく鼻を鳴らし、再び俺の

方を向く。

「その事情とやらは俺達の世代の事情じゃない。つたく、先代の連中はこの学校で教鞭とってるのに何で気付かねえんだ。とにかくオカルト研究会解散後、俺がその事情とやらを報告する。後はあつちでなんとかしてくれるだろ」

この生徒会長の言い分はいちいちごもつともだ。今この学校の地下で何が起こっているのは知らないが、それは姉貴達の仕事だ。俺や美代さんにメグは、対応する術をもっていないし、古屋だっていわゆる護身術程度の事しかできないようだし。

一見すれば、会長にただ巻き込まれているだけのようにはしか見えぬのかもしれない。

「さて聞くが、この研究会に残るか否……」

「残る」

言い切る前に短い、しかしはつきりと意思をのせた言葉で割って入る。

周りからどう見られていようが、そんなものは関係ない。

ここは居心地が言い。だから残る。

それ以外に理由があるか。

「……馬鹿か貴様。今さっきまで床で死にかけていた奴の考えとは到底思えねえんだが」

死にかけてたという自覚が自分に無いせいかもしれない。だけど、ここで、この場所にはいさよならと告げられるほど軽いもんじゃないと俺は思っ。

「チツ、そうかよ」

舌打ちなんて、生徒会長のやる事じゃないだろう。こんな奴だとわかっていれば選挙の際に絶対不信任で票をいれてやったのに。

そんな不良生徒会長は、椅子から腰をあげて部室から出ていこうとする。

「灯、定期報告は欠かすなよ」

去り際にそれだけ告げて足早に去っていった。

「サトー君、サトー君サトー君！」

その瞬間、俺を大声で呼びながら会長が飛びついて来た。

勢いはあったが、俺が倒れるほどの衝撃はその小さな体では生み出せず、自然と抱きかかえるような格好になる。

「ちよ、会長！？」

「信じてたよ！うん、槻実には信じてたよ！サトー君ならきつとそう言ってくれるって」

満面の笑みで会長は早口で言葉を紡ぐ。

そんな顔をされたら引き剥がすわけにもいなくなってしまう。

「まあ、気に入ってなきや最初っから入りませんよ」

集まる度に今日のような事が起こるなら少し考え物だが、文字通りそれは追々対策を考えておくでしょう。

「それよりも、美代さんはいいのか？今日みたいな事、これっきりじゃないと思うけど」

地下であれだけ怯えていた美代さんを付き合わせるの気が引ける物がある。

「私は大丈夫です。今日みたいに悟さんが守ってくれますから」

あれは守ったって言えるんだろうか……。

まあ、こんなに素直に頼って貰えるというのは嬉しい事で、嬉しいからにはそれに応えられるよう頑張るしかない。

「それに古屋も、ありがとうな」

腕を組んだまま一言も喋らなかつた古屋にも礼を言っておく。

「私は、何もしていませんが」

そうは言うけど、古屋は元々生徒会側の人だ。あの場で、あの生徒会長の味方をしなければいけない立場の人だ。それなのに無言で中立の立場を守っていたって事はその分こちら側に味方してくれたという事だ。

「あ、まだ終わって無い。間に合ったあ」

そこにオカルト研究会五人目の人物が部室へとやってくる。今や四人目と五人目にちよっとした差ができてしまったが、その差がも

のすごい安心感をうみ、自然と笑いが込み上げてきた。

「え、え？私、どこか変ですか？体操服は着替えたし、靴はちゃんと上履きだし……」

「悪い悪い。メグはどこも変じゃないから安心してくれ。ただ……」
「気持ちよく笑える場所。俺が、ここに残りたかった理由。」

「平和だなあ、と違ってさ」

きっとオカルト研のそういう側面を味わったために、メグには何も知らないでいてもらう必要があるんだろうなと思った。

第十九話：坂の下で

場面は翌日へと移る。

夏休み初日の今日、ミーティングと称してオカルト研究会のメンバーが部室に集められていた。

今日はメグも出席だ。だから地下へ行くような事は無いはずだ。狭いながらも色々な設備が整っている部室は、補習によって疲れ切った心と体を癒すにはもってこいの場所だ。

先ほどまでは出席さえとれば勝手に退室してもいい綾の境遇を羨んでいた。今はこの寛ぎ空間を余すことなく実感できる疲れた体に感謝したい位だ。

「ふう」

飲み干した紅茶と入れ違いになるように、喉から溜息がでる。

その溜息はリラックスした時に出るものと、悩みがある場合に出るものを足して二で割ったようだった。

昨日現れた生徒会長を名乗る会長の兄……、会長の兄も会長としてどれだけ会長が好きなんだろうか。まあ、それはいいとして。

昨日の一件で、俺の中のオカルト研究会が大分様変わりしてしまった。

いや、元に戻ったと言った方が正しいか。

何年も前とはいえ、姉貴が率いていた組織。マトモであるはずがない。

地下の怪しげな施設と、金色の霊。それに封印だとかなんとか。そして一番気になるのが会長のお姉さん。

昨日の話を聞く限りでは……亡くなったらしい。それもオカルト研がらみで。

以前、会長がオカルト研を再興させようとした理由を聞いた時に俺の姉貴に憧れて、なんて言っていたが恐らくそれは嘘だろう。

憧れだけで、姉が死んだ場所に踏み込んだりする人がいるとは

到底思えない。

それを言うならば俺だって似たようなものか。
会長のお姉さんの二の舞になりかけておいて、俺は迷わずここに残ると言った。

何でだろうと頭を傾げ、すぐに思い当たる節があった。
きつと、楽しいからだろう。

夢を失い、ただ過ぎるだけの時間に身を任せてきた一年間。
暇に飽かしてオカルト研究会なんてものに顔を出して……。
見事に暇などとは縁の無い生活を余儀なくされた。

嬉しかったのだろうか、俺は。

事故の前後でがらりと俺を見る周りの目が変わった、変わったように感じた。

姉貴も、綾も、雄も。近しい人ほどそれを感じてしまう。

自分がこれほど弱い人間だという事に、今更ながら気づいたのだ。

正午過ぎから始まった活動は、普段の授業が終了する位の時間に終了し、解散となった。

とはいえ解散直帰宅するのは俺と美代さんのみで後は学校に用事を残しているらしく、まだ学校だ。

「今日は何だか元気がありませんでしたね」

その帰り道、隣を歩いている美代さんが声をかけてくる。

「ん、ああ。少し、考え事をしててな」

「悩み事ですか？」

「まあ悩み事と言えば悩み事だけど、どっちかというとなかなかと幸せな悩み事だ。心配されるような事じゃない」

「はあ、そうなんですか」

よくわからないという感じに首を傾げる。

その仕草が妙に可愛らしくて笑いがこぼれる。

それを見た美代さんは更にわからなさそうな表情をする。

「平和だなあと思つてさ」

「あんな事があつたのにですか」

「それもそうかと苦笑いする。」

どうにもあの事件は当事者とその周りでは認識にズレがあるようだ。

さて、夏の日差しはまだ数時間は勤務時間だ。

坂の下の分かれ道はどこかに寄るなら右に、素直に帰宅や買い物に向かうなら左にと、まさにこれからの予定を分ける分岐点だ。

しかしそこには分岐を遮るかのように、壁に寄り掛かつて煙草を吸っているスーツの男が立っていた。

「あれ……つて」

その姿に見覚えがあつた。

「よう、悟くん。久しぶり」

まるでこちらに姿を確認されたのを見計らつたようにその男から声がかかる。

「やっぱり先生か。お久しぶりです」

「今はプライベートの時間なんだから先生はやめてくれよ」

短く綺麗に切りそろえられた髪に、びしつとしたスーツに身を包んだ彼は誰から見られても好印象を与えている。

整つた顔立ちに浮かべている人の好きそうな笑顔がその印象をさらに強いものにしていた。

「どなたですか？」

美代さんがまたもや表情にはてなをのせて訊ねてくる。

「おっ、君が例の平坂さんか。被奈から聞いてた通り、べっぴんさんだなあ」

「は、はい。ありがとうございます」

はっはっはとわざとらしい大げさな笑い声を出しながら、スーツの中から一枚の名刺を取り出して美代さんに渡す。

「ど、どうもありがとうございます。……坂下、賢一郎さん。お医

者……さんなんですか」

「そう、お医者さんだ。まあどんな医者かと言うとスーパーお医者さんだ」

あ、美代さんがちよつと引いた。

でも確かに二十代にして医療界ではちよつとした有名人で、自分で言ってしまうのはどうかと思うがスーパーな医者なのだ。

「ついでに言うと、俺の主治医にして姉貴の彼氏だ」

「そう、いずれは悟君にアニキと呼んでもらう男だ」

「呼ばねえよ……」

えー、と子供みたいに不満を隠さずに出す。

「彼氏さん……彼氏さんというと……」

美代さんがどんな意味か考えている。

「君にとつての悟君みたいなものさ」

「おおつ、なるほど！」

「いやいやいやいや」

さすがに結婚を前提に、みたいな付き合い方をしてはいない。そもそも俺と美代さんは付き合っただけでもないし。

「それで、今日は何でこんなところにいるんですか」

「暇だね」

「働けよ」

とても医療界の期待のエースとは思えない。

「ま、それは冗談として。悟君の様子を見に来たんだよ。状態は袷奈からちよくちよく聞いてるけど、どうにも自分の目で見てみない事にはね。この前久々に発作も起こったみたいだし」

「ああ……」

こつ言われるとやっぱりこの人は医者なんだなと思いなおしてしまつ。

「悟君はちつとも病院で診察されに来てくれないから、こつして出向いて来たんだよ」

「まあ……たまに姉貴に診てもらってますし……」

煙草の煙を吐き出しながらそれもそうかと笑う。

「それにしてもよく俺が帰る時間わかりましたね」

「ふっ、一流の医者ともなると人一人の行動を調べる事などたやすい事なのだよ」

この人は本当に、医者なのか？

「それでどうなんだい？調子の方は」

どう、とは俺の足の事だ。

「どうにもこうにも、相変わらずですよ」

そうか、ともう一度深く煙を吸い込む。

「俺はスーパーな医者だからな。いつか必ず治してやるさ」

「期待してますよ」

任せろ、と自分の胸を叩く。

力加減を間違えたのか、煙草の煙にむせて咳きこむ。

呼吸を整えながら先生はちらと美代さんを見る。

「どうやら楽しくやってるようだし、オジサン安心したよ。良い彼女見つけたなこの色男め」

彼女じゃない、と訂正するのも面倒だし、楽しくやっているというのも事実なので頷くだけの軽い返事をする。

そうかそうかと機嫌が良さそうに携帯灰皿に吸い殻を押しこむ。

それと同時に先生の携帯の着信メロディが鳴り響く。

「おっと悪い」

そう断って、携帯を取り出して通話を開始する。

誰からの着信か……確かめもせず。

「はいっ、ごめんなさい！ごめんなさい！すぐ戻るからっ」

ひどく焦った様子で平謝りしてから通話を終了させる。

「暇だったんじゃないんですか……」

「いや俺的には暇だったんだけどね。悟君のお姉さんはやっぱり怖い怖い」

はっはっはと嘘くさく笑いながら、傍らに止めていた自転車にまたがる。

「それじゃ、たまには病院に顔出してくれよ」

ガツと強く地面を蹴って加速し、橋の向こうへと去っていった。

「さ、悟さん！」

その姿が消えてから美代さんがあわてたように声を出す。

「わ、私てつきり車で来ているかと思つたので物凄く自転車に違和感を感じてしまいました！」

あわあわと妙な取り乱し方をする美代さんにそつと教えておく。

「あの人、免許もってないんだよ」

本人曰く、取りに行く暇がないという事らしい。

二十四時間という決められた一日は、彼にとっては短すぎる物であるようだ。

「まあ、どこかに行く気も削がれた事だし……帰るか」

そうですね……と、ほとんど上の空で美代さんが答える。

美代さんの常識のほとんどは一週間程度で固められたものだし、しかも固めたのは姉貴。

それだけにその常識およびそこからくる認識と違う事と出会うと……例えこんな些細な事でも思考が止まってしまつてしまうらしい。

姉貴による常識が、こう言つた事で余計変にねじれてしまわなにか心配である。

「あ、良い所に！おーい、江藤くーん」

今日はよく呼び止められる日だなあ。

今度は坂の上から俺を呼ぶ声が聞こえた。

振り返つた先には見知らぬ……でもない、確か陸上部の三年生。名前は忘れた。

それと……、

「綾？お前どうしたんだよ」

その先輩に肩を貸されながら一緒に降りてくる制服姿の綾がいた。

「綾さん！怪我したんですか！？」

その姿を見てハツとした美代さんが慌てた様子で綾に駆け寄る。

それに驚いたのか綾まで慌てた様子で顔の前で手を振って否定

する。

「ただちよつと捻っただけよ。先輩が大袈裟なんですよ」

「大袈裟にもなるわよお。大会も近いのにエースが怪我だなんて」
八月のお盆を過ぎたあたりに、陸上の大会がある。

さすがの巫山高校といえど、全ての部活が全国区なんてわけではなく、陸上部もその一つだ。

決して弱小というわけでもないが、それだけに中堅から抜け出せず結果は毎年パツとしない。

しかし去年からは違う。

全国各地の陸上強豪校からの誘いを受けていたにも関わらず巫山に進学してきた綾がいるからだ。

去年でも部内で頭一つでた成績を出していた綾が、今年どこまでいけるのかと期待する人は少なくない。

「ま、あまり気合いれて練習していると、かえって休みどころを忘れて台無しになるからな。ちょうどいいんじゃないのか？」

「そうそう。江藤君はいい事をいうなあ」

うんうんと頷く先輩は肩に回された綾の手をほどく

「じゃ、後は任せた！自宅まで送ってこうかとおもったけどお、江藤君に引き渡したほうが安全だね」

「別に、一人で帰れます」

肩に回してた手を解かれたのをいい事に、自分から歩き出そうとする。

「っ……………」

そして最初の一步で痛みにも体のバランスを奪われる。

「ほら、言わんこつちゃない」

倒れかかってくる綾を受け止めようと構えていた俺を、

「あわっ……………」

ぐりんと避けて美代さんに抱きつく。

不意をつかれた美代さんはその勢いそのまま自分を中心に綾を回転させてしまう。

「あつ、いたつ！いたあーっ」

「何やってんだよ……」

その結果、必要のない痛みを受けてしまう事になった。

「あらあらあらあ。何してるのぉ。悪化しちゃ……ははあん」

妙な笑顔を見せ始めた先輩は、急に進路を反転させあらあらうふふと笑いながら去っていつてしまった。

「……なんだあ？」

「うっ……」

綾はまだ痛み悶えている。

「ったく。美代さん、悪いけどうちまで綾引っ張ってやってくれ。

そんなんじゃ飯も作れないだろうから今日は皆で食うぞ」

「ごめん……悟」

珍しく素直な謝罪をする。

「飯の借りは飯で返してくれればいいさ」

美代さんは体格の違う綾を一生懸命支えている。

少々不安げではあるが、今のところは任せてしまおう。

俺は増えた分も賄える食材を買いに行くとしよう。

第二十話：少女の傷

夏の日射しはいつだって容赦はない。

体から水分をどんどん搾り取って、油断なんてしていたらその場でバツタリなんて事もある。

補習最終日が終わり、オカルト研の活動も今日は休み。

午後の空いた時間に付き合ってくれる人のアテはことごとく外れ、時間の使い方を見失っていた。

あまりにも暇すぎるために家に帰る気にもなれず、補習が終わった後もそのまま椅子に座っていた。

そして何気なしに窓の外に視線を向けると、ちょうどサッカー部の練習が目に入る。

「こんな中でやってたんだよなあ……」

風通しが良くしてある教室の中でもこの暑さ。

きつと練習に励む彼らは灼熱とも言える暑さの中にいるんだろう。

「球蹴ってりゃ、夏よりアツクなるってか……」

以前の自分もどれだけ暑かろうが練習が嫌になつた事はない。

この学校に来てるやつはみんなそういう類の人間なんだろうから、気温なんて大した障害にならないだろう。

ただ体は正直で、熱射病は気合いでなんとか出来るものではない。

「ま、この年にもなつてその辺りの調整できないんじゃないや話にならないよな」

そんな偉そうな事を言いつつ、練習に励む姿をただ見下ろし続けていた。

不思議なくらい落ち着いている。

前までの自分ならきつと、数分も見ていられずに目を逸らしただろう。

部活を辞めて数週間程度しか過ぎていないが、その間に大分気持の切り替えはできているようだ。

「ん……、休憩か」

練習に励んでいた集団が一気に端の方へと走って行き、各々熱くなりすぎた体を冷ましていく。

その傍らで、ぱたぱたと忙しそうに動くメグの姿が見える。

他にも何人かマネージャーらしき人は見えるが、メグの姿は実際目立っていた。

マネージャーにもマネージャーの技というものがあるのだろうかと、メグの姿を視線で追いかけていたら、

「……っ」

目が合った。

三階から見下ろしていたというのに、ぱつちりと視線が交差する。

驚いて咄嗟に顔を教室に引つ込めた後に、しまったと焦る。

これではサッカー部じゃなくてメグを見ていたと言っているようなものではないか。

とにかくもう一度顔を出して、手でも振って取り繕っておくかと思ったが、

「あれ、いないな……」

ちょうど練習が再開され、マネージャーの方々は死角に入ってしまっただけで、次に見えなくなっていた。

仕方なし、次に顔を合わせた時何か言われたらそこでフォローしておく。

「帰るか……」

それ以上練習を見る気にもなれず、荷物をまとめて立ち上がる。

誰もいない教室に、椅子を引く音だけが響いた。

外はあれだけ騒がしいのに。

僅かな寂寥を感じながら教室の外へと歩いて行く。

扉を開けようと片手を伸ばす。

「先輩、ひどいですよ！無視するなんっ」

その手が扉に届く一瞬前、自分の意思とは無関係に開き、伸ばした手が空ぶる。

そして空ぶった先には、突然目の前に現れた少女の方に伸びて行く。

ふにつとした感触。

緩衝剤としてよく入っているプチプチのアレと硬さは違えどつい夢中になってしまうような感触……こいつぁ……。

「マネージャーパンチ！」

ずん、と今まで感じていたものと逆の感触が俺の腹にめり込む。

「ああっ、つい四十八のマネージャー技の一つを先輩につ」

マネージャーにパンチはいるのか……。

「でも先輩が悪いんです。策士です！教室から私と目が合うまでじつと視線でおつて、いざ目が合えばさつと隠れて！そうしてなんだかこのままじゃ気分が悪いなと私に思わせて、教室まで出向いた所を、所を、所をするつもりだったなんて……っ」

そうだったのか、俺！

なわけねえよ。目が合った後顔を引つ込めただけでこんな……良い目？痛い目？に会うなんて予測してない。

「でも……先輩になら、いいよ？」

ついぐらつときそうな台詞ですが、すでに鳩尾に一発くらつている俺はぐらつときているのは視界だけです。

「でも……先輩の近くには平坂さんの……あの立派な、立派……なそ、そうか。すでに大きいには飽きて……飽きるほど……あわわわ」

ああ、いかん。どんどん俺に変な属性が追加されていつている。

やばい、弁解しろ。弁解しろ俺。

早く俺の呼吸よ復活するんだ、復活するん……。

「あれ、先輩……。先輩！？」

君の魅力に、俺もうクラクラ。主に意識、が。

「ん……」

ジリジリと肌を刺す日差しに目が覚める。

あー、あつたかいあつたかいあ……、

「あつちいよ！」

横に転がって容赦のない太陽光から逃れる。

「あ、先輩起きました？」

少し離れた所にある席にメグが座っていた。

日陰で、爽やかな風の通り道な絶好のポジションに。

「俺を茹であがらせようとしたのはキサマかあ！」

「飲み物いりますか？」

「おう、いたどころ」

あつさり買収される。

「で、どうして俺を太陽光の餌食にしようと思ったんだよ」

下手したら起きなくなる所だったと付け足す前に「その辺りを

見過ごす程ダメマネしてません」と言い返される。

「それに先輩は少し干されるくらいがちょうどいいんです」

あまり聞かないメグの低いトーンの声は、妙な迫力があつた。

「いつだって、はつきりしない男の人は周りから嫌われちゃうもの

なんですよ」

声はそのままに、表情だけどこか拗ねているような色を見せる。

「いやでも、答えは待ってくれて言ったのはメグの方からじゃないか」

「いか」

「じゃあ今答えられるんですか？」

メグの迫力を押し返そうと口答えをしたが、すぐさま跳ね返される。

る。

結局、自分の優柔不断さを再確認させられただけだった。

「まあ、今はその事を言ってるんじゃないんですけどね」

椅子に座ったまま俺を見上げる。

自然と瞳は上目遣いになるが、女の子らしい魅力はそこにはなく、責めるような視線だけが向けられていた。

「私、昔から不思議に思ってたことがあるんです」

視線を外しながらメグは喋る。

「いつまで先輩達は、家族ごっこを続けるつもりなんだろうって」
ペコツと、握っていたペットボトルから音が鳴った。

「先輩は知らないと思いますけど、私が先輩に告白したあの日。部活に戻ろうと思ったなら綾先輩に呼び止められたんです。聞かれてたってわかると、急に恥ずかしくなっちゃって、逃げようとしたんですけど綾先輩本気で追いかけて来て……。走りで綾先輩に勝てるわけもなく捕まっちゃったんです。それでね、おかしいんです。ここまですて私を追いかけて伝えたかった事が……」

一拍、言葉を切る。

「あたしと悟は家族だから、気にしないでいいって」

吐き捨てるように言い放った。

「なんですか、それって感じです。本当に、なんなんですか。二人は兄妹なんですか。雄先輩と合わせて三つ子なんですか。法律上結婚できない間柄なんですか!？」

一気にまくしたてるメグの迫力に、俺は何も言えずにいた。

メグは溜めこんでいたものを吐き出すように続ける。

「私、後悔しました。それまでは先輩達二人は好き合っていて、いつか結婚して家族になる事を決めていて、その前借りのように間柄を家族って言うっているものだと思っていました。素敵だな、二人の仲を祝福できたらいいなって思っていました。だから後悔しました。先輩が退部するって聞いて、動揺して、告白してしまった事を」

俯きながら「本当は、最初に会った時から好きだったんですよ」と恥ずかしそうに告げる。

でもその表情もすぐに怒りの色に塗りつぶされる。

「なのになんで、私の告白を聞いていた綾先輩があんな事を言うん

ですか。家族だから、気にしなくていいから、なんて」

喋り続けて疲れたのか、呼吸が荒い。

「私、お父さんが好きです。お母さんも好きです。家族が大好きです。もしも先輩が私の恋人になったらとしても、先輩より家族のほうが好きかも知れません。誰だって、そういうものだと思いませんか？」

メグの言う事は良くわかる。

失ってからより強く、自分がどれだけ大事に思われていたか、自分がどれだけ大事に思ってたかを感じるようになった。

「だから、怖いんです。先輩が私を好きになってくれたとしても、先輩は私より綾先輩を大事にするんじゃないかって。本当に家族ならしいんです。当然の事なんですから。でも二人は家族じゃないんです。血の繋がりなんて無いんです。私がどんなに想われたとしても、それ以上の想いを常に違う女ひとに向けられている」

強く、拳が握られる。

そして瞳にはうつすらと涙が浮かんでいた。

「どんなに頑張っても、届かない！一番になれない！独占欲が強いヤツだって言われてもいい！いつそ嫌われた方がいい！諦めさせてもくれない、届かせてもくれないなんて、私耐えられない！」

知らなかったじゃ済まされない。

そこまで俺は、彼女を傷つけていた。

その痛みで、泣かせていた。

「先輩、答えてください。先輩にとって綾先輩は恋人なんですか、友達なんですか」

当たり前だが家族、という選択肢はメグは選ばせない。

そこで気づいた。俺は今まで家族という言葉を、何かの言い訳のように使っていたという事に。

まわりの冷やかしをあしらう体の良い言葉として使っていた。

綾に対して家族と同等の気持ちを抱いているのは事実。だけど、綾とは家族じゃないのもまた事実なのだ。

それ以外の表現を、俺は見失っていた。

「……良かった」

答えを見つけれず、黙っていた俺を見て何を思ったのか、メグはそう呟いた。

「ここで恋人だーなんて言われたらどうしようかと思いました。今の私じゃ、二人の応援なんてしたくても出来そうにないですから。でも、何も言わないって事はまだ私にも可能性ありますよね？今までは二人のためにとか考えて、勝手に自分で納得させてきてたけど、もう違います」

椅子から立ち上がるその姿は、今までのメグとはどこか雰囲気が変わった。

「これからは本当に納得できる方法を探します。だから先輩も、私を納得させる答えを探してくださいね」

そうして足早に教室から去っていった。

結局俺は、メグに何も答えてやる事ができずに、ただ立ち尽くしているだけだった。

第二十一話：憧れの日

それは、今から六年前。

一人の少年が、一人の少女に負かされた事により始まった。

暑い夏の日。飽きる事無く降り注ぎ続ける日差しは、市営のグラウンドをまさしく灼熱へと変えていた。

誰もがその暑さになだれて、視線を地面に向けたくなくなるような熱気の中で、大勢の観衆の視線は一人の少年に向けられていた。

少年の名前は江藤悟と言う。

地元のサッカー団の選手として、彼はちょっとした有名人だった。

入団直後からその才能を惜しむことなく見せつけ、今では県外にもその名前が届く事がある。

その彼の元にボールが大きな弧を描いて飛んできた。

試合は同点で試合終了を直前に控えていた。

ラストプレーになると踏んで、ほぼ全員で攻撃に出ていた相手チームからボールを奪い見事なカウンターを仕掛けたのだ。

「信じてたぜ！綾っ！」

自分の元にボールを届けてくれた幼馴染の少女に礼を言いながら、少年はひた走る。

その時点で既に残すはディフェンス三枚と、キーパーのみ。ボールを奪いにくるのを一人、二人と難なくかわしていく。

残りはキーパーと……。

彼は既に逆転できるという事を確信していた。

自分を信じて、信じた通りにボールが動く。その先に。

試合は終わった。思った通り負けた。

予想外だったとすれば、延長戦までもつれこんだと言う事。もつと点差の開く試合になると思っていたのに。

「前に出してくれてたら勝てたかもしれないのに……」

小さな声でぼやく。誰にも聞こえないように。

でもよく考えたら、私が守ってたからこの点差で済んだのかも
しれない。

前も後も、安心して任せられない。任せられない。

私がやりたかったのは、こんな事だったのだろうか。

少し離れた所で、チームメイト達がお互いの健闘をたたえあっ
ている。

でも、誰も私の事を話していない。時折私に意地の悪そうな視
線を送ってくるだけだった。

男の子の中に一人紛れ込んだ私。

半ば実力があつたせいで、私はいつだってこんな扱いを受けて
きた。

嫉妬とか、そういう。

「そつえば、向こうのチームにも女の子いたなあ」
ふと思いつく。

男の子だらけの中に、違和感なく溶け込んでいた女の子。

私と違い、チームから頼りにされ必要とされていた。

「いいなあ」

思わず溜め息が出てしまう。まさしく自分が望んでいたのはああ
いうのなのだから。

私はチームの中で一人。チームの中なのすら怪しい。

試合後に必ず湧き出る憂鬱に、視線を下に向けていた。

「いたあーっ」

いきなり大声が響き、気分が沈んでいた私は思いつきり驚いてしまっ

「何だろうと思って顔をあげると、声の主がこちらへ猛然と走ってきた。

江藤悟、さっきまで試合をしていた相手チームの男の子だった。「え？え？」

回りの注目を集めながら彼は私の所へとどんどん近付いてくる。

集まった注目はそのまま私にも向けられて、うるたえてしまう。「さ、悟君……。いきなり押しかけちゃまずいよお」

その後ろに隠れるようにあの女の子もいた。

「な、何か用？」

勢いに負けて、後ろに下がってしまいそうになる。

その瞬間、両手を握られて目を輝かせながら言った。

「お前、すげーな！あそこで止められるなんて思ってた！」

きつと、私が恋に落ちたのはその瞬間だった。

誰からも認められずに一人でサッカーをし続けていた私には彼が眩しくて仕方が無かった。

そして私は、その一ヶ月後所属していたクラブを抜けた。

倒れ込んだベッドが軋む。

自分がした事がどれだけ恥ずかしい事か。時間が経つ毎に自己嫌悪が沸き上がってくる。

結局あの後部活には戻らずそのまま無断で家に帰ってきてしまった。

ちよつとしたストーカーだったかもしれない。

「そっか、昔からか……」

ずーんと再び自己嫌悪にのしかかれた。

でもお陰で先輩と、知り合いから友達くらいにはステップアップできたと思う。

でもそのステップアップと同時に知った事があった。

それは先輩の近くに行こうとすればおのずとわかる事実だった。

二人の先輩の間柄。

試合後に先輩に会いに行くと必ず先輩の後ろに隠れるように綾先輩がいた。

今からじゃ想像できないけど、昔は随分人見知りが激しかったという印象がある。

正直な話、二人が中学に上がるまでは綾先輩に対して強い印象は持っていなかった。

でも、それ以降二人はすごかった。

先輩はそのままサッカーで、綾先輩はサッカーを辞めて陸上で通う学校は別だったけど、そんな事関係なく二人の実績はすごかった。

その頃から綾先輩に憧れを感じていた。

二人の関係はすぐに噂になりだした。私にとっては噂ではなく確信だった。

そして私が持っていた二つの憧れは、やがて一つに纏まっていた。

それぞれの夢に向かって走っていく二人の姿に。

憧れは恋心を越え、私は二人を応援し続ける事を決めた。

だというのに……。

「綾先輩がそれを否定してどうするの……」

あれ以来、憧れと恋心の二つでバランスを保っていた所に違うものが迷い込んできた。

それは希望。

もし本当に二人にそういう感情が無かったとしたら………という考えが頭の中に生まれ、希望に後押しされた恋心が憧れを超えてしまった。

でも結局、先輩達にとってお互いは誰よりも大事に思ってるのは確かだ。それが私が抱いてる恋心のようなものじゃないかもしれないけど、とても強いもの。

それにどうしても勝てる気がなくて、どうしようもなく悔しかった。

その想いをあろうことが先輩の前で吐き出してしまった。

「うっうー……」

結局私はいくら言い訳を重ねても自己嫌悪から逃れる事が出来なかった。

だけど吐き出したおかげで少し得た事がある。

憧れてるからとか、お似合いだからとか言って、自分の気持ちを抑えてたのは本当に正しい事だったのかという疑問と、それならばがんばってもいいんじゃないかという意思。

「よしっ、気合！気合いれろー！」

思い切り立ち上がり気分を入れ替える。

今の状態に満足いかないのなら、自分が動いて何かを変えてみせる。

どう動くななんて予想もつかないけど、今より悪い方向にはいかないはずだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7432c/>

第六感の彼女

2010年10月28日04時42分発行